

天台四教儀講話

10
258

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5

始



10-258

天合四教儀講話

自序

四教儀は新羅の諦觀の著で、天台宗を學ぶものは、誰でも此の本から這入るのが一般である。此の四教儀が、十不二門か、或は西谷名目か、大體斯ういふものが、天台學入門として推さるべきもので、中でも四教儀が一番廣く用ゐられたものであることは、言ふまでもない。天台學入門といふけれども、天台學は殆んど一般佛教を學ぶもの、頭に入れて置かねばならぬもので、天台學即ち大乘佛教通論と言つてもよいものである。此の意味に於て、四教儀は、大乘佛教入門と言つてよからう。此の

自序



大正
7.5.10
内交

書の通俗講義が、佛教の初學者に、多少の利益を與ふべきことは疑なきこと、思ふ。けれ共本講義は、私が今から十餘年前に書いたもので、内容も決して完全なものではあるまいが、然し多少修正を加へて、世に出すことにした。不完全と言つても、強ち全く無用のものでもあらまいと信ずるからである。

大正七年三月

於南無山房樓上

境野黄洋識

天台四教儀講話目次

緒言……………一頁

一、五時八教概説……………九

二、化儀四教……………三二

一、頓教……………三四

二、漸教……………六七

1、鹿苑……………六七

2、方等……………八六

3、般若……………一〇一

三、祕密教……………一四

四、不定教……………二二

五、法華及び涅槃……………三五

1、法華……………三五

目次……………一

2、涅槃.....一六五

A、方等の四教と涅槃の四教.....一七四

B、五時説法と五味.....一七七

三、化法四教.....一九一

一、三藏教.....一九一

1、三藏の意義.....一九一

2、苦 諦(二十五有).....二〇〇

A、地 獄.....二〇六

B、畜 生.....二一四

C、餓 鬼.....二一六

D、阿修羅.....二二〇

E、人 間.....二二三

F、天 上.....二二五

3、集 諦(見思二惑).....二四八

4、滅 諦.....二五七

5、道 諦(三十七道品).....二五八

6、賢聖階位.....二七一

A、凡 位.....二七三

B、聲 聞.....二八五

C、緣 覺.....三〇九

D、菩 薩.....三一六

二、通 教.....三三三

1、通の意義及び三乘共の十地.....三三三

2、受 接.....三五一

3、藏通二教の同異.....三五五

4、大小共説の理.....三五七

三、別 教.....三五九

1、別の意義.....三五九

2、賢聖階位概説.....三六三

3、五十二位.....三六五

四、圓 教.....三八〇

目次

1、圓の意義……………三八〇

2、圓教の階位……………三八一

 A、五品位……………三八五

 B、六根清淨位(十倍)……………三九五

 C、十住位……………三九七

 D、十行位……………三九九

 E、十廻向、等覺、妙覺……………四〇〇

 F、六即……………四〇二

3、二十五方便……………四〇五

4、十乘觀法……………四一一

天台四教儀講話目次終

天台四教儀講話

境野 黄洋 著



言

天台宗の支那に始めて起りたるは、今を去ること凡そ一千三百年ほど以前のことにして、恰も本邦にては、佛教が百濟より傳來したる前後のことなり。此の宗は智顓法師の大成したるところにて、法師は三十八歳より、台州の天台山に登りて此處に住じければ、之を尊稱して天台大師といひ、直ちに其の人の名を呼ばざるは、之を尊ぶなり、天台とは山の名を以て稱するなり、其の宗を天台宗といふなり。然れども天台宗は、全然天台大師より始まりたるにはあらずして、其の前に慧文、慧思の二禪師あり、天台大師は即ち慧思禪師の弟子なり、故に正しくは慧文禪師を天台宗の祖とすべし。慧文禪師は印度の龍樹菩薩の『大智度論』、『中觀論』を見て、天台宗の奥

天台四教儀講話

二
義とする。三諦三觀の旨を悟れる人なり。慧思禪師は其の弟子にして、慧文の觀法を傳受し、之を天台大師に授けたり。天台大師は、天台山に入りて後數年、陳帝(此の時支那は陳と隋とに分れたり)の請によりて山を下り、『智度論』『仁王經』等を講じ、帝の三拜を受け、之より六年の後、隋の文帝の開皇五年(時に陳既に亡ぶ)に、帝の弟晉王廣(後帝位に即く煬帝是也)の請によりて、之に菩薩戒を授く。晉王則ち大師に智者の號を與へたり。後世智者大師と稱するは之がためなり。開皇十三年、五十五歳の時、荆州(大師の出生地)に玉泉寺を建立し、明年此の寺にて『法華玄義』(十卷)と『摩訶止觀』(二十卷)とを説けり、之に『法華文句』(二十卷)を加へて、之を天台の三大部と稱す、『文句』は開皇十一年に、光宅寺にて説きしなり。天台宗は此の三大部によりて、全く大成せられたるものにて、一宗として成立したるは、一に大師の力なれば、大師の名によりて、宗名をも天台宗と呼ぶに至りしなり。大師は其の後、天台山に歸り、開皇十七年十一月、六十歳にして入寂せり。

天台宗の教旨は、之を大別すれば、教相門と、觀心門との二大部門となるべし。此の書亦此の二大部に分れ居るなり。教相門とは天台宗の道理の組立を説きしにて、觀心門とは、其の道理によりて、之を實行する、實際修行の旨を示したるなり。而して天台大師の三大部の中、『文句』は『法華經』の文を註釋したるものにて、『玄義』は教相門を明し、『止觀』は觀心門を示したる者なり。大師の弟子に灌頂あり、章安大師と呼ぶ。智者大師の三大部は、皆章安の親しく聞きて記したるところにて、智者大師の自記にはあらず。章安また天台山(寺を國清寺といふ)にて入寂し、これより智威、慧威、玄朗と傳統相續し、玄朗の弟子に湛然あり、荆溪尊者といひ、妙樂大師といふは此の人なり。智者大師よりは百五十年前後の人にて、支那にては唐の玄宗の頃、法相、真言、華嚴、禪宗の盛時、我が朝にては恰も奈良朝の佛法繁榮の時に當れり。『法華釋籤』(十卷)、『法華疏記』(十卷)、『止觀補行傳弘決』(十卷)等、三大部の註を造り、其の他、『十不二門』、『金鉉論』の如き、亦頗る名を知らる。蓋し智者以後、荆溪あるは、孔子に孟子あるが如しといへり。荆溪の弟子に道邃あり、之より三傳して、元琇となり、荆溪の滅後、凡そ六十年にして、武宗皇帝の會昌五年、破佛の勅ありて、佛教は一時に廢滅に歸したりしかば、天台宗の書籍も、此の時多く亡失せり。元琇の下に清疎あり。疎の弟子に志固、義寂の二人あり、山外山家の二派は、此の時より分れたり。志固は山

外の祖にて、此の義は天台の邪義といひ、正義を傳へたるものは義寂より、義通、知禮等を経て後世に至る山家の流なりとなせり。知禮は四明山に居りしを以て、四明尊者といひ、山外の義を摧破するを以て其の任とし、「十不二門指要鈔」の如き、「四教儀」と共に今日盛に世に用ふるところなり（知禮は荆溪以後一百五十年ばかり、本邦藤原朝の中世の人なり、源信僧都嘗て廿七條の疑問を書して答を四明に求めしことあり）此の「四教儀」の著者、諦觀は義寂の弟子なり。

我國の天台宗は、今より一千餘年前、傳教大師最澄之を傳へたるなり（桓武天皇延暦二十四年）。大師は入唐して、荆溪の弟子道邃和尚に學びたり。大師又眞言、禪、大乘戒等をも支那にて受けたれば、之を四種相承といひ、我國の天台宗は、四明の流と異にして、四種の宗を合して一宗となし、其の觀心のさまも、却て山外の義に同じきが如しといふ（然れどもこれには、今日なほ學者間に異論ある所なり）。勿論これは傳教大師以後、慈覺大師、智證大師等入唐して盛に密教を學び、天台の學と調和したるより、愈大成するに至りしものなるが、徳川氏の時に至り、今より百五十年前、妙立といふ人と禪宗の僧なりしが、後天台四明の學に志し、其の弟子靈空に至りて、天台宗の弊害

を惡み、從來の叡山の天台を破して、四明の學を盛にし、之より我國天台の學風一變して支那四明の風に化したりといへり。今日「四教儀」「十不二門指要鈔」等を以て、天台を學ぶの入門となすは、實に之に始まりしなり。當時靈空等に反對して、本邦天台の古道回復を唱へたるは、顯道、眞流等の人々なり、今眞流、敬光の弟子、敬彦律師の「續山家學則」の一節を左に引き、參考に供すべし。

山家二祖修禪大師（義證大師の弟子）ハ、「天台宗義集」（勅撰）ヲ造テ、本宗ヲ翼賛ス、爾シヨリ以來、山家ノ學生ハ、多ク此「義集」ヲ學習ス云々、元祿以來、異端起テ、異朝末師ヲ尊信シ、「諦觀錄」ヨリ入學スル新風盛ナリ、本朝二祖ノ勅撰ヲ棄テ、高麗夷僧ノ餘涎ヲ嘗ル、信ニ鄙劣ノ甚キ、國辱トモ成ルベキコトナリ、云々。言激に過ぎたれども、亦本邦天台古風の一端を知るべし。

今便宜のため、天台宗列祖の系統を表示すべし。

龍樹菩薩（印度）—慧文（支那）—慧思—智者大師—章安大師—智威—慧威—玄朗—荆溪湛然—

廣修—物外—元琇—清疎—義寂—義通—四明智禮……

「道蓮」

日本
傳教大師・義眞—智證

山外
「諦觀(本書の著者)」
志固—晤恩—源清—孤山智圓(本書の開板者)

天台四教儀

天台は天台宗のことなり。○四教儀とは天台宗には、五時八教といふことあり、(後に詳なり)八教とは化儀の四教、化法の四教なり、今四教儀の四教は、此の二つの四教を兼ねていふなり。儀は儀式にて、即ち判釋の儀式なり。判釋とは佛一代五十年間の説法を部類分けして、其の高下深淺の次第を定むるなり。天台宗にては、此の佛一代所説の法を分類して、次第を定むるに、化儀化法の四教の儀式、即ち仕方を用ふるなり。今本書は天台の見識にて、佛説を分判し、説明せる書なれば、「天台四教儀」といふなり。

(参考)智者大師の著「四教義」(十二卷)あり、全く此の書と別なり、混すべからず、故に本書を「諦觀録」ともいふ。「續山家學則」に云く、「諦觀ノ『四教儀』ノ如キハ、其

義趣全ク剡川ノ『八教大意』ニシテ、稍文字ヲ改竄シタルノミナリ」と、剡川は荆溪大師の高足なり。

高麗沙門諦觀録

高麗の沙門諦觀録す。

高麗は國名、朝鮮なり。(朝鮮は當時、百濟、新羅、高麗の三國に分る、高麗の地は、今の滿洲なり。)○沙門は梵語にして、出家のことなり、譯すれば勤息となる、修行者のことなり。修行して煩惱を息むる故、勤息勤とは修行して善をつとむる意といふなり。○諦觀は著者の名也。○録は記しとむること、三大部等の中より、要領を記しとめしをいふ。

(参考)此には著者の名を出せしなり。諦觀法師は高麗の人にて、前にいひし如く、義寂法師の弟子なり。始め支那にては、唐亡びて五代となり、戦亂相つぎて、儒佛二道共に大に衰微し、佛教にても、密教華嚴、禪宗、法相等の如き諸宗、一時に悲況に沈みたりしが、五代後梁、後唐、後晉、後漢、後周の世を過ぎて、宋に入るに及び、宋の太祖の代に、吳越王弘俶(忠懿王といふ)なる人あり、頗る禪宗に歸し、永嘉

八
(地名)の玄覺天台宗の人にて禪門を兼ぬの『永嘉集』を讀みて、『同除四住』といへる語に至り、(四住のこと後)之を解すること能はず人あり、此の語もと禪宗の語にあらすして天台の語なり、宜しく天台宗の義寂法師に問ひ給ふべしと告げしかば、之によりて義寂を召して之を問ふ、義寂答へて曰はく、これは三大部の中、第一の『法華玄義』に出でたる語なり、然るに三大部は、會昌の難より唐末の亂に遇ひ、書籍散失して、此の地殘闕を存するのみなり、唯海東高麗國盛に此の教を研究するが故に、全書彼の地にありと、王之を聞き、則ち使を遣はして三大部を求む、高麗王、よりて諦觀法師を撰び、三大部を持ちて支那に赴かしむ、當書吳越王、又天台の教籍を求めんがため、使を日本にも遣はしたりとの説あれ共、誤りなるべし、諦觀後、義寂の弟子となりて、支那に留まり、義寂と共に螺溪の定慧寺に居り、十年にして入寂せり。傳へいふ、法師寂後、其所持の篋の内より光を放つ、人々驚きて之を見れば、此の『四教儀』ありしと、此の書もと上下二卷あり、下卷には南三北七の諸種の邪義を破したれども、初學に入用少きが故、唯其上卷のみを開板すと、これ此の『四教儀』なり。(天台大師の三大部の中

に、從來の學者の説を擧げて之を批判す、其の主要なるもの、南方に三種、北方に七種あり、南三北七とは之を指す、之を開板せしものは、孤山の智圓法師にて、義寂法師の寂後、三十餘年の後に入寂したる人なり。

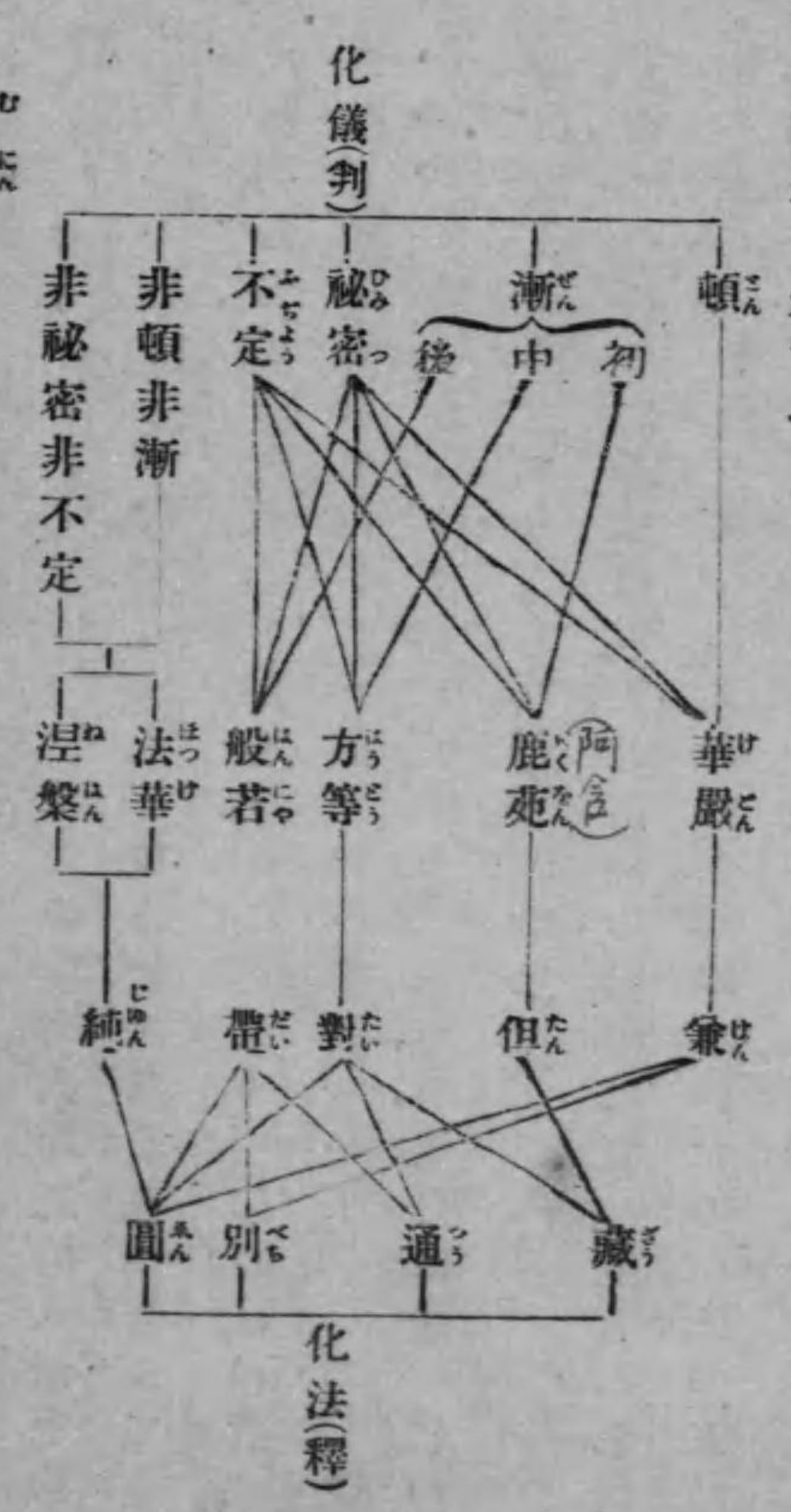
天台智者大師、以五時八教、天台的智者大師、五時八教を以て、東流一代判釋、東流一代聖教、罄無不盡、の聖教を判釋するに、罄きて盡きざることなし。

判釋は、剖判解釋にて、分類して解釋することなり。○東流は、佛法、西より漸々東方に流布する故、佛教を指して東流一代の聖教といふ。○罄は、ツキテと讀むも、コトハ、イクと讀むも、孰れにても可なり。○無不盡とは、佛一代の教、此の五時八教の中に收まり盡きざることなしとの義なり。

(通解)天台山の智者大師は、佛が人の萬種の機根に應じ、説き示し給へる一代の教を、五時八教の名目を立て、部類分けし、解釋されたるが、此の五時八教の中には、一代の教、收まり盡きざることなく、眞に完全無缺の判釋といふべし。

(参考)文中、以五時八教の中、以の字を、モチヒテと讀むこと、一家の法なり、蓋し天台大師の五時八教の判釋は、大師の創作にあらず、大師『法華經』の經意を用ひ

て成す所なりとの意を表する也。
 之より以下、順次五時八教の細釋に入らんとするに先ちて、便宜のため此に判釋の圖表を示すべし。



但し蒙潤の『四教儀集注』には、法華に判と開とを分ち涅槃に追説と追泯とを分ちて、法華の開と涅槃の追泯とに、別に開顯圓の名を命じたり、之を四教に配すれば左の如し。



此の開顯圓のことを、超八醍醐の圓教といふなり、之に對して通常の圓教を、隔歷圓と呼ぶ、即ち開顯圓は、化儀化法の八教を超絶して其の以上に居るとするなり、(醍醐のことは後五味の所にて明にすべし)。法華の判と開とを分つは、判は判別のことにて、法華に説くところの圓教は、他の諸經に異にして、諸經は靈妙相雜えて圓教、別教、通教、藏教、相混合して説けども、法華は純圓教なれば、他教よりは甚だ高しと、他と判別して、相對的に説くは判なり。開は開會、會通にて、即ち融通のことなり。若し法華圓教の極理に達して見れば、固より絶對の圓教にて、圓教の外に、藏教も、別教も、通教もあらずなり、之に隔てを立て、四教各別と見るは、未だ眞に圓教を知らざるものなり、此くの如く圓教を見るときは、之を開顯圓といふなり。『涅槃經』は、佛入滅に臨みて、一代五十年の間に説き給

ひし説法下は小乗より上は實大乘の極理に至るまで、悉く之を再説し給ひしものなれば、之を追説といふ故に此の時は、追説は、藏通別圓、四教共に之を説きしといふべし。既に此の四教を説き終はりて、圓教の至極に至れば、四教畢竟圓教の外にあらず、圓教の外に、四教各別なりと見るは、權情の迷なり、其の迷去るときは、四教融じて一圓教なりと、開顯圓を説くに及んで、之を『涅槃經』の追泯といふなり。されば『涅槃經』には、四教を説き、説き終りて一圓教に融通したるもの故、法華涅槃を共に第五時の同時に攝むるなり。

然れども開顯圓も、固より圓教の外のものにはあらず、故に開顯圓を、四教の外に圖表すること『集注』の如くするときは、藏通別圓の外に、開顯圓あるが如くにして、化法の四教は、増して五教となるべし。若し然るときは、五時と、化儀の四教、化法の四教の中に、佛一代の教法收め盡さざるなしとする天台大師の判釋は、忽ち其の外に、開顯圓を漏したるにあらずやとの難あるべしとの説をなすものあり、近世の大徳、慧澄律師の説はこれなり。然れども、若し斯くの如く論ずるときは、化儀の四教にても、頓漸秘密、不定の四教の外に、非頓非漸、非秘密

非不定といふ一教を増して、五教となるべしとの難あらん、これは決して然らず。化儀も、化法も、共に五教とせずして四教となし、然かも四教の中に、更に開顯圓等を開くところが、妙味あるところなり。何となれば、五教は決して四教の外にあるにあらず、佛一代の教、四教に收め盡して漏るゝ所なくしかも、法華涅槃は、非頓非漸、非秘密、非不定にして、又開顯圓の絶對説にてあるなりと知るべし。故に前の如く四教とするも可なり、又開いて開顯圓を出すも不可なきなり、そは所謂約教別與、約部通奪のあるところと知るべし。

約教別與とは、教に約して別して與ふるなり。即ち圓教といふものゝ義理、道理よりいはゞ、法華涅槃の圓教も、華嚴般若の圓教も、圓教に二あることなし、等しく圓教にして、所謂今圓法昔圓の法華以前圓體無殊なり、之は教の邊よりは、他の藏通別諸教に分別して、等しく圓教なりと許すといふなり。然れども、若し更に翻つて考ふれば、等しく圓教なれども、圓教の部門を同じくせざるなり。藏通別を混じて説きし爾前の圓教と、純圓教とは同一視すべからず。此の時は、約部通奪として、部に約し、通じて奪ふなり。等しく圓教なるも、圓教と他の三

とを各別に見做して説ける圓教は圓教の外に、他の三を見ざる圓教と其の部を異にするなり。部とは經典を華嚴部、阿含部等と部類分けせし、其の各部をいふ。通じて奪ふとは、法華も法華以前も、共に各部に通じていふときは、法華の一經に歸して始めて一味の圓教と見做さるゝものにて、權教を含める圓教は、眞の圓教と言ふべからずとの義なり。斯く見るときは、法華以前の圓教は、法華の圓教と決して同一視すべからざることゝなる。故に約教別與の邊より見れば、四教の外に開顯圓なく、法華の圓教と、爾前法華以前の圓教と差別あるなし、約部通奪の邊より見れば、四教の外に開顯圓を開き、しかも四教にして、五教にあらず、四教の中に佛一代の説法を收め盡すといふなり。(頁三四三)

以上述べ來りところは、少しく難解のふしもあるべしと雖、學者間、多少異論のある所なれば、其の大意を一言しおくのみ、後に進みて、再び反覆せば、其の意を得ること容易ならん。

言五時者、一華嚴時、二鹿苑時、三阿含時、三方等時、楞伽楞嚴三

五時と言ふは、一に華嚴の時、二は鹿苑の時、三に阿含の時、四は楞伽の時、五は楞嚴の時、此の五時を五時となし、また五味と

味、金光明、四般若時、說摩訶般若、勝鬘經、大品經、五法華、涅槃、若等諸般若經、是爲五時、亦名五味。

四に般若の時、摩訶般若、光讚般若、金剛般若、大品般若、法華涅槃の時、之を五時となし、また五味と名づく。

如來一代の説教を、其の説教の順序に隨ひて分類すれば、大要五となすことを得、これは、其の説法の義理によりしにはあらず、時によりしものなれば、五時といふなり。○華嚴とは、「大方廣佛華嚴經」といふ經の名なり、大方廣とは、宇宙の理なり、此の理を體達して、理智不二となれば、毘盧舍那法身にして、釋迦佛の本體なり。因位の萬行を以て、此の佛の果體の徳を莊嚴すること、なほ妙華を以て、玉臺を莊嚴するが如しといふ譬喩なり。○鹿苑は、鹿野苑といふところの地名の略なり。○阿含とは、梵語にて、譯して傳といふ、「阿含經」のことなり、此の經に説くところ、釋迦佛已來正傳し來る法なりとの意なり。○方等とは、方は廣にて、ヒロキといふ意、等は均等、平等などの意にて、廣く諸種の法を説き、等しく諸種の人々に授くることなり。○維摩は、「維摩詰所説經」のこと、維摩詰は、梵語にて人名なり、維摩詰が假りに病と號して、佛弟子等と法門を談せしことを説ける經なり。○思益

は『思益梵天所問經』にて、思益梵天は天人の名なり、此の思益梵天、法門を佛に問ひしことの始終を記す。○楞伽は梵語、處の名なり、佛の楞伽城といふところに説き給ひし經故、『楞伽經』といふ。○楞嚴、三昧は梵語、譯して健相定といふ、『楞嚴三昧經』なり。○金光明は『金光明經』なり。此の經題は法身(金)般若(光)解脫(明)の三徳を表する也。○『勝鬘經』は、『勝鬘師子吼一乘大方便廣經』といふ、勝鬘は勝鬘夫人なり、勝鬘夫人の佛の威神力を受け、佛に代りて説きし經なり。○般若は梵語、譯して智慧といふ。○『摩訶般若經』の摩訶、譯して大といふ。○『光讚般若經』の光讚は、光明と講説(讚)なり、此の經は佛の舌より無量の光明を放ち、光明中に金蓮華を生じ、華上に諸佛現出して説くところといふ。○『金剛般若經』の金剛は、堅固銳利の譬喩なり、般若の智慧の堅固銳利にして、疑を斷するに比するなり。○『小品般若經』は、『小品般若』に對す。○諸般若經とは、『小品般若』『仁王般若』『文殊般若』等なほ其だ多し。○法華は、『妙法蓮華經』なり。○涅槃は梵語、譯して滅度といふ、『大般涅槃經』のことなり、佛滅度に入らんとし、即ち臨終に説き給ひし經なり。○五味とは、五時を牛乳の味に喩へたるなり、此の事後に出づ。

(通解)天台大師、佛一代の説教を判釋分類さるゝにつきて、五時八教を立てられたるが、其の先の五時とは何ぞやといへば、即ち華嚴、鹿苑、方等、般若、法華涅槃にて、華嚴は『華嚴經』を説きし時、鹿苑は四種の『阿含經』を説きし時、方等は『維摩』『思益』『楞伽』『楞嚴』『金光明』『勝鬘』等の諸經を説きし時、般若は『摩訶般若』『光讚』『小品』『金剛』等の諸般若經を説きし時、法華涅槃は『法華經』『涅槃經』を説きし最後の時にて、此の五時のことを牛乳の味に喩へて、亦五味とも名づくるなり。

(參考)更に少しく五時のことを詳釋せんに、第一の華嚴時とは、如來は始成正覺(しじやうしやうかく)とて、修行終りて、一旦大悟の境に達せし時、其の第一着に説き給ひし經の名にて、即ち『大方廣佛華嚴經』のことなり、此の『華嚴經』を説き給ひし間を、華嚴の時といふ。此の經に説き給ひし事は、佛教の極理にて、大乘中の極點なり、故に根本法輪ともいふなり。此の經には法爾恒説(ほつじやうじやうせつ)の華嚴と結集流傳(けつじゆりゅうでん)の華嚴といふことあり。法爾恒説の華嚴とは、此の宇宙を以て、一大『華嚴經』と視做すものにて、結集流傳の華嚴とは、佛滅後に、佛弟子等、其の遺法を編集して、今日に傳はれるものなり。此の結集流傳の『華嚴經』支那に翻譯せられたるもの多し

といへども、其の重要なもの三部あり。第一は六十華嚴(晉譯、又舊譯といひ、譯者は佛陀跋陀羅^{三藏}なり)、第二は八十華嚴(新譯、又唐譯といひ、譯者實又難陀^日なり)、第三は四十華嚴(後譯といふ、譯者般若三藏なり)是なり。天台宗の學者は、此の『華嚴經』について、四種華嚴といふことを立つ、四種の華嚴とは、一に寂場の華嚴、二に時長の華嚴、三に盡未來際^三の華嚴、四に法界の華嚴なり。之を詳細に説明すれば、煩しきに過ぐるを以て、今其の大要を一言せんに、凡そ『華嚴經』は、七處八會とて、説法の場所は七所^天、人間界^三、四所會を重ぬることは八會なり、分れて卅四品となる^(新譯の方は九)。卅四品中の、前卅三品を寂場華嚴とす、即ち佛が始めて正覺を成じて、佛位に登り給ひしとき、三七日間説き給ひし所なり。第卅四品^(入法界)は、即ち時長の華嚴なり。時長の華嚴とは、三七日の後、佛入滅に至るまで、五十年の間、大機即ち勝れたる機根の者のためには、華嚴の會座の終りしことなし、其の説法を結集したるが今の入法界品にして、尤も其の一部分なれども、三七日間に説きし前の『華嚴經』と一つにしたり。故に寂場華嚴のとは、前分といひ、入法界品のとは後分ともいふ。其の説法の五十年間

斷絶せざりしより、之を時長の華嚴といふなり。第三の盡未來際^三の華嚴とは、これは報土説法の華嚴にて、此の土に結集して流傳するものにあらず。第四の法界の華嚴とは、佛教至極の理、即ち五十年間所説の歸結する所、宇宙絶對の眞理を指して之を『華嚴經』とするなり。第二の鹿苑^時とは、佛『華嚴經』を説き終りて、菩提樹下より、鹿野苑^{といふ所}に赴きて、二度目に小乗の法を説き給ひ、此處にて五人の比丘を濟度し、弟子とし給ひしなり、故に此の時を第二鹿苑の時とするなり。此の時説き給ひし經は、即ち『阿含經』にて、此の『阿含經』は、分ちて四種とす、『増一阿含』、『中阿含』、『雜阿含』、『長阿含』にて、之を四『阿含經』といふ、此の四『阿含經』の説所は、悉く鹿野苑のみにはあらざれども、最初に、始めて鹿野苑にて小乗教に説きかゝられし故、『阿含經』全體の説法の間を、鹿苑の時とすと知るべし。而して此の四『阿含經』は、固より小乗教を説きしものなれば、灰身滅智^{とて}、畢竟吾人をして、枯木死灰の如く、空寂の悟り^とに入らしむるを目的とするものなれども、更に各別に之をいふときは、『増一阿含經』は、人天の因果を明すとて、人間界、又は天上界の中に生る

べき因と此の因を修すれば、人間界又は天上界に生るゝといふ果とを説きしものなり。「中阿含經」は之より一步進んで、人天の因果の如き世間善には非ずして、出世間の悟りを開くべき道を明したるものにて、此の世の煩惱の迷を出で、涅槃寂靜の境界に至るべきを説きたるものなり。次に「雜阿含經」は、色界、無色界の禪定のことを説き、「長阿含經」は、外道(即ち婆羅門教なり)を破斥したるものなり。

第三方等時の方等とは、前にありし如く、ヒロク、ヒトシキことなり。種々の機根に對して、廣く種々の法を説き、如何なる種類の人にも、等しく法益を施すことなり。凡そ佛教には、大乘あり、小乘あり、大乘にも權大乘あり、實大乘あり(即ち藏通別圓の四教なり、後に詳にす)、教に種々淺深の階級あれ共、此の方等時には、佛此の種々の法を説きて、大小二乗を對説し、小乘の淺理を彈斥し、大乘に誘ひ入らしめんとし、給ひしを、名けて第三方等の時とするなり。故に方等時の名は、前の華嚴の如く、經名によりて時の名としたるにもあらず、鹿苑時の如く、處の名によりて、時に名けしにもあらず、之を所説の法に約して、時の名を立つ

るといふ。何故に此の第三時に限りて、經名にもよらず、説處名にもよらずして、次の般若時、法華涅槃時も皆經名による、時の名を命せしやといふに、此の間は、前に言ふが如く、大小二乗、四教等しく對説し給ひし故、説法の經も、一二にあらずして、其の説法の場所も、亦一定せざるが故なり。即ち「華嚴」と「阿含」と、後の「般若」と「法華」と「涅槃」の諸經の外の經は、皆此の方等部に攝むるなり。(例へば眞言宗の「大日經」、又は「金剛頂經」の如き、淨土門にて用ふる「無量壽經」、「阿彌陀經」の類等、天台宗にては、悉く之を方等部の經となす)其の有名のものを舉ぐれば、「維摩經」、「思益經」、「楞伽經」、「楞嚴三昧經」、「金光明經」、「勝鬘經」等の如き皆此の方等部の經なりとす。

第四は般若の時なり。般若は前に言ひし如く、智慧と譯す、即ち方等時に於て、小乘の機に滯るものを彈訶して、耻せ小慕ほ大だの念と言ひて、小乘の教に執するを耻ぢて始めて大乘に向ふ。此に於て般若の會座にては、一切諸法皆空と説いて、大乘といひ、小乘といひ、悉く一空に歸す、大小別ありと見るは、迷見なりと開會するなり、之を般若の法開會といふ。法開會とは、理論上一切法の融通無碍

を談することなり。然れども、人間會にあらす、此の般若部の經中、最も大なるものは、『大般若經』六百卷なり、唐の玄奘三藏譯にて、四所十六會あり、此の十六會中の第二會を『大品般若』といひ、『小品般若』は第四會に當り、『文殊問般若』は第七會に當り、『金剛般若』は第九會に當り、『天王般若』は第十六會に當り、『仁王般若』等は、『大般若』の外なり、其の他般若部の諸經は甚だ多し。『摩訶般若』は『大般若』のこと、今は更に其の中の主要なるもの、即ち『大品』『金剛』等の名を別に擧げたり、『光讚』『放光』等は、『大品』と同本にて、異譯なり。

第五に法華涅槃の時は、『法華』と『涅槃』と別經なれども、其の終極同一なる故、同時の經とするなり。『法華』は、『妙法蓮華經』の略なり。『法華經』には、異譯の經八種程あれども、今日に存せるものにて、完全なるは、『正法華經』卷十（西晋の竺法護三藏敬の譯）と『添品妙法蓮華經』卷七（隋の闍那崛多達摩笈多印度共譯）と、羅什三藏譯の『妙法蓮華經』八卷との三種なり。中にて専ら今日世に行はれ、天台宗の依用するは、羅什譯の本なり。妙法とは、此に詳説すれば、反て解し難き故、一言にしていへば、宇宙の森羅萬象、迷へるも、悟れるも、權も實も、宇宙萬有其の

まゝ共に、絶對不可思議の法なりとの意にて、妙法といふ。蓮華とは、喩にて、蓮華は華開けば、其の中心に實ありて、華と實と同時に生ずるものなりとの義より、迷悟權實一切の法迷の方は因で、悟の方は果なり、權は因なり、實は果なり、因果同時の喩なりといへり。されば蓮華は妙法に喩へたるものと知るべし。次に『涅槃』は、釋迦佛の涅槃に入らんとし給ひし時、説き給ひし經なれば、斯く呼ぶなり。此の經には、曇無讖三藏譯の『大般涅槃經』四十卷と、後之に修正を加へし一本と二種類ありて、前なるを北本といひ、後なるを南本といふなり。此の二經は、共に佛最後の説法にして、既に『般若經』によりて、機根の熟したるものは、靈鷲山に於て、法華の會座に列り、圓教の極理を聞きしなり。後佛入滅の際に及び、更に小乘より、漸々一代の説を再説して、終に『法華』の極理まで示したるが、『涅槃經』なり。されば、『涅槃經』の結局と、『法華』の所説とは同一なれば、之を同じく醍醐味同時の經と定むるなり。

言八教者、頓、漸、祕密、不定、藏、通、別、圓、是名八教、頓等四教、教と名づく。頓等の四教は、是れ化儀世の藥

是化儀。如世藥方。藏等四教。

方の如し。藏等の四教は化法と名づく。藥味を

名。化法。如辨藥味。如是等義。

辨するが如し。是くの如き等の義。廣文に散

散。在廣文。今依大本。畧錄綱

在す。今大本により、略して綱要を録す。

要。

頓は、ニワカと訓む字なり。釋迦佛が菩提樹下にて正覺を成じ給ひし時、其の自ら得給ひし境界を、直ちに説き給ひ、他の諸經の如く、漸々衆生の機根を調へて、説きしものにあらざれば、之を頓といふなり。「集註」には、不從漸來、直説於大時、部居初故名爲頓とあり。時部、初に居るとは、時で言ふも、第一に説きしなり、部にていふも、華嚴部は第一に居る故に、時にても部にても、最初といふべし、而して其の教は、大乘の極理なり、大乘の極理を第一の最初に説くは、これ頓の頓たる所といふべし。○漸は、ヤウヤクと訓む字にて、漸々又次第々々になどいふ意なり。華嚴の時には、第一に佛隨自意の境界と言つて、佛が自ら悟りし、ありのまゝを示し給ひたれば、之を聞きし多數の人々は、譬の如く、墮の如くにて、少しも解する事と能はざりしといふ故に、佛は、之より其の之を聞くところの衆生を調整し、機根

を開發する故、これ恰も、第一に教員が、大學の講釋を、小學生に聞かしめしが如きものにて、之より此の小學生に教ふるに、五十音讀本よりし、數年の後再び前の講釋を聞くに至らしむるが如きなり、即ち漸々に衆生を導きて、極めて低きところより、高きに誘ふ故、之を漸教といふなり。これ鹿苑、方等、般若の三を指す。此の三につき、「集註」には、破邪立正、引小向大、會一切法、摩訶衍故名爲漸といへり。破邪立正とは、鹿苑の時なり、即ち外道の説く諸説を破し、之に反對する眞理を示すが故、破邪立正といふ。然れども此の眞理は、外道に對すれば、之を正といふも、未だ甚だ淺近にて、眞理を盡さざる故、進んで小乗を破し、別に示すべきものありといふ、之を引小向大とし、これ即ち方等部なり。既に方等によりて、耻小慕大の念起れば、一切法大乘、摩訶衍は、梵語なりと開會して、小乗の人が、方等にて、小乗を彈訶するを聞き、大乘と小乗は、非常に區別あるが如く、想像せし心を除きて、更に之を引き立つるが、即ち般若なり、故に鹿苑、方等、般若をば、漸教といふなり。○秘密は、實に秘密不定といふべきなり。今此の四教のことを、圖にて解し、易く示し置かんに、



となるなり。祕密といふに二の意味あり、一は聽聞者相知らざること、二は同聽
 異聞することなり。即ち佛の説法を聞けるものが佛の不思議力のために、膝を
 並べて座して、しかも互に相知らず、これ祕密なり。『集註』に「不思議力、同聽異聞、
 互不相知名、祕密教」とあるは是なり。又同座にて、同一の説法を聞きながら、得益
 不同にて、大乘を聞いて小乗の益を得るもあるべく、小乗を聞いて大乘の益を得
 るもあるべし、此の得益の不同なるは、即ち不定のところなれば、祕密不定教とい
 へば、意味十分に現はるべし。若し此の意味によるときは、前の頓教、漸教は、共に
 祕密にはあらず、聽聞の人々皆能く相知れるが故、これ顯露教なり、又大乘を聞く
 ものは、等しく大乘の益を得、小乗を聞くものは、等しく小乗の益を得る故、これ即
 ち定教にて、不定教にはあらず、故に今之れを顯露定教といひしなり。○不定と
 は、くはしくはいへば、顯露不定教なり。これは祕密にはあらず、しかも得益不同の

不定教なるなり。『集註』に云く、「聞小證大、聞大證小、得益不同名不定教」とあるは
 是なり。大は大乘にて、小は小乗のことなり。○藏は藏教なり、經律論三藏のこ
 となり。此の三藏の中には、佛敎の義理と文と、兩つながら具備すること、藏の中
 に財寶を含藏しあるが如し、故に藏といふなり。但し三藏には、大乘の三藏あり、
 小乗の三藏ありて、同じく三藏なれども、こゝにては唯小乗のことを藏といふな
 りと知るべし。何故に小乗のみを藏教といふやといふに、大乘の三藏は、小乗の
 如く、判然と部帙が分れ居らず、經律論雜說せられて一書の中にも、經と律と論と
 混合し居れど、小乗の三藏は、判然と經部、律部、論部と、書物の上に部帙が分れ居
 なり。故に大乘にも、小乗にも、共に三藏はあれども、別していふときは、小乗のこ
 とを單に三藏教といふなり。此の事を『集註』には「經律論三、各含文理、條然不同
 名三藏教」といへり。條然不同といふは、ハツキリと三藏の部帙の分れて、不同な
 ることなり、大乘には斯くの如く、これは經部、これは律部、これは論部と判明し居
 らざるなり。小乗の三藏とは、即ち經は四の『阿含經』なり、律は五部(五部の律と
 は『十誦律』六十、『四分律』六十、『僧祇律』四十、『五分律』三十、『迦葉遺律』なり)論は

「發智論」と云ふ佛滅後三百年の頃、迦多衍尼子及び六足論(舍利弗の「集異門足論」目連の「法蘊足論」大迦多衍那の「施設足論」提婆設摩の「識身足論」並びに世友の「品類足論」と「界身足論」との六部を合して之を六足論といふ)等なり。○頓等とは頓漸祕密不定の四なり。○化儀は化物の儀式といふことにて衆生を教化する仕方なり。或は實大乘の極理を示すこともあれば、或は淺近の教より漸次に誘導することもあり、或は聽聞の衆生をして相知らしめざることもあり、或は同座にて聽聞して、しかも得益各等しからざらしむることもあり、佛の衆生に説法し給ふ仕方に、種々の別あれば、之を大別し、四種となしたるが化儀の四教なり。○藏等とは、藏通別圓の四教なり。○如世藥方とは、醫師の藥を調合するが如きものなりとのことなり。即ち佛、衆生の機根迷の病氣に應じて種々の藥を調合し、之を與ふるなり、風邪には實効散を與へ、胃病のものには胃散を與ふるが如し。●化法は化物の方法なり、即ちこれは衆生を化導し給ふ法則のことなり。○如辨藥味とは藥の材料を辨ずることなり。風藥なれば其の藥に調合せしモトの藥を一々シラべて、其の機能を明にするが如きなり。例へば苦味チンキ、又は炭酸

曹達の如きものを一々シラべて、之を合し、胃病の藥を製するとすれば、之を調合せし胃藥は化儀の方なり。其のモトの苦味チンキや、炭酸曹達の性質を考へる方は化法なり。藏通別圓の四教は、モトなり、故に化法とし、之を合して、或は圓教に、別教を雜へ、或は四教を調合し、或は通別圓を調合して、衆生に、種々の方法にて授くるは化儀なりと知るべし。○通とは通教なり。何故に之を通教といふやといふに、此の教は、小乗の徒を、大乘に導くための教なれば、小乗の聲聞も、緣覺も、又菩薩も、等しく同一の理を觀じ、前の小乗の藏教にては、聲聞は四諦緣覺は十二因緣菩薩は六度と、其の觀する理を別にしたれども、通教にては、三乘通じて四諦十二因緣六度共に之を觀じ、しかも其の機根利鈍の別によりて、或は小乘に墮つるものもあり、或は進んで直ちに上の圓教、別教の理を悟るものも生ずるなり。故に觀する理の上よりいへば、三乘共通なり、其の之を聞きし人の結果よりいへば、下は小乘に、通同し、上は別圓二教に通入するを得せしむべし、これ其の通教の名ある所以なり。「集注」には「三乘共行、鈍同、三藏利根菩薩、通後、別圓、故名、通教」とあり。○別は別教なり。別教とは前の藏教通教に同じからず、後の圓教にも同

じからずとの義にて、別教といふなり。これは通教が藏通別圓に通同し、通入するとは異なるをいふなり。其の藏通二教に別なる所以は、此の教は、通教の如く、二乗を相手となすものにあらずして、獨り菩薩の法なれば、藏通二教に異なり。凡そ吾人の斷すべき煩惱には、見思の惑、塵沙の惑、無明の惑といふ三種の惑あり、此の事、詳には後に至す、此の中には、見思の惑を界内の惑といひ、塵沙、無明の惑を界外の惑といふ。之を斷するには、空假中の三諦を修せざるべからず、空諦を修して見思の惑を斷す、これは前の藏通二教の上にてなすことなり、別教には、別に界外の惑を斷せんがため、假諦、中諦を修せざるべからず、然るに此等の微細のことに至りては、藏通二教の人々の、全く知らざることなり、故に之を獨り菩薩の法といひ、小乗の機を相手にする、藏通二教に別なりといふなり。然るに圓教にても、此の界外の惑を斷すべきものなれば、別教の圓教と異なるところは如何といふに、別教にては、次第に空假中の三諦を觀じ、其の理を證得すれども、圓教の人は、一念頓極とて、三觀を順序を追ひて、次第に之を修するといふことはなく、三諦圓融して三諦即一なれば、三惑同時に頓斷するなり。『集注』に云く、獨、菩薩法、別前藏通

次第修證、別、後圓教、故名、別教、とあるは是なり。○圓は圓教なり。圓は圓融して、満足缺くるところなき義なり、一切法は互に相圓融して、一切互に一切法を具足満足し、言語同斷、心行所滅なれば、之を圓教といふ、後に至りて詳細に知るべし。○八教は、上の頓漸秘密不定の四教と、藏通別圓の四教とを合して八教といふなり、此の事前に屢述べたるが如し。○散、在廣文とは、廣文は、天台一宗に用ふる三大部及び五小部(天台の五小部とは、『觀音玄義』、『觀音疏』、『觀無量壽經疏』、『金光明玄義』及び『金光明文句』等を指すなり)其の他總べての諸書なり。此の五時八教の義は、廣く三大部、五小部等の中に説き示されありとなり。○今依、大本とは、大本は、三大部の中、主として『法華玄義』を指すなり。○略、錄、綱、要とは、詳細に述べること能はざれば、大體其の肝要のところのみを記すべしとのことなり。綱要は、大綱要領にて、大切のところのみを大略といふことなり。(通解)次に入教とは何ぞやといふに、頓教、漸教、秘密教、不定教の四教と、藏教、通教、別教、圓教の四教とを合して、之を八教といふ、前の四教は即ち化儀の四教といひて、恰かも醫者が病人の病の性質により、藥を調合して與ふるが如きものにて、後の

四教は、化法の四教として、恰かも醫者が、其の與ふる藥のモトを吟味するが如きものなり、即ち衆生化導の方則は、藏通別圓の四教に出でず、之を調合して衆生に與ふるには、頓漸、祕密、不定の四の方法によるものなり、此等のことは、廣く本宗の三大部、五小部等の諸書に説けりといへども、今は天台大師の『法華玄義』によりて、大略其の肝要の點のみを擧げしるすべし。

△此のところまでは、本書の總論なり、唯五時八教の名目を出したるに過ぎず、之より更に此の五時八教を一々詳細に述ぶるなり。

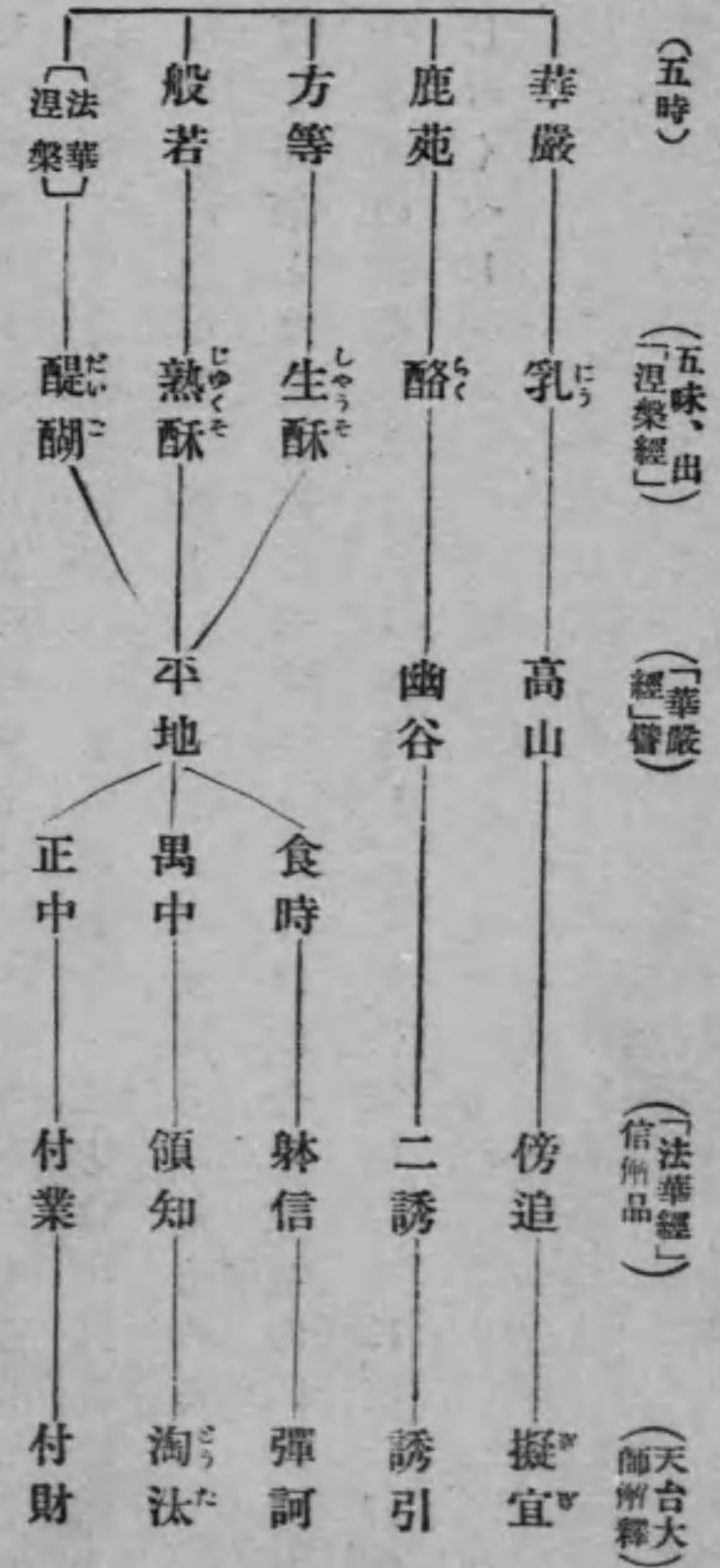
初辨五時五味及化儀四教

初めに五時、五味、及び化儀の四教を辨じ、然る然後出藏通別圓

(通解)之より五時八教を細かに釋せんとするに、先づ第一に、五時と五味と、化儀の四教のことを述べて、後に化法の四教を擧ぐべし。

(參考)五時八教といふも、五時は化儀の四教に屬すべきものなり、何となれば、五時は、佛が衆生に調合して藥を與へし時を分ちしものなればなり。此の藥を成すモトには關係なきことなり。又五味は其の五時に分ちし教につきて、分

ちたるにて、又説教の部類を、五味に配當したるまでのことなり、故に之も亦化儀に屬すべし、故に五時と五味とは、共に今化儀の四教に合して明すなり。一體判釋といふことは、判はワ、カツといふ字にて、佛一代の説教を、部類を分つことにて、例へば、これは風藥、胃病の藥、これは肺病の藥と分類するが如きなり、故に之を部と教とに分ちて、部に屬するなり。又釋はト、キ、ワ、クルことなれば、此の部には是れ／＼のモトを合せ、此の藥にはコレとコレとを合せたりと分析して、其のモトの性質を吟味することなり。佛が衆生に説き給ふ道理は種々に組合すも、之を分析すれば、藏通別圓なり、藏とは何、通とは何と、之を吟味するなり、故に之を部と教とに分てば、教に屬するなりと知るべし。而して此の五時と五味とは、共に部に屬するものなれば、今は化儀の四教と共に明すなり。今本文の詳釋に入らんとするに先ちて、便宜のために、其の配當の圖を此に示しておくべし。



第一頓教者。即華嚴經也。從部時味等得名爲頓。所謂如來。初成正覺。在寂滅道場。四十一位法身大士。及宿世根熟天龍八部。一時圍繞如雲籠月。爾時如來。現盧舍那身。

第一頓教とは、即ち華嚴經なり。部と時と味等に從ひて名づけて頓となすことを得。所謂如來、初めて正覺を成じて、寂滅道場にあり、四十一位の法身の、大士、及び宿世根熟の天龍八部、一時に圍繞して、雲の月を籠むが如し。爾の時如來盧舍那身を現じ、圓滿修多羅を説き

說圓滿修多羅。故言頓教。若約機約教。未免兼權。謂初發心時。便成正覺等文。爲圓機說圓教。處々說行布次第。則爲權機說別教。故約部爲頓約教爲兼。

給ふ。故に頓教と言ふ。若し機に約し、教に約すれば、未だ權を兼ねることを免れず。謂はゆる初發心時便成正覺等の文は、圓機の爲めに圓教を説く、處々に行布次第を説くは、則ち權機の爲めに別教を説く。故に部に約して頓となし、教に約して兼となす。

頓教者、華嚴經也。とは、化儀の四教の中、第一の頓教とは、『華嚴經』のことにて、此の外に頓教に屬すべき經はなきなり。但しこれは、勿論如來一代の説教を、部類分けして、『華嚴』の部を頓教に屬したるにて、決して、部帙の上にて分ちたるにはあらず。何となれば、頓教藏教等の如きは、此の經は頓教、此の經は藏教と、部帙の上にて示すことを得れども、祕密不定の二教の如きは、部帙にては示すこと能はず。これは祕密教の經、これは不定教の經といふものはなきなり。(眞言宗等を祕密宗といひ、『大日經』等を祕密經といふも、今此に祕密といふとは意味全く別なれば、混同すべからず) 最初より部帙にて經文を分類したるにはあらずして、佛一代

の説教を部類にて分ちたるものと知るべし。○從部時味等とは部は前の部類なり、時は五時なり、味は五味なり、部の上よりも、五時の上よりも、五味の上よりも、頓と名づくべき故ありとの意なり。部時味の三方面より、頓たる所以を證す。○所謂如來以下は、先づ部について頓たる所以を明し、後時につき、次に味につき、各別に頓たる所以を説くなり。而して第一に、所謂如來云々といひて先づ部につきて頓たる所以を示す。如來とは佛のことにて、即ち三十二相八十種好の相好を具足し給へる應身如來のことなり。抑も佛には、三身の區別といふことあり、三身とは法身報身應身なり、法身とは此の宇宙の本體、理體、即ち眞如のことを法身といふ。又報身とは、佛が無量無邊の修行を積み、其の結果として得られたる身にて、これは有始無終として、悟りし始めはあれども、滅する終りのなき廣大の身、これ佛の眞實身なり。應身は、此の佛の眞實身なる報身より、此の世界に現はれ出で、形を人間と示し、衆生を教化し給ふ佛にて、即ち釋迦佛の如きは應身なり。此の應身は三十二相八十種好といふ妙相を具し給ひ、丈六(一丈六尺)の金色身を現じ給ふといふなり。されば、應身佛の居住し給ふところは、佛も衆生も

同居雜居なれば、應身佛は同居土に居給ふといふなり。然るに報身佛は十蓮華藏世界とて、無量無邊の世界を微塵として、其の數ほどの殊勝なる相好を具へ給ふ佛にて、此の佛の所居は、即ち實報土といひ、此の現世とは大に異なる理想世界なり。法身佛の所居は又法身土といふ。而して今此に如來といふは、應身釋迦如來のことにて、如來の語は、如より來生するといふ義なれば、即ち如は如實とて眞如の道理に合體したるところ故、これ即ち報身佛なり、此の報身佛より、此の世に來化し給ふ佛、即ち應身釋迦なりと知るべし。『華嚴經』を説き給ひし佛は、應身佛なるか、將た報身佛なるかといふ一種の佛身論は、天台の上にて、古來より非常に議論のあることなれば、今如來とは、釋迦佛のことなりといへば、それにて足れるが如くなれども、後に至りての便宜上、特に此に辯じおく必要あるなりと知るべし。○初成正覺とは、初は、釋迦如來の二十九歳にて出家し給ひし後、難行苦行を積み、終に難行苦行の成佛の正路にあらざることを知り、摩迦陀國の菩提樹下に坐し給ひ、三十五歳にして、始めて正覺を成じ給ひ、之より華嚴の會座の起る次第故、此に初めてといふなり。成正覺とは、悟りを開くことなり、即ち斷常の二見

を離れ、邪を難る、故正、煩惱見思、塵沙を斷じ、妄を去る故覺たる故に正覺といふなり。○寂滅道場とは、釋迦佛の悟りを開き給ひし、菩提樹下を指していふなり。寂滅とは、同じく悟りといふことなり。迷の因果を寂滅と、ホロボシシヅメテしまひし故斯くいふなり。迷の因とは煩惱なり、煩惱なければ生死の苦果なし、此の因果寂滅のところ、即ち悟りなり、此の悟りを開きし場所、即ち佛得道の場所なれば、此の處を呼びて道場といふなり。されば佛の悟りを開き給ひしことを、寂滅道場始成正覺といふ、菩提樹下にて正覺を成し給ふとのこと、知るべし。前に『華嚴經』に四種の別ありて、第一を寂滅華嚴といふといひしも、寂滅道場にて説き給ひし華嚴といふことなり。頁一八〇四十一位、法身大士とは、菩薩の位に四十一位あり、四十二位目が妙覺とて佛なり、四十一位とは、十住、十行、十廻向、十地十住位、以下皆之に十級あるの四十位に、等覺の菩薩を加へて、四十一となる。而して住位の中、第一が初住、其の次は二住、三住等と進みて十住に至るなり。然るに其の初住の菩薩より、無明を破して中道を證り、法性身を受くると説くは、圓教の説なり。即ち吾人の煩惱は、見思と塵沙と、無明なり、此の三惑の中、前二惑は、空假の

二觀を修して、初住以前に斷じ、初住よりは、中諦を觀じて、無明を斷じはじむるなり、無明を斷ずれば、中道常住の理に契ひて、法性に順じたる、今日吾人の見る如き、生死を受けざる身體を得るといふ、これ即ち法性身なり。但し法報應三身の法身と、全く別事なれば、混同すべからず。故に圓教より論すれば、四十一位の菩薩は、すべて法身の大士なり、大士とは菩薩といふと同じ。○宿世根熟とは、過去の世にて、機根の熟したるといふことなり。之につきて種熟、脱といふことあり、種とは下種にて、種子をヲロスとなり、熟は調熟にて、芽を出すまでに成熟するとなり、脱とは、解脱にて、愈成熟し終りて、芽を出すことなり、これ佛法の因縁熟するに喩へたるなり。佛法の下種は、久遠の古き昔しとして、之より漸々成熟し、此の世にて解脱の時節到來したるを、宿世根熟といふなり。久遠と宿世と、今日と、三に分ちて下種と、根熟と、解脱とを配當するなり。根熟とは、機根の成熟する意味なり。○天龍八部とは、天と龍と、夜叉と乾闥婆と阿修羅と迦樓羅と緊那羅と摩睺羅伽と之を八部といふ、天龍等の八部といふに同じ、天龍が八部の外なるにはあらず。天は諸天にて、龍は別に釋するに及ばず。夜叉は、此に能瞰鬼と翻じ、人を

食ふ鬼なりといふ、乾闥婆は、此に食香と翻じ、香を食とする樂神なりといふ、迦樓羅は此に金翅鳥と翻じ、龍を食ふ美鳥なりといふ、緊那羅は此に疑神といふ、一角ある鬼なりといふ、摩睺羅伽は、大腹行と翻す、蟒神の類にて、又樂神の一なりといへり、以上を八部といふなり。○如雲籠月とは、佛の周圍に、諸菩薩、諸天、諸神の集まりたるさまを形容せるなり、佛を月に喩ふことは、其の光明を佛德に比したるなり。○盧舍那身とは、盧舍那は梵語にて、淨滿とも、金剛遍照とも譯するなり、これは報身如來を指す。報身如來は、煩惱及び生死の因果共に盡き果てて、本具の理性悉く現はれたれば、之を淨滿といふなり、淨滿とは、清淨の衆德満足せることなり、これは主として、佛自内證の德といひて、佛の證得せし自身の境界よりいふことなれば、自受用の報身といふなり。光明遍照は、自受用に對して、他受用の報身といひ、他の機類、即ち佛の化益を受くる衆生の機根に對して、報身の果德を示す方なり、此の他受用の佛身は、其の相好實に奇特にして、尊崇すべきに堪へたれば、或は尊特ともいひ、又應身の三十二相なるに對し、之を勝應身といひ、應身のことをば、劣應身ともいひ、勝劣にて分つことあるなり。○盧舍那身を現すとい

ふ、現の一字、亦此にて輕々に看過すべからず。三十二相の劣應身が、尊特の盧舍那身を現じて、『華嚴經』をば、説き給ひたるなり。これ『華嚴』説主の佛は、應身なるか、報身なるかを前に言ひし所以なりと知るべし。然るに此の劣應身の上に、盧舍那身を現するといふにつき、現起と示現との區別あるを知らざるべからず。現起とは、佛が衆生の機根に對して、劣應身の上に、十蓮華藏世界を、微塵に碎きし數ほどの相好を具足せる、廣大無邊の報身佛と現はるゝことにて、今『華嚴經』を説き給ふ佛身は、即ち此の現起の盧舍那佛なり。或は此の現起のことを須現ともいふ、これ衆生の智眼未だ開けざるが故、佛の方より此の尊特の勝應身の體を現せざるべからざる所なり。然るに示現とは、之に反して、佛の方より敢て尊特の報身を示すに及ばず、衆生にして智眼明了に開くる時は、三十二相の劣應身に即して、此の劣應身の當體、直ちにこれ佛の報身尊特の相なりと見るが、即ち圓教の圓教たるところに、之を示現といひ、或は不須現ともいふなり。今此の『華嚴經』を説き給ふところの佛體は、即ち此の現起の報身にて、示現にはあらず、故に未だ別教を兼ねることを免れざる所なり。●圓滿修多羅とは、圓滿の經といふこ

四二
とにて、圓教を説きたれば斯くいふなり。勿論「華嚴」は、別教をも兼ねたれども、其の目的主とするところは圓教にありて、其の別教は主にあらず、傍意として、附屬同様のものなれば、之を圓教の上より圓滿修多羅と呼びしものなり。「集註」には、之を「圓實部主説釋籤云、華嚴頓部、正在圓眞、兼伸別法」と釋せり。之につきて、慧澄律師は、「圓實部主」といふを、「部中正意」と之を正せり、其の理を知るには、先づ圓實の部主、化儀の部意といふことを知るべし。圓實の部主とは、佛の本意なり、化儀の部意とは、化儀の部の上よりいふ、特別の主意なり。即ち佛の全體の目的より見るときは、圓實の部主にて、佛が華嚴部、或は鹿苑部といふ如き部につきて、華嚴は大機を利益し、鹿苑は小機を利益すと、部の上にて、其の部、其の部の特別の目的利益より見るときを、化儀の部意といふ、これ即ち部中の正意なり。而して圓實の部主、即ち佛全體の目的より見れば、勿論華嚴も、鹿苑も、方等も、皆以て圓教が目的なりといふべきことなり。其の中にて華嚴には華嚴丈の主とする所あり、そは即ち圓教(圓眞)にて、別教別俗は傍意として之を兼ねたるなりとなり。故に部中の正意といふ。以上、如來初成正覺より、故言頓教までの一段は、第一が「華

嚴經」説法の時なり、(即ち初成正覺の時に之を説き給ひしなり)、第二は此の經説法の場所なり、(即ち寂滅道場にて説き給ふ)、第三は此の説法を聞くところの機なり、聽衆なり、(即ち四十一位の法身の居士、及び宿世根熟の天龍八部)、第四は説法し給ふ教主佛身なり、(即ち尊特盧舍那の報身如來)、第五が説き給ひし教なり、(即ち圓滿修多羅)。此の時、處機教主、及び教の五を擧げ、「華嚴經」の頓教たる所以を結す。
●約機約教云々とは、佛の説法は、衆生濟度が目的にて、衆生の病に應じて、藥を與ふるものなれば、先づ衆生の機を出し、機に約し、即ち衆生の方より見れば、衆生の機根に種々ありて、圓教の機もあれば、別教の機もあり、圓教の機は即ち實教の機にて、眞實の極理を聽くに堪へたるものなり、別教の機は、未だ實教を聞くに堪へざるものなれば、これは權教の機にて、權とはカリと訓む字なれば、眞實の反對にて、眞實まで導くにつきて、方便を加ふる機根なり、斯く機に權實の別あるにより、病に隨ひて藥を與ふる佛の説法にも、權實の別を生じて、實教に權教を兼説することとなりしなり、故に華嚴の説法は、機と教とより見れば、なほ權を兼ねたるものたるを免れざるなり。○初發心時とは、十住の中、初住の位なり、前に言ひし如

く、圓教にては、初住より無明の惑を斷じて、法身の居士となるなり。○便成、正覺とは、佛と同じく八相成道の化用を起すことなり、勿論未だ全く佛と同等の位に至りしにはあらざれども、既に一分無明を斷ずれば、一分中道を證する故、一分佛と等しきに至る、此の時より佛の如く、八相成道のハタラキを現はすなり、八相成道とは、一に生天下天兜率天、二に託胎三、三に出胎四、四に出家五、五に降魔六、六に成道七、七に轉法輪八に入涅槃九、なほ後にあり、○爲圓機、說圓教とは、前に述べし如く、圓教にては、初住以上無明を斷ず、然るに別教にては、初地以上無明を斷ず、若し別教の初住にては、僅に見思の惑の中見惑のみを斷ず、後の參考の所を見よ、到底八相成道の化用を施すと能はず、然るに今、初住以上便成正覺といふを以て見れば、これ別教の初住のことにあらずして、圓教の初住のことなり、されば其の圓機のために圓教を説きしものなること明なり。○行布次第は、行布は種々の法門を排列すること、次第は其の法門を順序を追うて長時の間、次第に修行することとなり、斯くの如く、法門を列ね、修行に順序階級あることは、圓融せざる隔歴の法門とて、權機に授くる別教のことなり。○約部爲頓とは、『華嚴經』は、斯くの如

く、圓に別を兼ねると雖、其の正意は圓教にありて、大機のために、直ちに極理を示したるもの故、部門を分ちたる上よりいへば頓教なり、これは前の「故言頓教」の一句を承けて結びしなり。○約教名兼とは、部よりいへば頓なれども、教よりいへば、勿論機に權實ある故なれば、今は機を略していふなり、別教を兼ねたり、これは「若約機約教云々爲權機說別教」の一段を結びしなり。
○通解、扱て之より第一に、頓教のことをいはんに、頓教とは即ち『華嚴經』のことなり。『華嚴經』を頓教とする所以は、第一は佛一代の教化の仕方部類分けせし上より、第二佛說法の時節の上より、第三に、之を五味に配當せし上より、皆以て之を頓教となすべき理由あり。依て今先づ部の上より、其の頓教たる所以を言はんに、釋迦佛が三十歳にして始めて煩悩を斷じ、本具の理を證得して、即ち正覺を開き給ひ、菩提樹下の寂滅道場に於て、三七日の間、月の雲により籠かこまれたるが如く、四十一位の法身の菩薩及び宿世根熟の天龍等の八部を對機とし、此等に圍繞せられて、盧舍那報身尊特の所謂十蓮華藏世界微塵數の相を現起して、此の圓滿修多羅、即ち『華嚴經』をば説き給ひたり、これ其の說法、佛が成正覺の境界を大機

のために、頓に説き給ひしもの故、之を頓教といふ所以なり。但し若し之を聞きし機の上より見れば、權實相雜りたるが故、教の上にては、圓に權を兼ねたる所あり、例へば初發心(十住)の時に、便成正覺すると説きし如きは、圓機のために圓教を説きしものなること明にて、又法門を無量に列ね、修行の次第順序を説くが如きは、圓機に對してあるまじきことなれば、これ權機に對する別教なり、之によりて見れば、部(化儀の仕方)の上よりすれば、頓教となすべく、教の上よりすれば、兼即ち權を兼ねることと名づけざるべからず。

(参考一)上に擧げたる中につき、四十一位法身の大事のことにつき、圓教にては、初住より無明を斷じて一分中道の理を證すといひたれども、そは専ら圓教の上の所談にして、別教の談するところとは同じからず、然るに今は別教を兼ねたる『華嚴經』の上にていふことなれば、別教のことも、亦一應知らざるべからず。別教にては、先づ菩薩の階級十住、十行、十廻向、十地の中にて、十住中、初住より七住までに、見思の惑を斷じ、十行にて塵沙の惑を斷じ、十地の初地より無明を斷じはじむるとす。故に別教の初地と、圓教の初住とは同等の位に相當

するが故、別教の初地に入れば、圓教の初住に入りて、終に圓教の人となり、別教の境界を脱するなり。されば別教にては、初地以上に、更に二地より十地を經、等覺、妙覺に至るといふも、實は二地以上は、名目を立つるのみにて、實際は之に相當する人、別教にはなき道理なり、之を有教無人といふ。故に別教の初地上は、最早直ちに圓教の位につく理なりと知るべし。



(参考二)此の『華嚴經』の教主、即ち佛身につきて、古來大に議論あり、而して之を丈六應身の現起せる、他受用報身佛なりといふは、古來の正義とするところなれども、之につきて、或は他受用報身にあらすして、實報身なりとの異説あり、實報身とは、丈六身の現起にあらすして、前に所謂如實の佛なり、即ち實報土の佛なりと主張す、盧舍那を毗盧舍那なりと主張するものあれども、盧舍那は法身、盧舍那は報身といふを通則とし、今は報身なれば、盧舍那とするを正義とすべし。故に此の『華嚴經』は、同居土出現の釋迦佛の説にはあらすして、報身本佛が影を此の土に移して説き給ふ所といふ。是について、先づ三種の蓮華といふことを語るべし、凡そ菩薩の坐し給ふところの蓮華は、一華に一千葉を具す、而して報身佛の一蓮華臺の周圍には、一千葉ありて、一葉毎に一の大釋迦あり、總べて一千の大釋迦あり、而して其の一大釋迦の居り給ふ一華葉は、即ち一千大千大千界なり、故に一千の三千大千世界に、一千の大釋迦佛在す理なり、而して此の一三千世界には、百億の須彌山、百億の四大洲、百億の金剛王座あり、此に百億の菩薩ありて、一時に出家し、一時に成道して、一時に『華嚴經』を説き給ふ、斯

くの如きもの、千の三千大千世界亦悉く同一にして、悉く同時なり、之を葉中百億の小釋迦といふ。故に佛に本未三重ありて、第一重が華臺上實報土の本佛なり、之より葉上の大釋迦出で、葉上の大釋迦より葉中の小釋迦出づ、此の第三重の釋迦の一つが、即ち此の世に出で給ひし釋迦佛なり、三十二相丈六の劣應身なり。然るに異論者は、此の一重の本佛を以て、華嚴の教主となさんとす、然れどもこれは第三重の小釋迦を以て正しとし、唯機根に應じて、報身の尊特の相を現じたる者とするを正義とすべきなり。『集註』に、月堂云、境本定身則是釋迦機、感見相、乃是舍那、此即釋迦境本定身、現起舍那尊特也、といへるもの是なり、蒙潤が、月堂の説を引き、自説を助けしなり。境本定身は、丈六の應身のことなり、佛身は機によりて種々に感見すれども、例へば報身と見るものも、應身と見るものも、其の所觀の境の根本は唯此の丈六身と定れる故、丈六身のことを境本定身といふなり。故に境本定身は釋迦佛なり、機に對して尊特身と現はるゝ故、機の感見するところは、舍那の尊特身なれば、畢竟釋迦の境本定身が、現起して尊特身となるものなりといふなり。

此經中云。譬如日出先照高山

山。第一時。涅槃云。譬如從牛出

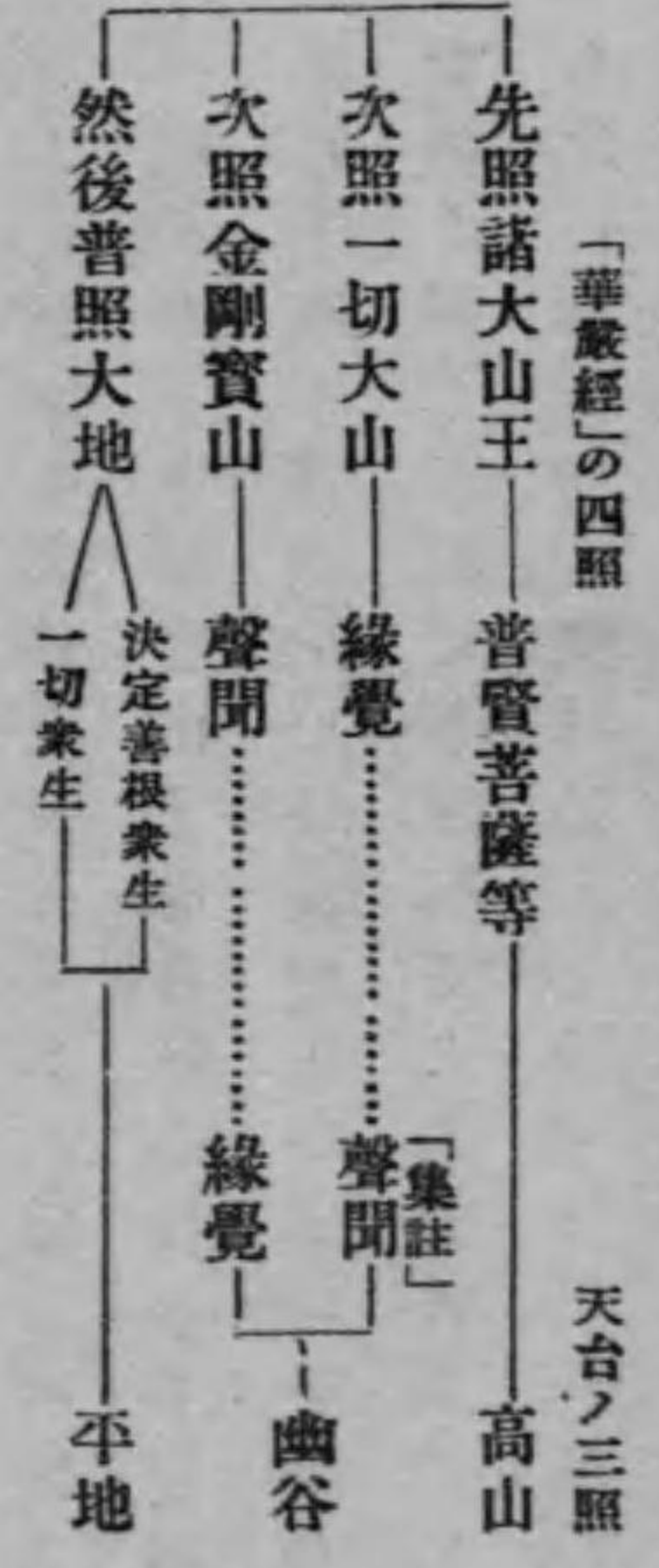
乳。此從佛出十二部經。一乳味。

此の經の中に云く、譬へば日出で、先づ高山を照すが如し。第一時。涅槃に云く、譬へば牛より乳を出すか如し、これ佛より十二部經を出す。一乳味。

此經は、言ふまでもなく『華嚴經』なり。蓋し上には、部につきて頓教の意を述べたれば、此には五時と五味との上より、頓教の義を明すなり、而して此の中、照高山までは、五時につきていひ、其の下、十二部經までは、五味につきていふ。○如日出先照高山とは、日の出でたるときは、先づ第一に高山の頂を照らすとなり、これは晉譯『華嚴經』の寶王如來性起品に出でたる、四照の譬喩より出て來りたるものなり。四照とは、第一に「先照諸大山王」とあり、第二に「次照一切大山」とあり、第三に「次照金剛寶山」とあり、第四に「然後普照大地」とあり、これを四照とす。此の四照は、第一は普賢菩薩の如き大機に配し、大山は聲聞、金剛寶山は緣覺、大地は必ず此の世界にて成佛すべき衆生、決定善根衆生と、此に佛法と因縁を結びて、後世に成佛すべき一切の衆生（一切衆生）とに配しあり。斯くの如く、『華嚴』四照の譬喩を、天台

にては『法華經』信解品の文に、此のつ下に引きあて、之を三照としたるなり。三照とは、高山と、幽谷と、平地なり、而して平地の中を、又信解品の文によりて、之を三分して、食時禺中、正中とし、總じて五分として之を『涅槃』の五味と配合したるなり。これは、本宗は『法華經』を根本所依の經とする故、之を據りところとし、義によりて斯く分類したるなり。即ち緣覺と聲聞とに當る所の、大山と寶山を合して、之を幽谷としたり。但し此の三照は、決して義によりて勝手に製造したるものにはあらず、これは、此の『華嚴經』出現品に「譬如日月出現世間、乃至深山幽谷、無不普照」とあり、是れ舊譯の文なるが、新譯の方には、大山、幽谷、普照、無私とありて、大山と、幽谷と、普照（即ち大地）とを分ちあれば、これ即ち三照なり、而して幽谷の中には、前の一切大山と、金剛寶山とを合併したるものなりといへり、但しこは、少しく牽強を免れず、無不普照といひ、無私といふは、平地のことにはあらず、皆高山より幽谷まで、普く照して、私なき意なること、文によりて明なれども、古來の祖師家は、必ずしも之に拘泥せず、文は姑らく説明上の一應の憑據とするのみ、故に義によりて分ちたるは、平地に、食禺、正の三時を配したる所なりといふは、慧澄和尚等の説な

り。(以上のことは、前の部時味の配當圖を對見すべし)



經の上にては、大山を緣覺に、寶山を聲聞に配したるを、「集註」には之を轉じて、大山を聲聞、高山を緣覺としたり、これ「法華」の信解品によりて、順序を變せしものなり。○涅槃とは、「涅槃經」聖行品の文なり。○十二部經とは長行と、重頌と、授記と、孤起と、無問自説と、因縁と、譬喩と、本事と、本生と、方廣と、未曾有と、論議の十二なり、佛説法の一種の分類にして、經典の内容形式は此の十二を出でざるものとす。即ち長行とは散文、重頌とは散文にて説きしことを、重ねて讃文にて説きし一種の詩、授記とは、佛が弟子に對し、其の成佛に就いて與へし證明、孤起とは、重頌にあらざる獨立の讃文、無問自説とは、他の問を俟たず、佛が自ら進んで説きし説法の

形式、以上は重もに文章、説法の形式の區別なるが、因縁以下は説法の内容に關する材料の區別とも見るべし。因縁は事柄の由來、譬喩は説明するまでもなし、本事は菩薩の過去世に於ける事實、本生は佛の過去世に於ける事實、方廣は廣く道理、眞理を説くこと、未曾有は奇蹟、論議は理論の究明なり。
 (通解)時の上よりいへば、「華嚴經」は、佛始成正覺の後、第一に説き示し給ひし法なり。此の經の中にも、日の朝に出づるや、先づ第一に高山の頂を照すが如きものと喩へてあるなり。故に其の對機とするところも、普賢菩薩等の如き、法身の大士にて、佛の説法は先づ此等の上に光を放ち給ひしものなり、故に之を第一時とす。次に、五味の上よりいへば、元來此の五味の譬喩は、「涅槃經」の聖行品より出でたるものにて、それは佛の金口より、十二部經を出すは、牛より牛乳を出すが如きものなりと説きてありて、此の牛乳を煎じて酪とし、生酥、熟酥、醍醐とすると、順序を立てたれば、之によりて、第一に搾りし牛乳を、「華嚴」にあて、第一の乳味とするなり。

(参考)之より以下の化儀四教の説明も、皆上に同じく、部に約して先づ説明し、次

に三照に合はして時を定め、五味に配し、然る後に、『法華經』の信解品によりて、一々之を説明するなり。今此の華嚴部につきて、信解品の説明に入らんとするに先ち、信解品の領解を、簡單に説明しおくべし（部時味の配當圖を見よ）。第一が旁追なり、これは追ひカケルことにて、大乘の深理を説きて、小乗の機に擬宜することをいふ。第二に二誘とは、更に小乗の機を誘引するところなり。第三に體信とは、小機が大乘を信することなり。第四に領知は、小機が、大乘の法に達することなり。第五に付業とは、小機が一實に會入することなり。此の五に分ちて、信解品には説きあるが故、之を『涅槃』の五味に配當し、又此の五に、『華嚴』の四照を引きあてんため、三照として、更に平地に又食時、禺中、正中の三を開きしものなり。故に此の五味、三照の配當は、總べて信解品の義によりしものにて、『法華經』が第一の據り處たるを知るべし。『集註』には、五味と三照の關係につきて、守曼といふ人の言を引き、若不用涅槃五味、則不顯華嚴演三、成五、若不用華嚴三照、則不顯涅槃後之四味、皆從牛出、といへり。其の意『華嚴』によりて三照を立つるも、五となしあらざるを以て、『涅槃』の五味の説なければ、

三照を五となすこと能はず、之を五となすは、平地に更に三を開きて、五味に配して出來たるなり、又五味ありといへとも、乳は牛より出で酪は乳より出で、乃至醍醐は熟酥より出づとしてあれば、『華嚴』が佛の金口より出でしことは明なるも、『阿含』は『華嚴』より出で、乃至『法華』『涅槃』は『般若』より出づとなりて、此等の經皆佛金口の所説にて、恰かも酪より醍醐に至るまで、悉く牛より出でたるが如しと證するものは、『華嚴』三照の喩なり、何となれば、三照は高山、幽谷、平地、共に一太陽の照らす所なれば、五味皆一佛より出でたることを明にするもの、之より明瞭なるはなければなりといふ、而して此等のこと、實は皆『法華』の信解品を以て、其の最後の證明者となすなり。

法華信解品云。即遣旁人急
追將還。窮子驚愕。稱怨大呼
等。此領何義。答。諸聲聞在座
如聾若啞等是也。

法華信解品に云く、即ち旁人を遣はし、急に追ひて將て還らしむ、窮子驚愕して、怨みと稱して大に呼ぶ等と、此れは何の義を領する。答ふ。諸の聲聞、座に在れども、聾の如く啞の如し等と是なり。

法華信解品云とは、法華は『妙法蓮華經』なり。此の經序品以下、終り觀發品まで二十八品あり、序品の次が方便品、第三が譬喻品、第四が信解品なり。云は、下の文「稱恐大呼」までが、信解品の文の意なればなり。○即遣旁人云々とは、信解品に舍利弗、目連以下の四大弟子が、佛に對して、其の佛説を聞いて、佛が五時の方便を設け、衆生を誘引する所以を領解したることを述べたる譬喻中の文なり。故に其の譬喻を一言せねば、此の説を解すること能はず、其の譬喻といふは、即ち長者窮子の譬とて、大要下の如きものなり。今此に或る父子二人のものありて、其の子の幼稚なるときに、故ありて其の子を捨て、逃れ去り、久しく他國に住せしが、年齢も次第に加はりて、既に五十歳ほどに及びしに、大に貧困に陥り、毎日四方に流浪して乞食をなし居たり。父は、後に之を尋ねて、求め得ざりしかば、已むを得ず、或る一城に止住したり。此の父は、非常の大福長者にて、使役する臣僕亦夥し。然るに、其の子偶ま食を乞うて、其の父の家に至りしに、子は其の父たるを知らず、唯威嚴の盛なるを見て、必ず國主ならんと思ひ、大に恐れて走り去りたるも、父は五十年目にて、父、其の子に遇ひしことを知り、近侍の人をして之を追ひ、伴ひて

家に還らしめんとしたり。然るに、其の子は何の罪もなきに捕へらる、必定命はなきものぞと信じ、大に惶怖して、氣も絶え入りて地に倒れたりとあり、この所は『法華』の本文には、即遣旁人急追將還、爾時使者疾走往捉窮子、驚愕稱恐、大喚我不相犯、何爲見捕、使者執之、急急強牽將還、于時窮子自念無罪而被囚執、此必定死、轉更惶怖、悶絕、躄地とあり、躄は腰のヌケルことなり、今此に引く所は、則ち此の文の意なり、之を即ち傍追といふなり。三十四頁の扱て、長者は己れの老年にして、子なきが故、今來りし此の子を引き戻して財産を與へんと思ふに、子は其の父たることを知らずして、却て怨恨すること斯くの如し、到底實を明すとも信せざるべしと思ひ、命じて之を放ち去らしめ、更に方便を設けて、賤しげなる男二人をして、其の後より行かじめ、其の子に説きて賃錢を通常の二倍にして取らすべければ、來りて、廁の除糞、掃除などをばなしくれずやといひしに、これは相當の仕事と思ひけん、早速之に隨ひて來り、日々此等の賤しき業をば執りにけり、これが即ち二誘なり。前の圖、其の後長者は子に近かんがために、例の美服をば脱し去りて、ワザと破れ、汚れし衣服を着け、此等の奴僕の中に雜はり、言語を和げて之を獎勵

し、終には其の子に向ひて、我は既に老い、汝なほ壯なり、汝日常の行爲を見るに、毫も怠らずして、勤勉努力、終日怨恨の狀なし、之より以後、我は汝を我が子の如くせん、諸人また之を見ること、我が兒の如くせよといふに及べり、其の子大に欣喜して、之より互に躰信し、出入毫も憚るところなきに至りしも、なほ自ら躰に長者の子なりと知らずして、従前の如く、常に別庵の中に住居したりき、之を躰信といふ。見_見を時に長者會ま病に罹る、自ら最早此の世にあることも長からずと知り、其の子を枕頭に呼びて告げて曰く、我に無量の金銀財寶ありて、倉庫充溢す、今より後は、此等の一切の者は、悉く汝をして監督せしむべしと、其の子之を聞きて、なほ前の別庵に住して、命の如く、財寶倉庫を領知し、しかも皆これ自己の財産なるを知らざれば、毫末も之を私するの意なし、之を領知といふ。見_見を長者は此に至りてやがて、其の子の最早實を明すも疑ふことはなかるべしとて、其の臨終の時に、再び其の子を招ぎ、同じ席には親族國王、大臣、其の他の貴族等を招待して、さていふ様は、諸君、今此に枕頭に座し居るものは、これ即ち我が子にして、數十年前某城中にて、我を捨て、逃れ去りしものなりしが、本名は何某と呼び、久しく我が苦心し

て探し求め居し所なりき、然るに此の度不可思議の因縁にて、斯く／＼の故により、再び父子會合するに至りし次第なり、就きては、これは我が實子、我は實父なれば、我が所有の一切の財物は、皆我が子の所有として之を譲り渡すべしと披露したれば、其の子は素より一毫も私するの心なかりしに、斯く自然に我が所有に歸したることの嬉しさに、夢かとはかりに喜びたりといふ、これ即ち付業なり。見_見以上が信解品に出でたる譬喩にて、譬喩に五段の分別あることは知られたるべし、五段は五時に比したるなり、見_見を此の五段の中、今擧ぐる所は第一段の旁追なり。見_見を以上五〇頁以下〇窮、子は貧窮の子のことにて、前の長者の子を指すなり。〇此、領、何、義とは、此の長者窮子の喩の中の第一段、旁追のところは、何の意味を喩へしものなりやと問ふなり。〇諸、聲、聞、在、座、如、雙、如、啞、等、是、也、とは、以上の喩は、諸の聲聞等が、高遠幽妙の『華嚴經』の説を聞けども、毫も其の深意を解すること能はず、恰かも雙の如く、啞の如くなりしといふに喩へたるなりとなり、此の如雙如啞の事は、『華嚴經』の入法界品に出でたり。即ち傍人を遣はして、長者が窮子を引き戻さんとせしは、急に『華嚴』の深理を聲聞に聞かしめんとせしが如き

ものなり、聲聞は我々凡夫も同じことにて、本來佛性を有し、所謂悉有佛性のものにてありながら、之を捨て、自ら貧窮の迷の身となりしものなるに、之を本來の佛に直ちに引返さんとするは、即ち旁追の喩なり、尤も此等の佛に従へる聲聞及び未來無量の聲聞は、過去久遠塵點劫の世に、大通智勝佛といふ佛ありて、十六人の王子が其のもとにて、『法華』を聽きて成佛し、今日まで無量の衆生に『法華』を説きて教化したるが、其の第十六の末子が今の釋迦佛にて、過去に其の教化を受けしものが、即ち今聲聞と生れ、未來無量の聲聞も皆然り、故に其の過去の『法華』聽聞が聲聞大乘の種子となりしなれば、之を將て、還らしむといふなりとの意味もあり、此のことは化城喩品にある説なり、又小乗のものは、生死即涅槃煩惱即菩提などいふ如き高遠の理を聞けば、却て大に驚き、邪説として之を怒る、之を驚愕稱怨大喚に喩ふるなり。今此の『法華』の譬喩につきて、因みに勸門、戒門といふことを知るべし、勸門とは之を導くにつきて、之を教へ勸むる方なり、戒門とは之をオドシスカシて、之を誘ふ方なり。而して、此の勸門に、勸門の擬宜、勸門の無機といふことあり、勸門の擬宜とは、擬宜はアテガフことにて、これにて勸めては如

何、あれにては如何と工夫して、それを對機の上にアテガヒ、見ることなり、あてがひて見て、其の効能なきときは、之を勸門の無機といふなり、機に相應せぬことなり。今『華嚴』の會上に於ける聲聞は、即ち勸門の擬宜にて、聲聞に先づ『華嚴』をアテガヒ、見しなり、然るに聲聞は、譬の如く啞の如くにて、即ち却て之を斥け、所謂「驚愕して怨と稱して、大に喚ぶ有様なれば、これ即ち勸門の無機のところなり。」(通解)以上『華嚴經』の説にて、部に約して説くも頓たり、時に約して説くも頓たり、味に約して説くも頓たることは知りたるが、之を『法華』の信解品に引き合はしめて見るときは、恰も旁追の一段に相當するなり。即ち長者が旁人を遣はして、窮子を追ひしに、窮子は其の實の父たることも知らずして、却て捕縛にてもせらるゝことゝ思ひ、大に恐怖して、我何の犯罪もなきに、斯ることゝなるは、何故ぞやとて、大に泣き喚びて怨みしといふの一段は、此の『華嚴』の説法に當るなり。何となれば、『華嚴經』の入法界品に説ける如く、此の『華嚴』の會座にては、諸の聲聞は之を聞けども、譬の如く啞の如くにて、毫も其の深理を解せずとあればなり。(参考)以上に述べしところは、華嚴が頓教なることをば、第一部教の上より、第二

に五時の上より第三に五味の上より之を説明し、而して五時につきて『華嚴經』の三照四照なれども、今は義によりて、しばらく『華嚴』の三照とす、の譬喩を出し、五味は言ふまでもなく『涅槃經』の五味に引き當てたる者なるが、扱て其の最後に至りて、『法華經』の信解品によりて、以上の諸説の最後の證明としたる者なり。これ天台宗は、『法華經』を以て根本所依の經とするが故に、『法華經』を以て、佛一代の教を判する深意に出でたるものにて、前に『華嚴』には四照とあるを、信解品に引きあて、三照と變じたるも同じ意なり。五〇頁以故に天台の本意より言ふときは、『法華經』を以て、釋迦佛一代教の中の一部として見るは、大に誤りにて、釋迦一代の教は、つまり『法華經』の中に包含せらるゝとなし、『法華經』を以て、一代教を判別し、『法華』の文を以て、五時の最後の證明者となす所以なり。されば本書は之れより下、阿含、方等、般若、法華、涅槃の一々も、皆悉く上の説明の順序と同じ方式にて説明しあることは、前に述べたりしが如し。抑も『法華經』に於て、釋迦佛一代の教を五時と立て、其の衆生を漸次誘ひ入れ給ふことを説きしは、第一に同經の方便品なり。方便品の中にては、佛

が舍利弗に向ひ、諸佛の智慧は甚深無量にして、難解難入なれば、聲聞緣覺の輩の能く知る能はざるところなり、これは、唯佛與佛、乃能究盡（唯佛と佛との間に於てのみ究め盡さるる法にて、中々容易のものにあらずと示し給ひたれば、舍利弗は之を聞き、其の甚深微妙の法を説き示し給はんことを佛に懇ろに請ふこと三たびに至りたれば、佛は始めて、如來の此の世に出現し給ふは、一に一大事因緣のためなり、一大事因緣とは何ぞや、衆生をして佛知見を開かしめ、之に悟入せしめんがため、佛知見の何たるを示さんとて世に出現するの謂なり、而して此の一大事因緣を成就せんがために、佛は種々の因緣譬喩、言辭、方便を用ひて、衆生を導き、終に之を一佛乘に歸せしむ、一佛乘は『法華』なり故に佛の目的は、唯一佛乘にありて、聲聞といひ、緣覺といふ（即ち二乘も、畢竟一乘に誘ふ手段に過ぎず、即ち十方世界中、尚無二乘、何況有三）にて、若し聲聞となり、緣覺となりて、これが最上の證と思ひ、究竟涅槃なりと信じて、其の以上に進みて、阿耨多羅三藐三菩提を求むることを欲せざるものは、これ増上慢の人なり、十方佛土中、唯一乘法、無二亦無三……諸佛出於世、唯此一事、實餘二則非真、終不以小

六四
乘、濟度於衆生、等といひて、佛が方便を設けて種々の誘引により、終に一乗の道に導き、成佛せしむるを説きしは方便品なり。之を更に譬喩を設けて示したるは譬喩品なり、譬喩品の喩の大意は下の如し。今或る國に一大長者ありて、其の住居の宅極めて廣大なりしも、其の家既に古くして朽腐し、毒蛇毒蟲の類多く此の中に住む、而して此の宅より出づるには唯狭き一門あるのみなりき。時に一日忽然宅より火起りて、此の家將さに火焰の中に燒燼し去らんとせしに、長者の子數人ありて、其の火宅の内に遊戯し居り、今將さに其の家の燒けて陥らんとするをも知らず、然るに長者は固より力ありしかば、或は衣被にて、或は几案にて之を出さんと思ひしも、門狭くして之を能くすべからず、此に於て、長者は諸子に向ひて、火の將さに至らんとするを告げ、火至らば、之が爲めに家崩壞し、生命を失ふに至るべし、速に門外に出でよといへども、小兒等、毫も火の何たる、家の何たるをも知らざれば、平然として敢て出でんとせず、此の故に、父は此に一方便を設けんと欲し、乃ち諸子に告げて曰く、汝等が好むところの種々珍奇の物、或は羊車、或は鹿車、或は牛車、今皆門外にあり、速に出で、之

を取るべし、以て互に遊戯すべきなり、若し早く此の火宅を出でば、我は汝の好むところに隨ひて、悉く之を與へんと、諸子之を聞いて大に喜び、争ひて門外に出づ、諸子よりて約の如く羊鹿牛車を求む、父則ち之に各、大白牛車を與ふ、其の車善を盡し、美を盡し、侍衛の奴僕其の上にあり、形體殊好の白牛前に立ちて、快走すること風の如し、蓋し長者、固より大に富む、而して諸子を受すること偏重なし、故に悉く之に與ふるに大白牛車を以てせしなりといふ。以上の譬喩は、『華嚴』にて説きしこと無機にて行はれざりしかば、羊車、鹿車、牛車の方便を設けて、終に等しく大白牛車の一乗を授くるといふ、五時の區別に配當せしなり。火宅は三界に喩へ、諸子は衆生に喩へ、長者は佛に喩ふるなり。『三界無安、猶如火宅』、其中、衆生、悉是吾子、といへり。斯の如く、佛は方便品と譬喩品にて、方便により、乘に差別を立て、終に一佛乘に歸せしむることを示し、かば、之を聽きし、迦葉、目連、須菩提、迦旃延の四大弟子が、佛説に五時の分別あることの眞意を領解し、ソコ、佛に向ひて、其の領解の旨を述べたるが、前に示せし信解品の譬喩なり。

六六
〔参考〕二聲聞は華嚴の次の阿含、即ち小乗の教を聞きて後に出づべきものなるに、今『華嚴經』の座にて、諸聲聞在座云々とあるは、怪しといふ論あり。『集註』にては、之を釋して、顯對則無擬宜則有といへり、顯對とはアカラサマに華嚴の會座に對していふときは、此の會座に聲聞の果を得たる、剃髮染衣の姿の人のあるべき理なし、然し『華嚴』を以て之にアテガへば、聲聞の果を證るべき人はあるなりとの意なり、故に此の機の人を、今は聲聞と指すといふ。又同書に、若雙陞文出經、後分妙玄云、後分則有、後分狀當雙陞、況前分耶、等ともいへり、即ち『華嚴』の會座にて、雙陞の如くなりしとのことは、『華嚴』の後分、即ち入法界品に出でたるなり、而して此の後分は、時長の華嚴にて、三七日の後に説きしもの十八頁即ち般若當時の説なるに、此の時さへも雙の如く陞の如くなりしといへば、其の以前には、なほ更以て甚しかりしならん、故に般若時分でさへ、聲聞の徒如雙如陞なりし故、之を以て前を推して、今聲聞の徒『華嚴』の會座にては、如雙如陞なりしといひしなりとの義なり。(但し『華嚴』に前分後分ありといふは、天台宗のみにて云ふ所、華嚴宗にてはいはぬことなり。)

第二漸教者。此下三時三味總名爲漸次爲三乘根性於頓無益故不動。寂場而游鹿苑。脫舍那珍御之服。著丈六弊垢之衣。示從兜率降下託摩耶胎。住胎出胎。納妃生子。出家苦行六年。已後。木菩提樹下。以草爲座。成劣應身。初在鹿苑。先爲五人。說四諦。十二因緣。事六度等教。

第二に漸教とは、これより下の三時三味を、次に三乘の根性、頓に於て益なきが爲めの故に、寂場を動せずして鹿苑に遊び、舍那珍御の服を脱し、丈六弊垢の衣を着し、兜率より降下して摩耶の胎に托し、胎に住し胎を出で、妃を納れ子を生み、出家苦行六年の已後、木菩提樹の下にして、草を以て座となし、劣應身を成ずることを示し、初めに鹿苑にありて、五人の爲めに、四諦、十二因緣、事の六度等の教を説く。

漸教とは、小乗の低きところより、段々と導く故、漸教といふなり。二四頁○細註に、此下三時三味總名爲漸とは、三時三味は、阿含と方等と、般若の三時、即ち酪、生酥、熟酥の三味を指すなり。此の三は皆漸教にて、漸教を初阿含、中方等、終般若の三とし、之を三漸といふなり。これは阿含、方等、般若の三、共に漸々小機を誘ひて、

一實に入らしむる方便にて、法華涅槃の一實に達するまでは、皆漸教といはるべき道理にてあるなり。○三乗根性とは、三乗は聲聞乘、緣覺乘、菩薩乘の三なり。乘は、以運載爲義、スというて、迷の衆生を載せて、悟りのところへ運搬する、即ち教のとなり、聲聞は四諦の理を乗となし、緣覺は十二因縁を乗となし、菩薩は六度を乗となすといふ様に、其の機根に隨ひて乗とする教も違ふなり。故に聲聞の根性のもの、緣覺の根性のもの、菩薩の根性のものといふ別が立つなり。根性とは性質とでもいふに似たり、聲聞の根性といへば、聲聞となるべき性質なり。○於頓無益とは、前の華嚴の頓教を説きしときには、小機のもの（即ち三乗の根性のもの）は、之を聞けども如聾如啞にて、毫も信せず解せず、利益なき有様なりしことを無益といふなり。○不動寂場而游鹿苑とは、寂場は即ち華嚴說法の座なり、三八頁鹿苑は鹿野苑にて、小乗『阿含經』說法の處なり、二は二始同時とて大乘小乘同時に化を垂れ給ふをいふなり。寂場は大機の化導にて、鹿苑は小機の化導なり、然れども、佛は固より其の所證の法を捨て給ひしにはあらず、大乘至極の理に住して、しかも小乗の化益を施し給ふこと、恰も月は中天に輝きて、萬水其の影を宿

すが如きものなり、されば月の方には、此の池彼の沼といふ念慮はなけれども、中天の位地を動せずして、一切の水に影を映すが如きものにて、佛も亦此の者には大乘を與へ、彼の者には小乗を與ふといふ念慮はなけれども、寂場を動せずして、機に應じ、應用自在なり、之を佛の無謀應用といふなり。されば佛の此のさまを大機より見れば、矢張り寂滅道場に於て、華嚴を説き給ふと見るべし、若し又之を小機のものより見れば、鹿苑にて阿含を説き給ふ相と見るべし、佛の方にては、大小の念を絶して、彼此の差別なし、之を寂場を動せずして、鹿苑に遊ぶといひ、無謀應用、妙應無謀等といふなり。○脱舍那珍御之服とは、舍那は華嚴說法の教主にて、即ち舍那尊特の勝應身如來を指すなり。珍御の服とは、珍寶にて飾りし、御服のことにて、四海を治むる天子國王の服なり。これは華嚴教主、勝應身如來の相好に喩へたるなり。勝應身如來が、其の相好を變じて劣應身と現はれし故、珍御の服を脱すといふなり。但し脱すといふも、如來の方より之を脱して、劣應身と變化せしにはあらず、三乗の人、見れども之を見ること能はざるを脱すといふと知るべし。○著丈六弊垢之衣とは、三乗の根性の輩、尊特の報身如來を見れども

見ること能はずして、之を丈六弊垢の衣を着し給ふと見るなり。即ち佛の方より尊特珍御の服を脱して、弊垢の衣を着けたる丈六身と現はれたるにはあらず、衆生の方より斯く見るなり、故に佛の方よりいへば、無意にして衆生の機に應ずる妙用となるなり。丈六は佛身の長一丈六尺ありし故、丈六の身といふなり、此れは劣應身なり、即ち三十二相八十種好の佛身とは此の丈六佛のことなり。弊垢の衣とは、破れ垢つきたる衣といふことにて、これも譬なり、劣應身の佛は母胎より生れ出て、肉體を具へ、種々の肉體上の苦惱を受くる故、尊特報身の如き相好にあらず、故に喩へて弊垢の衣を着たりといふなり。以上のところは、先づ爲三乘根性云々は、漸教の興る所以をいひ、不動寂場云々は、二始同時をいひ、脱舍那珍御云々は、愈大を寢めて小乗の教を説くに至ることをいふなり。此の下は其の劣應身と現はるゝについて、八相成道の次第を示すなり、八相成道とは、前にも言ひし如く、四四一上天下天、二託胎、三出胎、四出家、五降魔、六成道、七轉法輪、八入涅槃なり、但しこゝにては、降魔がなくて住胎が第三にあり、これは八相成道を明すが本意にあらず、唯小乗の興起を明す爲めに、八相の順序によりしまでなれば、少し

く異なるも怪しむに足らずと知るべし、又入涅槃は、今必要なければ此には出さず、扱示の一字は、示現の意味にて、此の劣應身は、圓教の佛の化身にて、所謂示現なることを明にせんために、示の字を出したるなり。○從兜率降下とは、兜率天とて、兜率は梵語、翻譯すれば知足となるなり。凡そ佛教にては、此の有情世界を、欲界、色界、無色界の三界に分ち、欲界の中に、人間以下の畜生、餓鬼、地獄などもあり、又人間以上の天部もあるなり。其の欲界の天部に六つありて、一四王天、二忉利天、三夜摩天、四兜率天、五樂變化天、六他化自在天といふ、其の以上は色界にて、十七天あり、其の上は無色界にて四天あり、されば兜率天は欲界の天部の中、第四の天なることを知るべし。此の兜率天は、内院、外院の二に分れ、佛の此の世に降生し給はざる前は、此の兜率の内院に居給ふといふ、降下は、衆生濟度のため、兜率天より此の世に降り給ふをいふ、これが八相成道の第一なり。○託摩耶胎とは、託胎にて、八相成道の第二なり。摩耶は即ち淨飯太王の后にて、釋迦如來の母なる摩耶夫人なり、佛の兜率より降下し給ふや、摩耶夫人の右の脇より入りて、胎内に託し給ふといへり、これ託胎の相なり。○住胎出胎とは、住胎は生まるまで、母の胎内

に住することにて、八相の上にては託胎の内に屬するものなり。出胎は八相の第三なり、摩耶夫人四月八日の日、臘尼國にて佛を産む、佛時に夫人の右脇より出で、歩すること七步、上下を指して、天上天下唯我獨尊と唱へ給ひしよし經に見ゆ、これ出胎の相なり。○納妃生子とは、これは八相の中には入らぬことなり、佛摩耶夫人より生れて、名を悉多と稱し、淨飯大王の太子となり、後妃を納れしもの三ありといへり、一は耶輸陀羅、二は瞿夷、三は鹿野といふ、其中正妃は耶輸陀羅なり、此の耶輸陀羅の腹に生れし子あり、難陀羅と名づく、これが即ち生子なり。○出家苦行とは、出家は八相の第四なり、悉多太子其の身の歡樂の地位にあるにも關はらず、生老病死の世の無常の有様に感じ、道を求めんと欲して、年廿九(或は十九ともいふ、但し『集註』にては、此の十九出家の説を取る、又『佛祖統紀』等にては、二十五出家の説を取れり、)の二月十五日、夜半に宮中を脱して剃髮修行し、困苦を重ねること六年にして、成道し給ひしなり。○木菩提樹下以草爲座とは、帝釋天が吉祥童子となりて、佛に草を差上げしところが、佛が其の草を敷きて座し給ひ、成道し給ひしよしのこと、『因果經』に見ゆ、即ち佛が菩提樹の下に、草を敷き

て座し給ひしなり。菩提此の語は梵語にて、翻譯すれば道といふ、樹とは、佛が此の樹の下にて菩提を成し給ひし故、菩提樹といふ、即ち樹の名なり。勿論これは木なれば、木菩提樹といふには及ばぬ如くなれども、次の草に對し、木と草とを擧げて、三藏教にて教ふる生滅の意味を示すものなりといへり、草は吉祥草とて、茅のことなり。蓋し通教の佛は七寶菩提樹下に座すと説く、之に比して木菩提樹といふ。後に詳○成劣應身とは、成佛して三十二相、丈六の身を現じ給ふをいふなり。劣應身は、前屢述ふる如くにて、勝應身に對していふなり。勿論これは三藏教當分の上よりは、劣應身とはいはれず、矢張り無上尊にて、此の上の佛といふものはなき道理なり。此の劣應身を成じ給ひしは、出家後六年なれば、三十五歳の時なりと知るべし。(但し通常は三十成道といふ、若し十九出家とすれば、六年苦行、後五年は諸國を遊歴せられて、三十にて成道したりといふなり。)なほ此の外に二十七歳成道といふ一説あり、此の三説中にて、今は三十成道の説を取るなり。○爲五人とは、五人は、憍陳如と頹提と跋提と十力迦葉と摩男俱利との五人のことなり。初め悉多太子の、夜半城を出でて出家せしとき、其の父をはじめ、迦毘羅

(淨飯王の治めし國名なり)の城中、擧りて大に驚き、後より追ひて其の志を翻さしめんとせしも、其の甲斐なかりしかば、終に親戚のもの、中より五人を選びて、太子に近侍し、常に之に隨はしめられたり、是れ即ち前の五人なり。然るに釋尊が苦行の後、身體疲倦して殆んど死せんとするに至りしも、未だ眞に道を得ること能はざりしかば、徒らに肉體を苦しむるも、之によりて決して眞道を成得すべきものにあらざることを考へ、身を尼連禪河といふ河にて浴し、一牧女の捧げたる乳糜を受けて氣力を回復し、全く苦行を捨て、菩提樹下に端坐思惟し給ふ。此の時前の五人のものも、同じく佛と共に苦行せしが、佛の苦行を捨てしを見て、道心退却せるものと思ひ、佛と離れて鹿野苑に去りしかば、佛の成道し給ふに及び、先づ此の五比丘を濟度せんとて、やがて鹿野苑に赴き給ひしなり。右五人の中、憍陳如と、頹轉とは母方の親類にて、餘は父方の親類なりといへり。○四諦は苦集滅道の四諦なり、此の世は苦なり、此の苦より脱せんとせば、此の苦を集め成したる原因、即ち集、所謂煩惱と業を除かざるべからず、之を除かんには道、此の道に八あり、八正道といふを修行せざるべからず、道を修行して苦の因を除けば、寂滅の

悟り(即ち滅)を開くと教ふるが四諦の教にて、これは聲聞の法なり、なほ後に至りて詳なり。○十二因縁は、過去に無明業の原因ありて、此の世に生れ、身心を受け、又業を造りて死し、更に未來に生まれて又苦を受け業を造る、斯くの如く輪轉生死する様を、十二級に分ちて教へたるなり、これは緣覺の法なり、これまた後に至りて詳なり。二八九頁○事六度とは六度は布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧の六なり、これは菩薩の法なり。但し小乗の菩薩の修する法は、之を事の六度といふ、事の六度とは、理の六度といふと反對の意なり。理の六度は、通教にて立つるところにて、現象の状態は、總べて因縁所生にて、空なれば、六度も其の當體は空なりと、眞空の理の上に六度を立つるが理の六度なり。然るに藏教にては、之に反して、六度は其の事相の當體皆差別して、別々に存する様に思ふ故、之を事の六度といふなり。

(通解)上には第一に頓教のことを述べたれば、次に第二の漸教のことを述べべし。漸教とは阿含と方等と般若の三ありて、淺近の教より、漸々一實に誘入する方便なり。扱て此の佛の漸教説法の興る所以は、佛が成道の初め、三七日間、其の所證

隨自意の法を説きしも、三乗の根性の者は、之を聞けども其の深理を知ること能はず、毫も利益を受くること能はざりしかば、佛は此に二始同時の所謂妙應無謀にて、華嚴の寂滅道場を動せず、しかも衆生の機感に應じて鹿苑に遊び給ひ、一月の萬水に映するが如く、佛心なくして、衆生見て大となし、小となし、三乗の徒、舍那尊特の勝應身を見ること能はざるものゝために、其の珍御の服を脱し、報身の體を隠して、丈六の身と現じ、弊垢の衣を着けたるが如く、此の生死苦惱の肉體を現す。初め佛無量の行を積みて、一生補處の菩薩の位佛の候補者といふが如し、此の前の佛につぎて世に出現すべきものと定まるをいふ三〇一頁に至り、やがて兜率天に上生して、之を上天といふ、其の内院に居給ひ、此の世の衆生の機根を見、其の熟するに及び、時機至れるを知りて、此の世に降下す、之を下天といふ、其の降下するや、摩耶夫人の右脇より入りて、其の胎内に住し、摩耶を母とし、淨飯を父とし、臘毘尼園にて母の右脇より生れ、淨飯王の太子となり、後耶輸陀羅等の妃を容れ、一子羅睺羅を生むに至りしも、世の無常にして、老死の苦惱脱れがたきの真相を悲しみ、之を脱却すべき眞道を求めんと欲し、年二十九にして、夜半迦毘羅の城

を脱し、出家苦行すること六年に及ぶ、しかも徒らに身を苦むることの眞道成得の法にあらざるを知り、乃ち苦行の方法を捨て、菩提樹下に於て吉祥童子の奉れる吉祥草を敷きて、其の上に端座し、思惟して、終に丈六の劣應身を成じ給ふに至れり、時に年三十五。當時佛の出家せしとき、父の命によりて太子に侍し、共に苦行を修せし、憍陳如、頹鞞、跋提、十力迦葉、摩男、俱利の五人のものは、佛が苦行を捨てしときに、其の苦行に堪へずして、墮落したるものなりと誤認し、去りて鹿野苑にありしが、佛の劣應身を成するや、先づ之を誘導せんと欲して、行いて鹿野苑に至り、此の五人のものゝ爲めに、四諦の法、十二因縁の法、事の六度等を説法し給ひたり、これ初轉法輪なり。

若約時則日照幽谷時二若 若し時に約すれば、則ち日幽谷を照す、時二若約味則從乳出酪此從十二 味に約すれば、則ち乳より酪を出す、これ十部經出九部修多羅二酪 二部經より九部の修多羅を出す、二酪

上には部に約して初漸四諦、十二因縁、事の六度の由來、即ち「阿含經」なりを説きたれば、今は時に約し、次に味に約して示し、前後に「法華」信解品を引くこと、頓教

の時と同じ、以下方等、般若及び法華涅槃も之と同じ順序の書き方なること前に述べたるが如し。日照、幽谷とは、三照の中にて、此の阿含時は、第二の日照谷を照らすに當るなり。三十四頁の圖及び五十頁以下参照 從乳出酪とは、搾りし乳が「華嚴經」ならば、之を煮て酪としたるところが、「阿含」なりとの意なり。此の五味の譬喩には、華嚴より阿含、阿含より方等等と、漸々生じて行くことは、酪、酪より生酥、生酥より熟酥等を生じ行くが如しとの意と、其の生じ行くに隨ひて、淡なるが漸々濃厚になるは、華嚴の座にては、何もワカラズして、淡きこと乳の如くなりしが、方便を設けて導きしにより、漸々機に適當して濃くなり、醍醐一實の方に近く様になり來るといふ意もこもれり、之を相生の義、これは教の方にていふと、濃淡の義、これは機の方にていふとの二義ありといふなり、なほ此のこと下に出づ。○從十部經出九部修多羅とは、十二部經は大乗にて、前の「華嚴經」を指す。九部修多羅とは、十二部經の内、方廣と、無問自説と、授記との三を大乗の方に、しばらく譲りて、小乗の經を九部といふなり。修多羅は梵語譯して經といふ、故にこゝは「華嚴」より「阿含」の出でしことをいふに過ぎず。

〔通解〕若し此の阿含を五時に配すれば、第二時にて三照の中の日幽谷を照すといふに當り、五味に當つれば、乳の次の酪にて、酪は乳より出でたれば、これは十二部經(大乘經)より九部經(小乘經)を出せしに比すべきものなり。

信解品云、而以方便密遣二人

人縁覺形色憔悴無威德者。

汝可詣彼徐語窮子、雇汝除糞。

此領何義。答、次頓之後、説三藏教、二十年中常令除糞、即破見思煩惱等義也。

信解品云とは、今此に引くところの譬は二誘のところにて、即ち誘引の譬ともいふなり。五十六頁 方便とは、方は法也、便は用也とあり、衆生に適應する方法を用ひて、之を教化誘導する故方便といふ、ハカヲヒなどいふに等し、善巧方便と熟字して多く使用す、假りに用ふる善きハカヲヒのことなり。○密遣二人とは、密の

信解品に云く、而も方便を以て密に二人縁覺形色憔悴して威徳なきものを遣はし、汝彼れに詣りて徐かに窮子に語るべし、汝を雇ひて糞を除かしめんと、これ何の義を領する。答ふ。次ぎに頓の後に三藏教を説くなり、二十年中、常に糞を除かしむとは、即ち見思の煩惱を破する等の義なり。

天台四教儀講話

字意味深し。華嚴の時には、遺傍人急追將還とありて、これは顯に之を使者として引き戻さんとせしなり、今は長者の廻はし人なることをかくして、二人のヤセオトロへたる人を遣はせしなり、即一實至極の教をば隠くして、ワザと二乗の教を以て、之を引き戻すに比するなり、二人といふは、聲聞と縁覺の二乗に喩ふるなり。○形色憔悴無威徳者とは、顔形の瘠せ衰へて賤しげなるものとの意なり、小乘にて教ふるところは、此の世は四苦八苦の苦しみの世界にて、無常轉變極りなく、物として不淨不潔のものたらざるはなしと、厭くまで世の厭ふべきことをのみを教へ、大乘の如く無上の佛となりて、常住不滅の境界に至り、形相圓滿にして教化自在なる有様となることは教へぬ故、之を形容して形色憔悴に賤しげなる男と喩へしなり。○雇汝除糞とは、決して汝を捕ふるにはあらず、汝を雇うて糞を除かしめんとするなりと方便して、先づ之を長者の家に引き戻すをいふ。即ち大乘一實の理は、不相應なる故、耳を傾けざれば、小乘を以て之を誘ふを除糞に喩ふ、糞は苦集、此の世の苦と、及び苦を受くる原因、即ち集に喩ふるなり、先づ小乘に入れて苦集を除かしむ、苦集を除かんには道を修し、道を修すれば滅の證果を得

べし、故に苦集の糞を除かしめて道と滅との價を拂ふなりといふ。○徐語窮子とは、徐はシヅカにて、ユル、といふ意なり。華嚴の方にては、使者疾走往捉とあり、極めて急なれども、小乗の方は、誘引して、ガマシスカカシて導く方故、これは斯く急劇にては不適當なり、華嚴は一實の極理を、直ちに説き給ふものなれども、小乘は紆曲隱密で、眞意をかくして、グル、と種々の方便道を、マハリ、漸々導く故、特に徐の字を用ふるなり。○二十年中當令除糞とは、二十年といふにつき、これに種々の解釋あり、今其の一を擧ぐれば、これ三界の煩惱を斷する上につきて、其の次第を二十に分つより、是を二十年間に糞を除くといひしなりといふ。(此の事下の参考を見よ)○破見思煩惱とは、見思とは見惑と思惑なり、見惑は理惑とて道理上の迷見なり、思惑は事惑とて貪愛の情により、外物に愛着の念を生ずる等、總べて感情の惑なり、此の二の煩惱を斷するを糞を除くに譬へたり。(通解)信解品に之を引き合はして見れば、此の阿含鹿苑の時は、恰も二誘の譬喩に相當するところなるが、其の二誘の譬喩とは、即ち長者が方便を設けて、其の子の逃げ去るを、後よりワザと、顔の色、ツレ、果てたる使者二人を遣はして、汝我が家

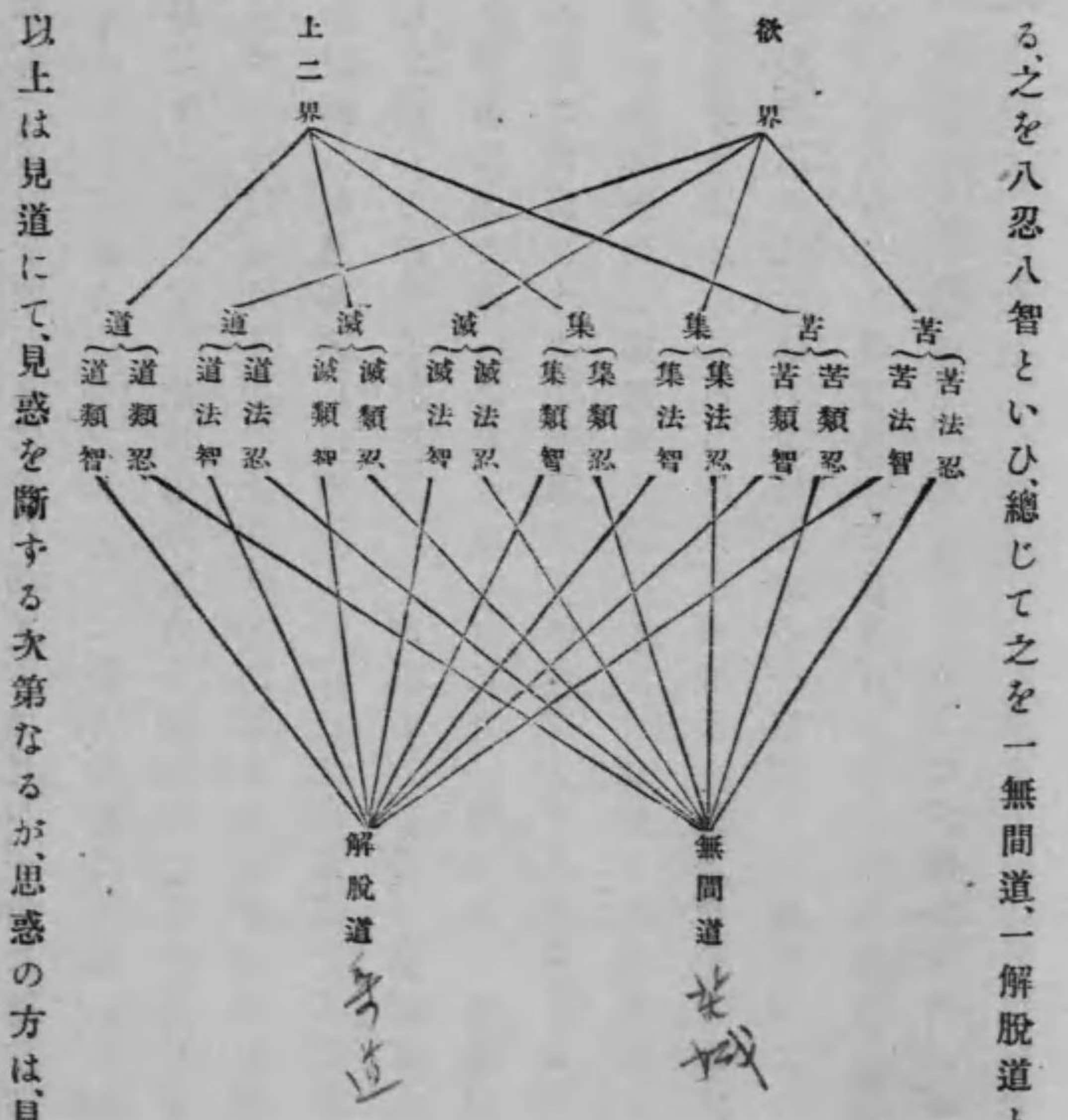
に來りて除糞の仕事を爲すべし、さすれば價は二倍にもして拂ひ遣さんと、ダマシスカシテ長者の家に伴ひ來りしといふ一段に相當するなり。此の一段の譬喩は、如何なることに引き當てたるぞといふに、最初『華嚴經』の一實深遠の、佛隨自意の説を述べ給ひしによりて、之を聞くもの毫も理解すること能はざりしのみならず、却て其の説の意想外に出づるに驚きて、邪説となして之を避くるに及びしかば、佛は此の徒を引き止めんとて、聲聞緣覺なる、二乗の淺薄にして、理解し易き教を説きて、漸々之を誘入し、三界見思の煩惱を除斷せしめ、之を除斷するにつきて、見惑には一無間、一解脫道、思惑には九無間、九解脫を要することを喩へて、

二十年間除糞の業に従事せしめたりとはいひしなり。
 (参考)前に三界見思の惑を斷するにつきて、二十の次第あるを喩へて、二十年間除糞するといひしことを述べたるが、今其の二十の次第を一言せんに、二十の次第とは、見惑を斷するに一無間、一解脫道合して二を要し、思惑を斷するに、九無間、九解脫道合して十八を要するなり、故に總べて二十の無間道解脫道となる。抑も三界の煩惱は、之を大別すれば見惑思惑の二となる、見惑とは智識上

の迷見にて、之を斷するには道理を明にすれば除くことを得、思惑とは智識上の迷見にあらずして、情慾に屬する迷ひなれば、これは道理のみにて除くこと能はず、道理を明むると同時に、かゝる情慾より厭離するの情を養はしめざるべからず、而して此の見惑には、苦に屬する迷見と、乃至は集滅道の三に屬する迷見とありて、總べて四種の迷見あり、之を欲界の見惑とす。欲界とは吾人が生息する、此の人間界をはじめとし、地獄、餓鬼、畜生、修羅等なり、人間の上には、天上界ありて、矢張り之を欲界の天といふなり、以上を十界といふ。然るに此の欲界の上に、又色界天、無色界天といふ二種の天ありて、これは欲界以上のものなり、此の二天も、同じく迷界にて、悟界にはあらず、(以上を三)界といひ、勿論迷ひの世界なり、故に此の二界の迷を脱するには、同じく四諦の觀法を要するなり。然るに此の二界の迷を脱するには、色界の四諦、無色界の四諦と別々に觀するには及ばず、上二界の四諦として、一とまとめにして觀じ、且つ三界の惑體は、一つものなれば、此の世にて上二界の四諦を觀すれば、上二界に生るべき迷見も、此の世にて斷することを得るものにて、特に色界無色界に生れし上ならでは、

八四

觀せられぬものにあらずとするなり。故に今見惑を斷ずるには、先づ苦に關する迷見を斷じ、次に上二界の苦に關する迷見を斷じ、斯くの如くにして欲界の集、次に上二界の集と滅道皆之に同じく、漸々に斷じ去るなり、故に之を合すれば八諦となる。然るに其の一諦につきて、例へば苦諦なれば、此の世の苦なることを明に認めて、之を斷せんとし、智を起し、智と迷と相争ひて、之を降伏する間を、苦法忍の無間道といひ、忍は認と同じにて、認めることなり、無間道とは間は、ヘ、ダ、テ、ル、意味にて、ヘ、ダ、テ、ル、ものなしに、迷を降伏する故、無間道と名づく、既に悉く降伏し終りて、苦に關する眞正の智、此に決定したるところを苦法智の解説道といふ。次に上二界の苦につきても、亦此の二あり、苦類忍の無間道、苦類智の解説道とするなり。(類は種類にて、上二界の苦は、此の世にて觀する故、直接にあらず、此の世の苦に、ナ、ゾ、ラ、へ、て、同じ種類として觀するが故、類といふなり)故に法忍、法智類忍、類智の順序にて、各欲界の四諦、上二界の四諦につき、次第に觀じて、集に集法忍、無間道、集法智、解説道、集類忍、無間道、集類智、解説道、乃至は道法忍、及び道法智と道類忍、及び道類智となりて、凡て十六心となる、之を八忍八智といひ、總じて之を一無間道、一解説道とするなり。



天台四教儀講話

以上は見道にて、見惑を斷する次第なるが、思惑の方は、見惑の如く苦集滅道に

分ちて、苦諦を明むれば苦に關する迷見が、一時に斷するといふ有様に行かぬものにして、勢力の強弱によりて、種類を分ち、一品づゝ漸次に之を斷するより外なきものとす。故に其の勢力の強弱によりて、上中下の三品とし、更に上に上中下、中に上中下、下に上中下の九品とし、之を九品の惑と稱す。而して欲界の思惑九品、色界天には(四天あれば)一天に九品にて三十六品の惑あり、無色界には(同じく四天あれば)又三十六品あり、三界の惑總じて八十一品なり。而して欲界の惑を斷するにつき、一品に各一無間道、一解脫道ありて九無間九解脫を要し、色界にも之と同理にて(四天共に各)九無間、九解脫あり、無色界にも(四天共に各)九無間九解脫あり、故に總じて欲界より無色界の最上なる有頂天まで皆思惑を斷するには九無間九解脫なり、故に思惑を斷するにつきて九無間九解脫、即ち十八を成し、之に見惑の一無間、一解脫を加ふれば總べて二十となる、前の二十年といふは此の二十をいふなりとの義なり。

次明方等部。淨名等。彈偏拆小。歎大褒圓。四教俱說。藏爲

次ぎに方等部を明さば淨名等なり。彈偏拆小、歎大褒圓、四教俱に説く。藏を半字の教と

半字教。通別圓爲滿字教。對半說滿故言對教。

爲し、通別圓を滿字の教とす、半に對して滿を説く、故に對教といふ。

方等部のこと其の釋は前に屢述べたり。○淨名は『維摩經』のとなり、維摩は具にいへば維摩詰にて、梵語、人名なり、譯すれば淨名といふ、故に『維摩經』のことを『淨名經』ともいふなり。方等部は四教俱說にて、藏通別圓の四教、悉く此の部にては説示せざるものなければ、其の範圍廣きと共に、此の部中に屬すべき經文も實に無數なりと雖も、要するに方等部の正意本分とするところは、通別圓の大乘を以て、藏教小乘を破斥するにあるものなれば、此の小乘破斥の特色を最も痛快に示すものは、『維摩經』に及ぶものなきにより、今方等部を説くに當り、方等部の經文の代表として、特に『淨名』等といひて、『維摩經』を擧げたるものなり。○彈偏拆小、歎大褒圓とは、此の方等部の『維摩』等の無數の諸經は、畢竟何事を説けるものなるかといふことを示せるなり。此の八字は、彈、藏通別、三、偏、褒、圓、教、拆、小、乘、三、藏、歎、通、別、圓、大、乘、といふことゝろにて、實は、彈、偏、褒、圓、拆、小、歎、大、ア、ヤ、にて、ワ、ザ、と、彈、偏、拆、小、歎、大、褒、圓、とせしものなり。故に此の句は偏圓相對と、

大小相對と、二對の意味あるものにて、彈偏褒圓は偏圓相對なり、拆小歎大は大小相對なりと知るべし。偏圓相對の方にていへば、藏通別の三は偏りて理を盡くせるものにあらずゆゑ、偏教にて、法華一乘が圓教なれば、偏教の三を彈訶して、圓教を褒めるが方等部の意なり。又た拆小歎大の方にていへば、通別圓は大乗にて、藏教は小乗故、此の小乗を拆摧して、大乘を歎美するが方等部の意なり。方等には、此の兩意を有すれども、其の正意本分とするところは、正しく拆小歎大にありて、彈偏褒圓は其の傍意なりといふべきなり。○四教俱説とは、四教は藏通別圓なり。此の方等部にては、此の四教俱に説かざるものなきなり。尤も此の方等部にて四教悉く之を説くにつき、『釋籤』に、以大斥小、逗大逗小といふ名句あり、これ四教俱説の意を説明して餘りある文字なり。そもそも方等部にて四教俱説することは、前にいひし如く、大小相對と偏圓相對とありて、大小相對を以て正意とし、偏圓相對を以て其の傍意とすることなるが、今以大斥小といふは、即ち此の大小相對の意なり。此の時には實は四教對説にはあらずして、大乘を以て小乗を對破することとなるなり、これは豎人とて、鹿苑の會座にて、早く小乗の教に

浴し、一轉して方等の座に移りしものに對し、從來信じたりし小乗教は、未だ甚だ淺薄にして、理の實際を極めたるものにあらずと、小乗を破斥して、大乘に誘入する方便なり。豎人は、豎に小乗より大乘に入り來る人といふ意なり。然るに此豎人の外に、方等の座に於て、始めて佛法に歸したるものありとせば、之に對して直ちに大乘を説くこと能はざれば、また示すに藏教の小乗を以てする必要あり、此の時には、小乗を破斥するにはあらずして、正しく小乗を説示することとなる。故に方等の座には、小乗より轉せし豎人あり、又新入の橫來の機といふものあり、之がために、一方にては小乗破斥のために大小相對して説き、一方にては小乗の機には小乗を説示し、大乘の機には大乘を説示して、各其の利益を得せしむ、之を「逗大逗小」といふ。逗とはアテハムルことにて、大機には、大乘をアテハムル、小機には小乗をアテハムルなり、此の「逗大逗小」の時には、方等の意は四教對説となる。故に方等部の四教俱説には、對破對説の二義あることを知るべく、對破は豎人のために、對説は橫來の機のために、す、『集註』に、方等説三藏者、一爲彈斥之本、二爲橫來之機、といふは是なり。而して對破對説の中にて、對破を方等部の正意とし、對

説を其の傍意とするなり。○對半説滿とは、半字の教に對して、滿字の教を説くとの義にて、藏は半字、通別圓は滿字なれば、小乗の藏教に對して、大乘の通別圓を説くといふなり、これは大乘教を以て、小乗教を破斥することをいふなり。半字、滿字といふは印度の悉曇しつだんにあることなり、日本にていへば、五十音は半字なり、此の半字を組み合はして、ヒト、又はイヌ、といふ一語をなせば、之を滿字といふなり。此印度にては四十七の字母（即ち半字）がありて、之が組み合はされて種々の文字となるなり。（日本にては音を表はすアイウエオと、音の組み合せによりて出來し、例へばヒトといふが如きものとを皆字といひ、ヒトはヒとトとの二字より成ると言ふ故、大に都合わるし、印度にては、字母と字は別なり、西洋にても同じ、 m と n の字母が合して mn といふ一字となるなり、此の時は m 又は n 等は半字にて、 mn が滿字といふべきが如し、但し印度にては字母に母音を含まざるときは、之を半分にして、他の字に加ふことを得る仕組故、半字といふなり）但しこれに（羅論といふ譯して字本論といふ）梵語の語學書ありて之を滿字といひ、餘の語學書は總べて之より出でたれば、半字といふとの説あれども、少しく怪し、餘の語學なり、今此の半字滿字を大小兩乘に喩へて、小乗は九部經なれば、之を半字教とい

ひ、大乘は十二部經故、之を滿字教といふなり。○故言對教とは、對破對説の二義ある中、對破の正意なることを示すなり。何故に此の方等部の教を對教といふかとなれば、大小相對、偏圓相對の二對あり、對説對破の二義ある中にて、大乘の滿字によりて、藏教の半字を斥け、大小相對して對破するにより、之を對教といふなりとの義なり。今初めに「故」の一字あるを注意すべし、『集註』に「故雖兼斥大正在斥小」といふは即ち是なり、是に「斥大」といふは、圓教を以て通別二教を斥ふことを指すなり。

（通解）既に頓教を明し、次に漸教の中にて、初中後の三段ある中、初漸の鹿苑を明したれば、次に中漸の方等部のことをいはん。方等部とは、四教俱説にて、包含するところの經典も其の數甚だ多しといへども、先づ其の特色の著しきものを出さば、『維摩經』の如き諸經にて、其の經中に述ぶる所の要旨は、偏圓相對すれば、圓教によりて藏通別の偏教を彈呵するなり、大小相對すれば、通別圓の大乘によりて小乘藏教を彈呵するなり、此くの如く大小相對し、通別圓等しく説くが故に、四教俱説といふといへども、其の本意は、正しく三藏半字の教を斥けて、通別圓滿字の

教を主張し、小乘阿含の説法により、其の果を證せる徒輩をして、小乗の淺近を知り、所謂耻小慕大の念を起さしむる所以のものなれば、大小相對を、實に方等部の正意と見るべく、偏圓相對は其の傍意なり。されば四教相對して俱に之を説く中に於て、對するといふに、對破と對説の二義ありて、對破は堅人のためにし、對説は横來の機のためにするものなるが、方等部にては、専ら對破を正意とし、所謂半に對して滿を説くとの意より之を對教とはいふなり。

(参考)方等部にては、前述の如く、堅人と横來の機のために、四教を俱説すれども、其の正意は彈呵にあり。然れども彈呵は正當の順序よりいへば、鹿苑の次ぎに來るものとはいへ、必ずしも鹿苑の説法終らざる間は、彈呵なきものなりとは思ふべからず。鹿苑、方等、般若を経て、法華に入實するといふは、一應の配當にて、其の實は鹿苑説法十二年間にも、既に彈呵はありしものなり。此の事を『集註』には、須彈呵者、蓋爲小機執眞保果、取證入滅、故纔證小果、便堪彈斥、未必須在十二年後、といへり。小機は小乗の機なり、執眞、入果、取證、入滅とは、小乗の説くところの理を、無二の眞理と固執し、小乘にて得る所の果を無上の果と固執

し、之によりて有餘涅槃を取り、やがて入滅して灰身滅智の無餘涅槃に入る、斯る淺近のところに滞るが故、若し小乗の果に入りたるや否や、直ちに佛の彈呵の手術は加へらるゝなり。これは既に小乗の教に服して、佛に歸依したるものども、故、今之を彈斥するも、最早佛を誹謗し、之に背戻することなかるべければ、大乘に誘入せんがため、此の手段を加ふるも、敢て差支なかるべきを以てなり。故に纔かに小果を證すれば、便ち彈斥に堪ゆといふ、纔の字は、小果を證するナリ、證するや否や、其の證する直ちに其の下からといふ、極めて急に迫る意味なり、故に南都にては、此の字をヒ、タ、イと讀ましむるなり。されば小乗説法の最中にては、既に小乗の果を證するものあれば、佛の時より直ちに其の人に加へらるゝが故、十二年間にも、既にあることにて、必ずしも十二年の後に始まるといふべきにはあらず。但し此の時は、彈呵を加へらるゝものは、加へられたる其の一人より外に知る者は無けれども、十二年鹿苑の説法終りて後の彈呵は、佛の弟子中、悉く小果を證して、此等の弟子のために方等の會座を設け、公然此等の衆に對し、等しく彈呵を加ふるものなれば、これ公然の彈呵なり。故に

九四
彈呵に密彈と顯露の彈呵との區別あり、鹿苑會座中の彈呵は之を密彈とし、方
等會座の彈呵は之を顯露の彈呵とするなり。例へば『維摩經』にて、維摩詰が
病を現じたる時、佛、舍利弗、目連以下の諸弟子及び諸菩薩等をして其の病を
見舞はしめんとせし時、此等の諸菩薩、諸弟子等は、各嘗て維摩詰のために彈呵
せられし因縁を説きて、我等は到底維摩の疾を訪ふべき資格なきものなりと
て、畏れて之を固辭せしといふことあり、これは密彈のところにて、諸弟子諸菩
薩の、各一人一人に彈呵せられしことある因縁を述べしなり。此に於て、佛、文
殊菩薩をして病を訪はしめしが、之より文殊は維摩の方丈に於て、維摩と種々
の問答あり、種々の奇特を現じたるが、其の時に大乘の菩薩は、八萬四千の師子
の高座に、何の造作もなく登りたるも、後に隨ひ行きし二乗の人々は、須彌燈王
佛を拜せざれば登る能はざりしといふことあり、又天人が華を散じたるに、其
の花菩薩の體に落つれば、皆片々地に至りしも、二乗の人に落つれば、一々其の
體に密着して離れざりしといふことあり。これは大乘と小乗との優劣の甚
しきことを説き示したるものなるが、斯くの如きは、二乗の徒が、維摩の室にて

受けたる、所謂顯露の彈呵といふべきなりといへり。斯くの如くにして、大乘
によりて小乗を彈呵したるところにて、小乗の徒は始めて耻小慕大の念を起
すなり、耻小慕大といふことは、一言にて言へば、小乗の淺近を耻ぢて、大乘の深
遠を慕ふといふ意味なれども、これは決して小乗の證果は淺近にて、大乘の證
果は深遠なりと思ふことにはあらず、二乗の證を得たるものは、飽くまで二乗
の證を深遠にして無上なりと固執すれども、唯其の徳用の上にては、菩薩は遙
に小乗の上にあるが故に、師子座に登るも、散花の密着せざるも、要するに大乘の
徳用の勝れたるがためなりと思ふのみにて、大小の區別は、唯徳用の勝劣にあ
りとするが故、耻小慕大も單に徳用の淺近を耻づるのみのことなりといふ。
徳用とは、證果は大小等しと雖、大乘は自他兼濟の法門なり、小乗は單に自利の
法門故、斯くハタラキに差を生ずとなすことなり。其の徳用を慕ふに至りし
所が、抑も隱然大乗の萌芽の出でんとする勢ある所にて、所謂大機の内に熟し
たるものなり、『集註』に、令二乘人密成通益といふは、即ち是なり。通益とは通
教の利益なり、通教の教ふるところの道理の中には、暗々に法華一實の中道の

理を含むが故、通教に入るが即ち中道に融入する入口にかゝりしものなり。
今二乗の人が、方等の教にて耻小慕大の念を起したるは、即ち二乗の内に、大機の熟したるものにて、通教と同様の利益を成せし、即ち中道に入るべき入口にかゝりしところなりとするなり。

若約時則食時。第三時 若約味 若し時に約すれば則ち食時なり、第三時 若し味則從酪出生酥。此從九部出。酥味 若し味に約すれば、則ち酪より生酥を出す、此れ九部方等。酥味 若し味より方等を出すなり。酥味

食時は漸教の中にて、方等と般若と、次の法華涅槃との三を、平地の三照に配せし其の第一なり、即ち朝飯時なり、辰時といへば、今日の午前の八時頃なるべし。其の次ぎの禺中ぐちゆうは、十時じじ已時いじにて、其の次ぎの正中ちゆうじゆう午時ごじが十二時に當るなり。此の三時のことは支那の『淮南子』に出でたるものにて、天台大師は之を取りて、日、平地を照らす時に、フリアテ、配當したるものなるべし。『集註』に『毘羅三昧經』に、より、食時の據りどころとしたれども、取り難し。○若約味云々とは、五味相生の次第なり、然かも裏面には自ら濃淡の義もあるべし、此の事前に出でたり。頁七四

見

（通解）若し此の方等部を時に配すれば、恰かも日光平地を照らすに至りしうち、最初にて、朝飯時即ち食時辰時即に當り、五味に配當すれば、酪を煮て生酥となりしところにて、即ち九部の小乘經より方等の出でし順序となるなり。

信解品云。過是已後。心相體信。入出無難。然其所止猶在本處。此領何義。答。三藏之後。次說方等。已得道果。心相體信。聞罵不瞋。內懷慙愧。心漸淳淑。
信解品に云く、是れを過ぎて已後、心相體信し、入出難むづかりなし、然れども其の所止猶ほ本處にありと、これ何の義を領する。答ふ。三藏の後に、次ぎに方等を説くなり、已に道果を得て心相體信し、罵るを聞けども瞋らず、内に慙愧を懷き、心淳淑なり。

過是已後より、入出無難までは、信解品の文を其の儘出したり。此の意味は、長者の子が、長者の恩を受けて、體信は心の底より信じ合ふことなり。故に出入何の憚るところもなくなりしも、しかも未だ長者の子たることを知らざりしかば、別に草菴の中に住居せしをいふ。五八頁過是已後は、雇はれて二十年間除糞の賤

しき業を執り、それより後のことなり。○心相體信とは何の事ぞといふに、父は佛に比し、子は二乗に譬ふるなり。二乗の果を得たるものは、既に見思の二惑を斷じ居るが故に、佛が今二乗の上に彈呵を加ふるも、二乗の弟子等は、決して瞋恚の情を起すことなしと信じ給ふは、父の子を信するなり。佛説によりて、二乗の徒、既に小乗の果を證したれば、今佛の大乗を説き給ふを聞くも、二乗は決して佛に虚言ありとは思はず、これ子の父を信するなり、これ父子體信の狀なり。○入出無難とは、入は小乗より大乘に入るなり、出とは大乘より小乗に出づるなり、小乗より大乘に入るも、大乘より小乗に出づるも、毫も其の理に驚かず、恐れざるを出入無難といふ。華嚴の時に、小機の輩、其の説を以て、却て魔説として驚き懼れしとは同日の談にあらず。○猶在本處とは、なほ小乗の羅漢果に留まるをいふなり。勿論小乗の徒が、一實に入るは、法華の開會によることなれば、その以前は、耻小慕大の念を起すのみにて、證果については、小乗の果を捨てんとはせず、唯大乘を聞いては、これ菩薩のことなりとし、小乗を聞いては、これ吾等の教なりとし、單に大乘の徳用を慕ふのみにて、小果を轉じて大果に至らしめんと希望は起

さるなり、これ其の居所のなほ草菴たるを免れざるところなり。然れども大機内に熟せるを以て、大乘を慕ふの情はあり、決して大乘を聞いて驚懼し、之を排斥し、之を逃避するが如きことはなきなり、これ前に所謂通益を得たるところなり。○已得道果とは、道果は真空寂滅の道を悟りし果にて、即ち小乗の阿羅漢果なり、見思の二惑を斷除して得たる結果の位なり。○心相體信は、前の信解品の「心相體信」といふを指すなり、信解品の方は、譬喩なれば、父子の上にて、此は佛と二乗の弟子の相體信することなりといふ釋なり。○聞罵不瞋とは、小乗の淺近を罵りて之を破拆するを聞くも、毫も怒らざるなり、其の怒らざるは、見思の惑を斷せしにより、其の怒らざるを知りて破拆を加ふるが、佛の弟子を信するところなり。○内懷慙愧とは、佛の小乗教を彈斥するを聞き、耻小慕大の念を起し、大に心に自ら卑しめ耻づることろを生じ、吾等は到底自他兼濟の機にあらず、敗種の徒なりとなして、慙愧を懷くことをいふなり。此の慙愧の心、即ち大機の内に熟したる證にて、酪味の轉じて生酥の益を得たるところなり。○心漸淳淑とは、淳淑は、淳はスナホといふこと、淑はヨキことなり。既に見思の煩惱を斷じて、瞋恚の

情も除去したる故大乘の教によりて彈呵を加へらるゝとも、毫も心に不快の感も起さず、まことにスナホにて、靜かなる有様を淳淑といふなり。此の淳淑の狀態が、即ち大乘の入口たる通教に等しき利益を得たるところ、通益を成じたるどころなりといふべし。

(通解)今此の方等部を、「法華經」の信解品の譬喩にあて、見るときは、恰かも長者の子が除糞の賤しき業を執ること二十年の後、漸々長者と親しくなり、今は互に心底より相信じ合ひて、出入何の難る所もなくなりたれども、なほ未だ眞の父子たることを知らざるが故、草菴の中に別居しつゝありとの一段に相當するなり。此の譬喩は、佛が二乗の教を以て、淺近の法を授け、見惑に一無間一解脫、思惑に九無間九解脫(これを類聚合斷といふ)の順序を経て、煩惱を斷除し、之によりて佛は二乗に瞋恚の情なきを知り、之に彈呵を加へて、大乘に誘入せんとし、二乗亦佛を信じて、敢て瞋らず、斯くして二乗の心内、密に大機の熟することを致し、今や入りては大乘を聞き、出でゝは小乗を聞くも、共に驚かず、畏懼せず、耻小慕大の念漸く萌して、自利の法門の卑しきを感じ、自他兼濟の法門の徳用の大なるを思ふも、我

は蓋し小機にして、到底大乘の法門により、佛陀の位に至ることを得ざる敗種の徒なりと卑下して、内に深く慙愧の志を抱く、然れども固より既に敗種の徒なりと卑下するが故、敢て大乘の教により、大乘の門に入らんとせす、なほ小乗の道果に安んずること、恰も窮子の草菴の舊居に安んずるが如し、唯已に内大機の熟するあるがため、彈呵を受けて不快の念なく、却て耻小慕大の心ありて、深く慙愧の情を懐くものは、これ即ち通教に等しき利益を得て、大乘の入り口に臨める兆なりと見るべし。

次説般若轉教付財融通洵汰。此般若中不説藏教帶通別二正説圓教。

次ぎに般若を説かん、轉教付財し、融通洵汰す。此の般若の中には藏教を説かず、通別の二を帶して正しく圓教を説く。

此の一段は、先づ化儀の部意と、圓實の部主との二つより述べたり。部意部主の二見よ、轉教付財融通洵汰は、般若部の効能なれば、これは部意なり、此の般若中には、四教の中にて、藏教は説かず、通別二教を帶して、正しくは圓教を説くといふは、部中用教として、般若部にては、四教を悉く説くか、或は何々を用ふるかを示したる

にて、帶通別、正説圓教の七字は、圓實の部主より、即ち佛の目的上よりいふことなり。○轉教は轉は轉度のこと、即ち他人に轉じワタシてヤルことなり。故に轉教は佛の教を弟子にワタシて佛に代りて法を説かしむることをいふなり。般若の會座にては佛自ら説法して諸菩薩に教示せず、舍利弗、目連等の聲聞の小乘諸弟子をして佛に代りて之を説かしめられたり、故に之を轉教といふ。○付財とは、轉教の喩なり。佛が法を二乗の弟子に授けて佛に代りて説かしむるは、長者が其の所有の財産を窮子に付するが如し、故に付財といふ。蓋し之を付せられたる窮子は、其の長者の實際自己の父たることを知らざる故、全く長者に依頼せられしものとのみ思へども、長者の心にては、此の時已に財産を全く其の子に與へたるものなり。今もなほ此くの如く、佛が二乗をして轉教せしむるときは、二乗の輩は固より方等の時に、自己は小乗の機にて、大乘の如きは企て及ぶべからずと慙愧し、大乘は菩薩の法にて、我等の分齊ぶんせいにあらずと、小乗と大乘とを二途に考ふる故、今佛の意を承けて、大乘の法門を轉ずと雖、單にこれ佛の加被力かひりきによること、思ひ、決して自己の分にあらずと思惟し居れども、佛の意より見れば、佛

は二乗の内に、已に大機の熟するを見て、此の時最早法財を以て二乗に付したるものなり、故に之を付財といふ。○融通とは、小乗の徒、方等部に入りて四教對説の座に列し、大乘を以て小乗を對破するを聞き、自己を卑しめて敗種と思ひ、徒らに耻小慕大して、我は小機なり、大乘は菩薩の法門なり、企及すべからずと、大小の間に區域を立て、別途に考ふるを以て、此の大小二乗の隔てを除去するを融通といふなり。般若に於ては、一切法皆不可得なりと空理を説示し、大乘といひ、小乗といひ、一切の法悉く差別なしと混じ、一切の法は悉く不可得の法、悉く摩訶衍まがえん大乘なりと開會する故、融通と呼ぶなり。○淘汰は、融通の譬喩なり。法の上に大小二乗の差別を泯亡して、融通すれば、之を聞く衆生の方にては、一切皆空の智慧にて、此の差別の妄見を除去するなり。淘汰は垢を洗ひ流すことなれば、此の二乗の徒が、大小二乗の間に差別を立つる迷執妄見を洗ひ流すなり、故に淘汰といふ。○不説藏教とは、小乗を説かぬことなり。通教にありては、小乗を對破せんがため、大乘に對して小乗を説けども、別教に入りては、別教の分として、小乗を説く必要は全くなきなり。然らば實際毫も別教中には小乗のことを言はぬや

といふに、決して然らず。例へば佛教を學ぶものが、西洋哲學を参照するが如く、佛教の分として、正しく西洋哲學を研究するの必要はなけれども、佛教研究の上に、助けとなること少からざれば、傍ら之を要すると同じく、今も別教の本分には、何も直接の關係はなけれども、小乗の教も(例へば空無常無我の説の如き)大に般若の空觀に助けとなること多き故、助道觀としては、別教中にも之を説けることあり、但しこれは別教としての本分には關係なきことにて、到底通教にて小乗を説くの類とは、同一視すべからず、故に特に藏教を説かずといふなり。○帶通別、二正説圓教とは、前にいひし如く、圓實の部主の上よりいふなり。然し般若の部意よりいへば、通教を帶して別圓を正意とすべき理由なり。故に「輔行」には、般若傍用通教、正用別圓といふ所以なり、これは部意の上よりいふことなり。勿論般若は別教にて、正しくは密成別益とて、二乗をして別教と等しき利益を得せしむるが此の部特殊の目的なれば、部意の上よりは、別教が必ず正意とならざるべからざる理なり。

(通解)次に般若部のことを説かんに、般若部にては、其の部意とするところは、佛が

小乗の機根漸く熟したるを見て、之に法を付屬して、轉教せしめ、一切法不可得なり、一切摩訶衍なりと説き、以て大小二乗の間に區別を付せし迷執を洗滌せしむるにあり。轉教は二乗よりいへば佛の加被力により、佛よりいへば二乗に法財を付したるなり。融通は法の上よりいへば二乗の區別を混じたるなれども、機の上よりいへば、其の區別の妄執を淘汰するなり。斯くの如き般若部の中にて、用教は如何といへば、助道の觀としては、小乗のことなきにあらざれ共、般若の本分としては、藏教を説かず、又圓實の部主よりいへば、正しく圓教を説くにあること勿論にて、通別二教は之を狹帶するに過ぎざれども、般若部の特殊の目的よりいへば、實は通教を帶して別圓を正意とすべきなり。

(参考)何故に般若部にて通教をも帶説するかといふに、之に二意あり、一は方等の時に新たに横來せし小機に對し、通教を知らしめんがためなり。二は此の般若の時に始めて來りし横來の新小機のために、小乗を知らしめんがために、通教を説くなり。然らば何故に般若の座の横來の機のために、小乗を説かず、通教によりて小乗を知らしむるやといふに、既に般若の座に至りては、通教の

時に比して、如來の教化の功、最早特別に小教によらず、通教にて小乘を悟らしむるを得るに至りしによるなりといふ。故に通教は、小乘の徒と共に聞くことを得る説にて、小乘と共に説く故、共説般若といひ、別教圓教は、二乘與り聞くことを得ず、所謂界外の法門にて、獨り菩薩をのみ對機とするなれば、之を不共般若といふ。但しこれは教の上より、即ち別教の性質、圓教の本分の上より斯くいふにて、若し部の上よりいはず、般若部中にも、隨分二乘を説かざるにあらず、若し部の上より見て不共なるものは、即ち華嚴ならん、華嚴は蓋し部として、小乘の全く與らざるところなり。

約時則禹中時。時第四 約味則從生酥出熟酥。此從方等之後出摩訶般若。酥四熟

時に約すれば則ち禹中の時、時第四 味に約すれば則ち生酥より熟酥を出す、これ方等の後より摩訶般若を出す。酥四熟

禹中は前にいふ如く、巳の時にて、禹は隅と同義なり、太陽の東南の隅に來りし時刻のことなりといふ。○從生酥出熟酥は、相生濃淡の二義あること、前に屢述べたるが如し。七八頁を見よ

(通解)般若部は時に約すれば禹中にて、平地の三分の中の第二三四頁即ち十時頃に當り、五味に配當すれば生酥を煮て熟酥となりしところなり、これは佛方等を説き給ひし後、二乘の機漸く進んで、耻小慕大の念の熟したるところなり。

信解品云。是時長者有疾。自知將死不久。語窮子言。我今多有金銀珍寶。倉庫盈溢。其中多少。所應取與。此領何義。答明方等之後。次說般若。般若觀慧。即是家業。空生身子受勅轉教。即是領知。已上三味。對華嚴頓教總名為漸。

信解品に云く、是の時長者疾あり、自ら將さに死せんとすること久しからずと知り、窮子に語りて言く、我れ今多く金銀珍寶あり、倉庫に盈溢す、其の中の多少、所應に取與せよと、これ何の義を領する。答ふ。方等の後、次に般若を説くことを明す。般若の觀慧は即ち是れ家業なり、空生、身子、勅を受けて轉教す、即ち是れ領知なり。已上の三味は、華嚴頓教に對して、總じて名けて漸となす。

此の信解品の文は前五八に述べたる所を見て知るべし。○長者は佛に比するなり、長者は富貴の人なり、佛は精神上の富貴者なり、故に此に譬喩とす。○自知

將死不久とは、佛の衆生濟度の機縁盡きて、將に般涅槃に入り給ふことも近つきたりと知り給ふに譬ふるなり。○多有金銀珍寶とは、金と銀とは、空理と中道の理とに譬ふ、珍寶は大般若品勸學の中に明せる、無量の法門に比す。蓋し佛敎は之を敎の上より見れば、藏通別圓の四あれども、此の四敎に説ける道理の上より見れば、有に執着するを破する空理を説き、空理より中道の理に進ましむるもの故、空理と中道の理との二つに過ぎぬなり、故に今空中の二を出して金銀といふ。此の空中の理を示すに種々の門を開き、無量の方法にて衆生を誘導す、故に其の理は多からずと雖も、其の方法は無量なれば、多く金銀の珍寶ありといふなり。○倉庫盈溢とは、倉庫はクラなり、米や粟などを入る、クラは倉なり、武器兵器を入る、クラは庫なり、此の倉庫は定慧の二門に譬へしなり。(般若經には、定に百八三昧三昧は定を明し、慧には十八空を説けり、十八空は六根六識六境を空するなり、空中の理、種々の法門は、皆此の定慧のクラに藏して缺くるなしとの意を、倉庫に盈溢すといひしなり、盈溢はミチアフルにて、クラよりモレコボル、ことなり。○其中多少は、其の倉庫の中にあるものは、イクラにてもといふことなり。

多少は多くでも、少くでも、思ふ様にといふことなり、多い方にていへば、萬有の真相を分析説明するに無量の義あり、少い方にていへば、此の無量の萬有唯一空なり、之を廣略の二門といふ。○所應取與とは、取は自分にて取ること、與は人にヤルこと、自分にてホシケレバ自由に取り、人に與へんと思はば自由に興へよといふ意なり、これ此の定慧の中に藏せる空中の理、無量の法門を取りて、自ら修行し、悟りを開くとも、又此の敎にて他人を化度し、救濟するとも、自由勝手にせよと、佛が命じ給ふに譬ふるなり。○般若觀慧とは、『大般若經』に説ける八十一箇の法門を觀する智慧なり、此の八十一の法門が、悉く無常なり、無我なり、空なり、不生不滅なり等と觀するを、般若の觀慧といふ。○是家業とは、家業は其の家の職業なり。即ち長者にていへば、金銀の出納、財産の取締などにつきての、一切の仕事は長者の家業なり。八十一箇の法門は佛の財産にて、之を取締り、之を出納するが佛の家業なり。即ち此等の法門は、或は無常と觀じ、無我と觀じ、或は空と觀じ、之れを菩薩に拂ひ渡すが、佛の家業にてあるなり。○空生身子は、空生は須菩提のことにて、須菩提は翻譯すれば空生となる。身子は舍利弗にて、舍利弗譯すれば

身子となるなり。佛弟子の中にも、須菩提は解空第一と稱せられ、最も空理を證りし人にて、舍利弗は智慧第一と稱せられし人なり。此の二人が般若の座にて菩薩に轉教するは頗る面白きことなり。何となれば、衆生は兎角有に執着するもの故、一切法皆空と説きて、空理によりて眞正の智慧を發す、之を般若の空慧とす。空生と身子とは、此の空慧に相當する故、佛に代り、佛の加被力によりて般若を轉教するものなればなり。故に『補行』には、凡言加者、加於可加、須菩提、空與般若、空相應相似、是故佛加令其說空、般若、是智慧、故亦加身子、所以但加此二人也といふもの此の意なり、加は佛が加被し給ふことなり。○領知等とは、須菩提、舍利弗が佛の加被力によりて、諸菩薩に轉教するまでに至りしをいふ。但し此の領知は眞に佛の本意を自得せりといふことにはあらず、誤るべからず。前にもいひし如く、法華已前、不論改觀にて、法華以前に、二乗が其の觀道をやめて、中道に向ふ筈はなき故、領知といふも、實は佛力の爲めに、兎に角佛同様に説教することの出来る様になりしところをいふなり。故に『集註』には、被加爲奉命、所說名領知、名說爲領、無別領といへる妙樂の文を引き、又大品二乗已有入假之義、聲聞轉

教密破塵砂、玄義、大品會法、不會人、疏等の文を引き、之れを説明せり。『名說爲領』とは、佛の加被力にて轉教するところが、即ち領にて、領知とは其の外のことにあらず、二乗觀を改めて、斯く位が上がりしにあらずとのことなり。されば此の時には、表面より見れば、須菩提、舍利弗の二人は、恰も從空入假の状態にも見え、既に塵沙の惑を破したるもの、如くも見ゆるなり。從空入假とは、有の執着を破して見思の煩惱を斷じ、塵沙の惑を破すとて、獨り空理をサトルのみならず、なほ差別の理にも通達して、無量の衆生の病に應じて、自由自在に所謂應病與藥の法門を説き、救濟意の如くなるに至りし佛の如くにも見ゆるなり、塵沙の惑とは、差別の理に通せず、利他の自由ならぬ惑なり、尙ほ後に明すべし、然しそれは、唯佛の加被力によりしもの故、内に其の機の熟せしの致す所にて、入假の義ありといひ、密に塵沙を破すなどいふなり、未だ眞に入假の人にあらず、實際塵沙を破せしわけにてはなきなり。されば般若には、方等の如く、大小二乗を並べ説きて、大乘の小乗より勝れたることを説かず、八十一箇の法門悉くこれ大乘にして、大小二乗固より區別なしと融合すれば、之を法開會といふ。然しこれ理論上、即ち法の上

のみにていふことにて、現に須菩提、舍利弗が、口に萬有一切皆空の理を説けども、其の心にては、なほ自ら二乗の徒にして、大乘の分にあらずと卑下し、一切皆空の理も、皆大乘諸菩薩の爲めに説くところにて、我等が身に修し得べき法にはあらずと思へり、これを名けて人を會せずといふ。故に理論上にては、大小二乗一切平等なれ共、實際上、人の上にては、未だ差別の見を離れず、これ法華に及ばざるところなり。法華にては法に開會あるのみならず、人も開會して、餓鬼、畜生より以上聲聞、緣覺、菩薩、一切悉く一佛乘に歸入するに至る次第なり。故に大法は法を會して人を會せずといふなり。○已上三味とは、酪と、生酥と、熟酥の三なり、即ち阿含と、方等と、般若の三を指すなり。此の以下の爲漸までは、以上漸教を叙述せしところを總結せし文にて、此の般若のみにつきての文にはあらず。

〔通解〕更に『法華』信解品に照らして見るときは、此の般若の一部は、恰も長者が病氣に罹り、最早死も遠からずと思ひて、我が子なる窮子を枕邊近く招き寄せて、我が所有する多くの金銀の珍寶は倉庫に充滿して溢れんばかりなり、此の一切のものは、皆汝に付する故、其の中の財寶は、ハ、ク、ラ、にても汝自ら之れを取り、將た人

に與ふるも勝手たるべしといへる一段に相當するなり。何となれば、此に長者といへるは、即ち佛にして、佛が衆生濟度の因緣盡き給ひて、涅槃に入りたまはんこと最早遠からずと知り給ひ、佛の有し給ふ空と中との理、一切の法門、收めて定慧の倉庫に存し、完全にして缺くるところなきもの、悉く之を付して、自行化他意の如くならしむ、故に之を付財といふこと前に述べたり、これ衆生が方等の座に於て、既に大乘のしかく嫌ふべきものにあらずとせるのみならず、却て耻小慕大の念を起したるにより、二乗の徒、心にこそは、なほ自ら二乗敗種の徒なりと賤みて、到底大乘の學人にあらずとは思ひ居れ、佛は既に此に至りて、機の漸く熟するを知り給ひ、之に授くるに佛の家業なる般若の觀慧を出てし、前に付財といひ、今家業を付するといふ、其の實は一なり、何となれば、財は空理中道の理等にて品物なり、樂はハ、ク、ラ、キ、故作用の方よりいふなり、つまりは同一なりと知るべし、須菩提、舍利弗が、之を受けて如來に代りて轉教し、佛の代理として一切の財寶を裁斷し、管理し、即ち佛の加被力によりて諸菩薩に向て、此の般若の道理を説法せしなり。但しこれは、法華已前不論改觀なれば、固より未だ眞に従空入假の位に至り

しにはあらざれ共二乗の内に既に大機醇熟して密に塵沙を破するの分齊に入り、大乘の品物を管督するに至りしところが、即ち領知に當るところなり。領知とは、長者の命によりて、窮子が其の財寶をツカサドリしところなり。(此の領知は、般若の法開會を指す、般若には人開會なし、この法開會は方等に勝りしところにて、人開會なきは法華に及ばざるところなり。)

以上述べ來りしところの酪味(鹿苑)、生酥味(方等)、熟酥味(般若)の三は、華嚴の如く、佛の隨自意の説をムキダシに頓説したるものにあらずして、衆生の機根を訓練し、開發調熟せしめんがために、漸々誘導したる法門なれば、華嚴の頓教といふに對して、共に之を漸教といふなり。

第三秘密教者。如前四時中
如來三輪不思議故。或爲此人說頓。或爲彼人說漸。彼此互不相知。能令得益。故言秘密教。

第三に、秘密教とは、前四時の中に、如來の三輪不思議なるが故に、或は此の人の爲めに頓と説き、或は彼の人の爲めに漸と説き、彼此互に相知らずして、能く益を得せしむるが如し、故に秘密教といふ。

秘密教とは、具さにいへば、秘密不定教なり、此の事前にいへり。二五頁 常見よ通常人を教ふるは皆顯露定教にて、これは平凡のこと故、特別に顯露定教と事々しくコトワルには當らぬ次第なり。即ち多くの人を集めて小乗のことを説けば、これを聞きて、心に解了せしものは皆小乗の果を得、又通教の説法なれば、通教の果を得、別圓皆之に同じ、即ち聽聞者も、敢て互に相知らずに居るにもあらず、皆共に同座して、互に小乗を聞けば小乗の説法を聽聞して居ると知り、聞きし上にて同一の果を得る、これ顯露定教にて、前の頓漸の二は之に屬するなり。然るに之と異にして、同聽異聞どうもつゝいもんといひ、等しく小乗の説法を聞いても、利根のものは小乗の理を聞きながら、其の奥の大乘の理を合點するが如きは、不定といふものなり。其の不定の中に、佛が聽聞者をして、互に其處に居ることを知らざらしむるを秘密といふ、故に秘密不定とす。勿論此の秘密といふにも、人と人と知らぬ秘密もあり、法を知らぬ秘密もあるべし。例へば説法の座に、甲乙丙丁等膝を交へて、小乗を聞くに、如來の不可思議なる神力にて、甲も乙の居ることを知らず、乙も甲の居ることを知らず、丙丁等皆互に斯くの如きを、人と人と知らぬ秘密といふべし。既

に人を知らぬが故、甲が同じく小乗を聞きて、しかも小乗を以て直ちに大乘と聞きたりとするも、乙が能く之を知るべき道理は固よりなく、甲も乙が小乗を小乗と聞きしことをも知るべき道理なし、されば人法共に知らぬが秘密不定教なり。即ち秘密教と不定教とは共に同聽異聞にて小乗なればとて、必ず聽衆皆小乗を得、大乘なれば大果を得るとは定まらぬ故、兩つながら不定教なれども、人と人と互に知れるか、知らぬか、差別の點なり。○三輪、不思議とは、佛の身口意の三のハタラキの變化自在不可思議なるをいふ、身の變化自在なるを神通輪といひ、口を正教輪といひ、意を記心輪といふ、記心とは他人の心中をシリワケルことなり。此の三不可思議のハタラキにて、同一の説法會座にても、或人は頓と聞くもあり、或人は漸と聞くもあり、聽聞者根機の利鈍によりて、受くるところの結果利益等しからず、之を要するに皆佛がソレハ、ソレに相當の利益を得せしめんがため、煩惱を摧破するにあらざるはなし。なほ車輪の轉じて邪魔物を摧くが如くなれば輪といふ。此の三輪のハタラキは、如何なる第一位の菩薩等覺の菩薩補處の菩薩とて佛の候補者なりといへども、窺ひ知るべからざるものなり、故に不思議と

いふ。

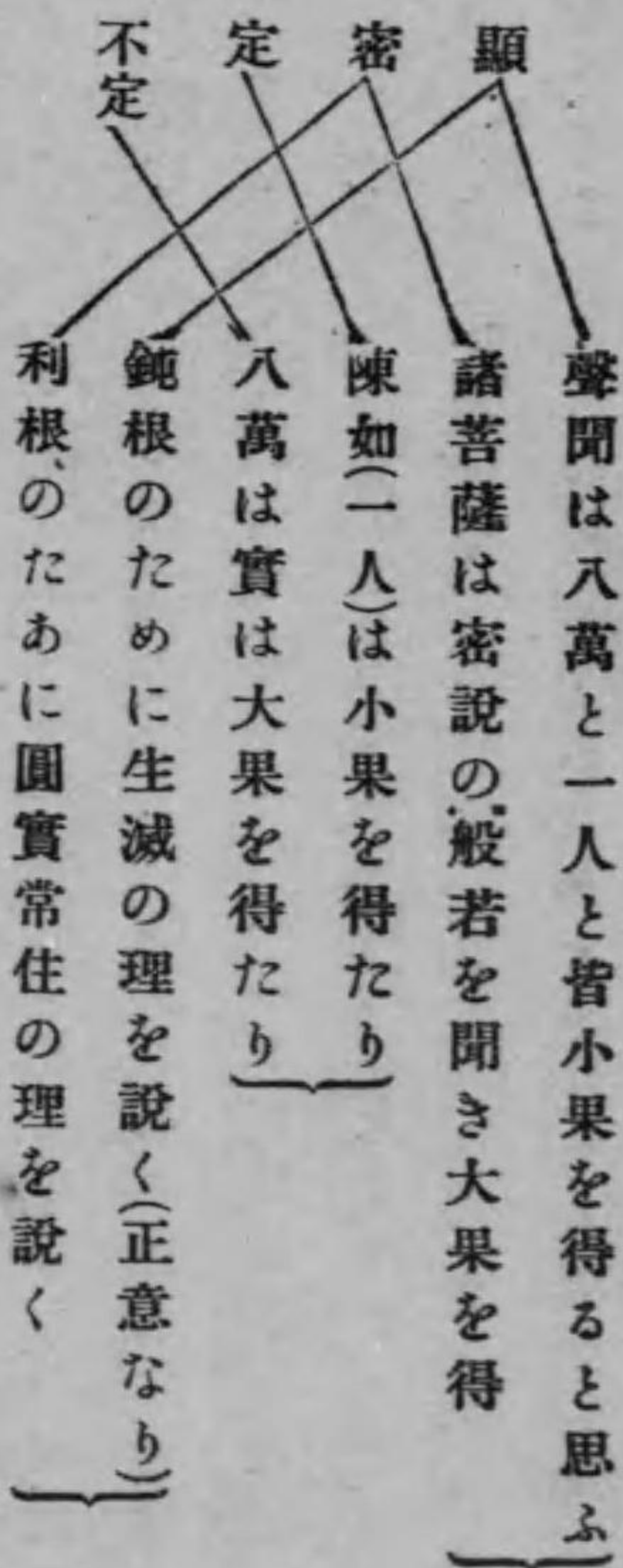
(通解)頓教と漸教とを説きたれば、次に秘密教を説かん。秘密教とは、具にいへば秘密不定教なり、前の華嚴、鹿苑、方等、般若の四時に於て、其の會座其の會座にて、華嚴にては華嚴の果、鹿苑にては鹿苑の果、ソレハ、ソレ、其の會、相當の果を得れば、ソレハ、顯露定教なれども、中には顯露によらず、秘密の方法にて利益を受くべき機根のものなきにあらず、されば前の華嚴より、般若までの四時の間に、如來の不可思議なる三輪のハタラキにより、聽者をして人法共に互に相知らざらしめて、一座の中にて、或は甲をして頓と聞かじめ、或は乙をして漸と聞かじめ、以て機の利鈍により、相當の利益を得せしむるが故に、之を秘密教といふなり。(既に一説法の座にても、聽者の方にて別々に聞くが故、或は小果を得るもあり、或は大果を得るもあり、結果一定せず、故に不定教といふなり)。

(注意)一此の秘密教と、不定教とは、固より前四時に通じてあること故、一定の經文はなきこと勿論なり。蓋し此の秘密の名稱は、龍樹菩薩の「大智度論」より出でたるものにて、「大智度論」に、

諸天子嘆云、我見閻浮提、第二法輪轉、今轉似初轉、問初轉、少今轉、多云、何以大喻、小而言似耶、答、諸佛有二種法輪、一者顯、二者密、初轉聲聞見八萬及一人、諸菩薩見無量阿僧祇、人得二乘、無量阿僧祇、人得無生忍、無量阿僧祇、人發無上道心、行六波羅密、阿僧祇、人得初地、乃至十地、一生補處、坐道場、是名爲密、

といふ文あり、諸天子より似初轉までは、『大品般若』の文、『大論』は之を解釋せしなり。此の文の意は、第二法輪轉(これは般若のこと也)は、初轉法輪(鹿苑時の)の如し、(實に初轉法輪以來の盛觀なりと、般若の座にて、無量の諸天が無生法忍を得たるを、諸天が讚嘆したる言なり)と、經にあるは怪しむべし。何となれば、鹿苑の時には、八萬の諸天が無生法忍を得、阿若矯陳如が阿羅漢果を得たりとあり、然るに般若の時に得しは無量の諸天なれば、前よりは極めて多し、然るに般若の盛を以て、鹿苑の時に比するは、涙雨の如しといふべきを、雨涙の如しといふが如し、多數のものを少數のものゝ如しとは、理に合はず、奈何。答へて曰く、若し顯露の方より見れば、鹿苑の時は、八萬の諸天も、一人の陳如も、皆法眼淨(小果)を得たり、但し秘密の方より見れば、小乗の時に、密説の般若ありて、無量

の諸天、既に大乘の果を得たるものありしなり、般若は通別圓を兼ね、故に果にも差別あるなり、斯くの如く阿含の時に、既に八萬と一人は、唯小果を得て、無量の諸天の居ること、又大果を得しことも知らず、無量の諸天の方にて、亦八萬一人を知らぬ故、こゝが即ち秘密教たるところなり、秘密の名稱は、之よりはじまりしなり。然るに『大論』によるに、此の八萬の諸天、小果を得たりと見るは、聲聞の方より見たる話にて、諸天自身にては、實は大果(無生法忍)を得たりしなり。されば八萬一人、共に小果を得たりと見るは、小乗の當意より見たるもの故、顯露定教なり、之に對する秘密は、無量の諸天の密説般若を聽聞せしなり。然れども、八萬の諸天、其の實大果を證せしもの故、鹿苑の當意に相當する果を得しものは、陳如一人にて、八萬は小乗の當意に相當せず、故にこれは不定なり。但し八萬と一人は、互に相知れるが故、秘密とはいふべからず、然れども法は小乗の徒が知らぬ所故、法と得益の上よりいへば、諸天の大果を得たるは、これは秘密なり。



(注意) 佛の頓漸を説くにつき、三説相對と、説默相對といふことあり、三説とは頓と漸と不定の三なり。第一に甲の會座(集會なり)にて頓と説き、乙の會座にて漸又は不定と説くことあり、第二に一會座の中にも、甲某のために頓と説き、乙某のために漸又は不定と説くことあり、第三同じく一會座にて、甲某にも、乙某にも等しく頓又は漸又は不定と説き、しかも兩者をして互に知らざらしむるにあり、以上の三を三説相對とし、次に説默相對とは、説は説法すること、默は入定すること、第一に甲の集會にては説法し、乙の會座にては入定し、第二に一會座中にて、甲某は説法し給ふを聞き、乙某は入定し給ふと見、第三に甲乙共に

説法し給ふと見、又は入定し給ふと見る、唯甲乙互に相知らず、これ秘密たる所以なり、故に秘密には先づ以上の如き種類あり。

- (一) 此座十方相對(十方とは他の諸會座を指す)
- (二) 多人一人相對(一會座の中にて甲某)
- (三) 俱三相對(頓漸不定の三を聞き、甲乙等しきなり)
- (四) 此座十方相對(以下上に準じ)
- (五) 多人一人相對
- (六) 俱説默相對

以上は秘密不定の分類なれども、既に顯露定教(頓漸)と、顯露不定教(即ち略して單に不定教)と、秘密不定教(即ち略して秘密教)とあれば、必ずや秘密定教もあるべき理なり、今以上の六種の中、第三と第六は、其の座に居る甲乙丙丁互に其の居ることを知らずとはいへ、皆同じ説法を聞き、同じく入定し給ふと見るといはば、其の所得の果は、不定とはいふべからず、これ即ち秘密定教なり、但し秘密教は、多く不定のもの故、秘密定教は、秘密不定教に屬して、特に分類せざるものと

知るべし。

第四不定教者。亦由前四味中。佛以一音演說法。衆生隨類各得解。此則如來不思議力能令衆生於漸說中得頓益。於頓說中得漸益。如是得益不同。故言不定教也。

第四に不定教とは、亦前四味の中に、佛一音を以て法を演説するに、衆生類に随つて各解を得るによる。これ即ち如來不思議の力能く衆生をして、漸說の中に於て頓の益を得、頓說の中に於て漸の益を得せしむ。是くの如く得益同じからず、故に不定教といふなり。

佛以一音演說法。衆生隨類各得解。とは此の語『維摩經』の佛國品に出でたり、今此に引きて不定の意を明すに用ふ。佛は一音にて演説し給ひ、敢て一人一人、別々に説き聞かせ給ふにてはなけれども、衆生の方の機根次第にて、或は漸教と聞くもあり、或は頓教と聞くもあり、其の機類次第にて、解了する旨各異なるところ、これ即ち不定なり。これは如何なる故ぞといふに、衆生に頓種あり、漸種あり、種々の區別あるによるものにて、漸種とは、宿世より漸教の染みつき居るものなり、頓教の染みつき居るものは、漸教の説法を聞いても、之を頓教と解し、漸教の染みつ

き居るものは、頓教を聞いても、漸教と解了するなり。斯くの如く頓漸の種、宿世よりの由來にて、自ら區別ありと雖も、此の宿習の發するは、専ら佛三輪の不可思議力によるものなれば、一音の説教を異解するは、一方よりいへば宿習の力なりとはいへ、若し教の方面よりいへば、佛の説法の不可思議によるものとす、故に効を佛の方に歸して之れを不定教といふなり。(此に頓種漸種といふ、其の種は、種熟脫の種とは異なり、種熟脫のこと、種熟脫の種も、共に過去世に屬するタネなれども、種熟脫の種は、久遠の昔し、大通智勝佛の時に、圓實の法門を聞きし薰習にて、之れを圓乘の下種といひ、今いふ種とは、此の圓乘の下種が、段々熟して、其の間に或は頓教を聞き、或は漸教を聞きしが、薰習することにて、これ字面通りの宿習といふべし)次に佛の一音といふことにつきていへば、佛の一音に五對あり。

大小相對—大乘の一音といふは、『起信論』に「同音一演、異類等解」とあり、同音とは佛は一音にして、支那人にも、日本人にも、印度人にも、西洋人にも、フカハ様

ものに、一時にワ、カラ、シ、むるを大乘の一音といふ、小乗の一音とは、中天竺の一梵音として、印度語にて説法するなり、尤も支那人來れば支那語となり、日本人來れば日本語となるべし、即ち對手次第にて、言葉も變ずるが大乘に及ばざるところなり、故に小乗の一音とは、一梵聲にて、印度語のことなりとす。

因果相對—因とは、別教の初地圓教の初住此の二はつまり同じ位なり以上の菩薩の一音なり、果とは、極佛果位の一音なり、これは共に前の大乘の一音なり、故に菩薩も初地初住以上ならでは加へられぬなり、何となれば、初地初住以上は無明を斷じて、一分中道の理を證すればなり、此の事三八頁中道の理を證せざるものは、ナ、カ、ク、一音説法を異類等しく解せしむ、境界には至らぬなり、但し因位の一音と、果位の一音とは、勿論階級ありて、有限と無限の區別あるなり。

當分跨節相對—當分の一音といふは、藏教には藏教教主の一音あり、通教には通教教主の一音、別教には別教教主の一音あるなり、圓教亦同じ、故に當分の一音には四の差別あり。然るに法華跨節さしの一音とは、跨は越なり、節を越え

て藏通別圓の階級を脱し、四教教主の説教は、皆通じて等しく、これ一圓佛の一音のみと見るをいふ。

顯密相對—これ顯露の一音と、秘密の一音なり、顯露教秘密教のことは、前に屢述べたれば特にいはず。

定不定相對—顯露教にも定不定あり、秘密教にも定不定あり、故に定教の一音と、不定教の一音とを分つ、これ亦前を見れば別に説明を要せざるべし。

今此にいふ一音とは、此の五對一音の中にて、勿論不定の一音なれども、不定教は藏通別圓の四教に通すれば、大小相對をも兼ね、大小相對を兼ねて四教各別るゝ以上は、跨節の一音ならで、當分の一音なること勿論にて、且つ極佛果位の一音にて、因位菩薩の一音ならぬはいふまでもなし。○能令衆生於漸說中得頓益云々とは、如來の不思議力にて、衆生をして漸説を聞いて頓益を得せしめ、頓説を聞いても漸益を得せしむるなり、これは前にいふ如く、衆生宿習の然らしむる所といへども、佛力の不思議に催さるゝものなれば、佛の力により、衆生をして斯くせしむるといふなり、能令の二字注意すべし。前の秘密の時も、如來三輪、不思議、故、或

爲此人說頓或爲彼人說漸彼此互不相知能令得益といひて能令の二字を使用せり其に佛力の不思議によりて此の妙作用を呈することを示すなり。祕密教の方にては如來三輪不思議といひ不定教の方にては如來不思力といふは如來三輪不思議力を分ちて文をアヤナセシなり此の於漸說中得頓益於頓說中得漸益につきて『集註』には『釋籤』『妙玄』等の文を引き不定の相を説けり左に之を示すべし。

妙玄云雖說四諦生滅而不妨不生不滅

妙玄云雖高山頓說不動寂場而遊鹿苑(說經の處に就て云)

若方等般若雖爲菩薩說佛境界而有二乘智斷此二時中俱有小果新得舊得

雖五人證果不妨八萬諸天得無生忍(約人に)

1と2は華嚴と鹿苑を相對していふ四諦生滅とは小乘にて説く四諦の理のこ
とにて之を生滅の四諦といふ後にて明すべし一八九頁 即ち華嚴の座にて頓教
を説くと同時に鹿苑に小乘を説きしなり即ち寂場を動せずして鹿苑に遊び給

此座十方相對

一人多人相對

法に約す

へり六八頁 此座十方相對にて不定を談するなり即ち一佛の同時の化に小
乘漸教を聞くもあり大乘頓教を聞くもあれば同聽異聞の不定とす尤も此の頓
漸兩座の聽衆中には互に知るもあり知らぬもあるべし今は其の知れる方にて
不定を立つるなり若し互に知らぬ方は祕密なり以上の12に華嚴頓教と藏教
を相對して説きしなり。3は藏教と通別二教とを相對して一人多人相對の上
より不定を説く其意は通別の方等般若の座にては佛諸菩薩のために佛境界を
説き給ふものなりと雖なほ二乗のものが此の座に居る即ち通教の時なれば横
來新受の小機が藏教を受け般若の時なれば横來新受のものが通教を受くるな
り。斯の如く通教の時に始めて藏教を受くるものもあれば別教の時に始めて
通教を受くるものもあり又藏教の時より順を経て通教別教と登り來るものも
ありて其の所得の利益皆等しからざれば一座の中に一人多人相對の不定と
いふべし以上は法に約して不定を説けるなり。4は藏教と般若の別教とを相
對して人に約して不定を説くなり即ち鹿苑の說法にて五人の比丘は顯露の藏
教を聞きて阿羅漢果を證したるときに八萬の諸天は密說の般若を聞きて無生

忍大乘の果なりを證せりとあり、故にこれは八萬の諸天と五人の比丘との人の上につきて不定の相を明すなり。

〔通解〕第四に不定教とは如何なるものぞといふに乳酪生酥熟酥の四味、即ち華嚴鹿苑方等般若の四時に通じて、例へば鹿苑藏教なれば、其の藏教の座にて、小果を得るものあり、大果を得るものあり、方等にも小果を得るものあり、大果を得るものあり、華嚴も般若も皆同じ、唯法華には斯くの如きことなく、皆大乘一圓頓の果に融入す、故に不定教は、前の四味に通ずといふなり、佛が一音一音に五種相對ある中、不定の一音にて、大小を兼ね、當分の一音、極佛果位の一音なりを以て法を説き給ふに、之を聞くところの衆生、其の宿習のために、漸種頓種と分れ居れるが、佛の三輪の不可思議力によりて、此に頓説の中にて漸の益を得るもあれば、漸説の中に頓の益を得るもあるなり。勿論これには此座十方相對の上にて、一人多人相對の上にていふことを得る次第なり。斯くの如く此座十方相對或は一人多人相對の上にて、一佛の化縁下、同時の説法に於て、得益斯くの如く等しからざるが故に之を不定教といふなり。(寂滅道場の説法は華嚴なり、鹿苑の説法は

阿含なり、然るに一人多人相對の上にて、阿含説法の時に、五比丘は小果を證し、八萬の諸天は大果を證すといへば、之を不定といふも不可なきが如しといへども、華嚴と阿含とは説法の性質の固より相違するに、此座十方相對を立て、華嚴の方にて大果を得しものと、阿含の方にて小果を得しものとを同聽異聞といふは、如何といふに、佛の方にては一説法にて、之を頓教(華嚴)と聞き、之を漸教(阿含)と聞くは、衆生の方にて受け取る故、そこが佛の無謀應用、三輪不思議の妙作用と知るべし、故に矢張り同聽異聞といひて不可なることなきなり。

〔参考一〕祕密教と不定教とを比較するに三同一異あり。

(一) 四味に通じて華嚴に通せず(前に述べしが如し、祕密教も亦同じ、其の理考へて知るべし)

三同 (二) 部軼なし(別に祕密教の經、不定教の經といふものなし、これ頓漸圓等に異なるところなり、参考二を見よ)

(三) 如來不思議の力による能令の二字のこと、前に述べたり)

一異 — 祕密教は聽衆互に相知らず、不定教は相知る、故に一を祕密不定とい

ひ、一を顯露不定といふ、^{二六頁}要するに祕密と不定は、共に同聽異聞にて、得益不同なるものなれ共、唯一の差異點は、互知と互不知との間にあるなり。

然るに本文には、毫も此の一異の點を述べず、佛以一音演說法、衆生隨類得解、得益不同なれば不定教といふとのみにて、少しも祕密教との區別なきか如きは如何といふに、これは前の祕密の所と對照して見ざれば、^ワカラユ^ハところなり、祕密教の方には、彼此互不相知、能令得益、故言祕密教とありて、祕密教の方にて既に聽衆の互に相知らずして、同聽異聞するが祕密教なりと説明せし故、次に不定教は、互に相知りて、同聽異聞するものなりと特更に言はざるも、同じく同聽異聞中の區別なれば、知らるべき理なるを以て、之を省きて文をなせるものなり。

(参考二) 祕密教、不定教には部帙なし、然るに南三北七の古師中には、偏方不定教といふを立つるものあり、依へば『金光明』、『勝鬘』、『楞伽』等の如き經は、五時の次第を超えて、其の以外にあるものにて、『金光明』が『涅槃』以前に、佛身常住を

説ける如き、これは或る一部類のものゝために、故ありて特に説かれたるものなれば、故に此等の經には經の初めに聽聞衆の名を列ねず、偏方不定の教といふなり、^カタ^スミ^ノの方にて、特に説かれたる定格以外の教といふことなり、此の時には不定教にも部帙のあるわけとなる、但しこれは天台宗にては取らぬことなり。

(参考三) 又毒發不定といふことあり、例へば乳の中に毒を入れて、後に之を飲めば、毒發して其の人死すべし、或は之を煮て酪として飲むも、亦毒發して死すべし、生酥となるも、熟酥となるも同じことなり。今過去大通智勝佛の下にて聞きし圓教、即ち圓聞の毒が、釋迦佛說法の乳華嚴中にて發すれば、乳中殺人といひ、酪(鹿苑)に發すれば、酪中殺人といふ、生酥、熟酥、醍醐、殺人皆同じ、圓教の毒が乳中乃至醍醐中の無明(人)を殺して、大果を得るに喩ふるなり。故に此の圓聞の毒が、或は鹿苑にて開けて、大果を證することもあり、通教にて開くこともあれども、所謂不定教とは別のものなり。何となれば毒發不定は、先世圓聞の宿習開發するより來るものにて、佛の不思議力により同聽異聞する不定にはあ

らざればなり。不定教の方は、宿習が佛の不思議力に催はされて、同聽異聞して種々の益を受くるなり。(此の宿習といふが、毒發の方の圓聞の宿習と同じからざることは、前に述ぶるが如し)又被接といふことあり、これも例へば別教の説を聞いて、圓教の理を悟るものなれば、同聽異聞の不定教の如くなれ共、然らず、唯自己の智力にて別教の理の底に、圓教の理あることを觀破して悟るものなれば、利根の人の觀智の力によるものなり、佛の不思議力にて同聽異聞するにはあらず。次に法華の開會にも、種々の機根のものが、等しく圓教に入るとすれば、種々の機根のものが、一圓教を種々に聞き分けて、圓教に融入する如くなれば、同聽異聞と紛るゝが如くなるも、これは専ら佛の化導の力にて、種々の機根を誘導調熟して、等しく一實界に入らしむるもの故、毫も同聽異聞の義はなきなり。以上の毒發と被接と開會との三は、至て不定と似たるもの故、古來台宗の學者皆之を辨せり。

然祕密不定二教。教下義理。只是藏通別圓。化儀四教齊。

然るに祕密不定の二教は、教の下の義理、只是れ藏通別圓なり。化儀の四教これに齊れり。

此。

教下義理とは、祕密不定二教の下にて説くところの義理なり。○只是藏通別圓とは、『集註』に、故此二教以藏等四教爲當體、眞中二理爲所依體とあり。祕密教不定教も等しく四教を以て此の二教の體とし、四教の説法形式に二教を分ちしもの故、四教の外に二教あるにあらざれば、四教を以て當體の體とすといふなり。換言すれば、佛言が祕密不定二教と分れたる上にて、何事をいふかとなれば、四教を説くの外はなしといふなり。然らば四教とは如何なることを説くぞといふに、小乗の如く偏眞の空理を説くもあり、又大乗は中空の理を示す故に畢竟眞中の二を出でず。されば、四教既に眞中の理を説くの外なしとすれば、祕密不定の二教も、亦四教を體とするもの故、四教に説くところの眞中の二を所依の理とするものなると勿論なり。之を要するに、二教は四教と同一のものなれば、唯佛の不思議力にて同聽異聞せしむる丈のことに、毫も四教と別物にあらずとなり。蓋し祕密教は顯露教の裏にて、不定教は定教の裏なり、而して顯露定教とは即ち四教なり、故に其の裏面の祕密教と、不定教と自ら四教の外なき理あることを知るべ

し、之れを「集註」に妙樂の語を引きて、顯與密、定與不定、相對論故といふなり。○
 化儀四教齊之とは、以上化儀の四教を述べて之れを結び、下の「次說法華」といへる
 文を起すなり。「集註」には、此以法華相待之意、判前四時不出頓等八教意、顯法華
 超八教外、出四時表とあり。蓋し頓漸祕密不定の化儀の四教は、何事を説きしや
 といへば、藏通別圓の化法の四教を説きし者なり、故に化儀の四教を擧ぐれば、化
 儀化法の八教皆之にコ、モルなり。扱此の八教なる者は、衆生の根機が未だ調は
 る故、機に應じて種々の方法によりて、種々に説き示したるものなれども、根機調
 熟して一圓教に歸すれば、固より四教八教の區別はなし、斯の如く四教八教の區
 別を泯亡せしところは、即ち超八の圓教といふなり。但し超八といはゞ、法華は
 八教の外にありて、九教となるにやといふに然らず、氷融くれば水となる、しかも
 水は氷の外なるものにあらずるが如しといふ、これ即ち開顯圓なり。一頁今
 「化儀の四教とは、先づこんなものなり」と結びしは、後の超八の法華は、コ、ナ區別
 差別のあるものではないと顯す所以のものなり。四教即ち八教といふも同じ
 と法華とを斯くの如く區別して見せるが、即ち法華相對の意なりと知るべきな
 り。

（通解）祕密不定の二教の體とするところは、佛の言教なり、其の言教の體とするところ
 ころは、藏通別圓の四教なり、故に四教を二教の當體の體とし、其の説くところは、
 四教に等しく、真中の理の外に出でざるもの也。
 以上化儀の四教終る。

次說法華。開前頓漸會入非
 頓非漸。故言開權顯實。又言
 廢權立實。又言會三歸一。言
 權實者。名通今昔義不同。謂
 法華已前權實不同。大小相
 隔。如華嚴時一權一實。別權各
 不相即。大不納小。故小雖在
 座如聾若啞。是故所說法門
 雖廣大圓滿。攝機不盡不暢。

次ぎに法華を説かんに、前の頓漸を開して非
 頓非漸に會入す、故に開權顯實といひ、又廢權
 立實といひ、又會三歸一といふ。權實といふ
 は、名は今昔に通ずれども、義は同じからず、謂
 はく、法華已前は權實同じからず、大小相隔れ
 り。華嚴の時の如き、一權一實別權は實各相即
 せず、大は小を納れざるが故に、小は座にあり
 と雖、聾の如く啞のごとし。是の故に所説の
 法門は廣大圓滿なりと雖、機を攝すること盡

如來出世本懷。所以者何。初頓部有一麤教別一妙教圓一妙則與法華無二無別。若是一麤須待法華開會廢了方始稱妙。次鹿苑但麤無妙教藏。次方等三麤別藏通一妙教圓。次般若二麤別通一妙教圓。來至法華會上。總開會廢前四味麤。令成一乘妙。諸味圓教更不須開。本自圓融不待開也。但是部內兼但對帶。故不及法華純一無雜。獨得妙名。良有以也。故文云。十方佛土中。唯一乘法。無二亦無三。一教正直

さゞれば、如來出世の本懷を暢べず。所以は何ん。初めの頓部は一麤教別一妙教圓あり、一妙は則ち法華と二なく別なし。若し是れ一麤は、須らく法華の開會廢了するを待ちて、方に始めて妙と稱すべし。次ぎに鹿苑はたゞ麤にして妙なし。教藏次ぎに方等は三麤通藏と別一妙教圓なり。次ぎに般若は二麤別通と一妙教圓なり。法華會上に來至して、總じて前四味の麤を開會し廢して一乘の妙と成さしむ。諸味の圓教は更に開すべからず、本より自ら圓融なれば開を待ざるなり。但是れ部内は兼但對帶す、故に法華の純一無雜に及ばず、獨り妙の名を得ること良よに以もつあるなり。故に文に云く十方佛土中、唯一乘の法のみありて

欠

欠

川の差別はなきなり、海は法華の如く、川は前四教に似たり。但し此の開を論ずるにつき、相待妙の上よりすると、絶待妙の上よりすると、の別あり、之を絶對論開、相待論判といふ。相待論判の上よりすると、麤と妙とを分ちて、前四教を麤とし、法華を妙とすることにて、妙と麤とを相對せしめて、法華は此の四教八教の隔歴を絶し、以て一佛乘に歸入したるところなり」といはゞ、裏面にては法華以前は未だ隔歴を脱せずと暗示する故、これ相待判なり。絶對論開とは、麤妙を對せしめず、衆生の根性融じ來れば、今昔等しく妙なりと、前四教を一法華に融じ來るところ、これ即ち絶對論開なり。故に『集註』には、妙名一唱待絶俱時、故相待論判出前三教四時之上、絶對論開復能開前令皆圓妙」といへり。然るに今の文には、開前頓漸云々といひて、絶對開をのみいひ、相待判をいはざるは如何といふに、これ此の前後の文に、既に相對判のことを示しある故、それに譲りしなり、即ち前には、化儀四教齊此、次説法華」といへるは、法華は前四時以上に出づることを示すものにて、相待判といふべし、又下の文にも前四時と、法華とを比較對論せり、そは直ちに此の下にて知るべし、言權實者云々の下なり。○會三歸一とは、藏通別の三教を

開會して圓教に歸入することなり。之につきて約部の開顯、約教の開顯といふことを知るべし。即ち絶待論開にて、衆生根機の醇熟するに至り、其のへダテの迷見をハ、ヲ、ハ、ク、ハ、ハ、一法華に歸入すべきことを、頓漸の上にて、悉くこれ非頓非漸なりと開するは約部の開顯なり。又藏通別圓四教の上にて、會三歸一すれば、即ちこれ約教開顯なり。今の文にて、開前頓漸會入非頓非漸といふは、約部開顯にして、會三歸一といふは約教開顯なり。故に其の中間の開權顯實と、廢權立實とは、一方よりは約教にも屬して見るべく、一方よりは約部にも屬して見るべし。即ち約部の上より見れば、頓漸は權にして、非頓非漸は實なり、約教の上より見るときは、前三教は權にして、圓教は實なり、此の頓漸前三教の權情を開して、法華一佛乘を顯すが即ち開權顯實にして、既に圓教非頓非漸の一實顯はるれば、今までの權教は入らぬこととなる、之を廢權立實といふなり。但し今は約部開顯を主とし、開廢會の三の順序により、之を證せしまでなり。○名通今昔とは、法華にて昔教を權教といひ、今教を實教といふ。然し權實の判は、必ずしも法華に至りて言ふことにあらず、華嚴にては、一權一實を説き、方等には三權一實を説き、般

若にては二權一實を説くといふ様に、昔教にても亦權實の名を用ふるをいふなり。○義、意、不、同、とは、構實について、名と義と意との三に分ち、名は今昔に通ずれども、義と意とは同じからずと、權實について、昔教と今教との別を立てしなり。義とは義理、即ちワ、ケ、ガ、ヲ、にて、意は意赴と熟し、其の義の赴くところを指す、即ちコ、ハ、ロ、モ、チ、の向ふところなり。今教と昔教と、權實の取り扱ひが、如何に異なるかといふに、先づ義理よりいへば、昔教にては、偏教と圓教とを分ちて、(偏圓權實なり)偏を權とし、圓を實とす、(又自行化他權實とて自行を實とし、化他を權とす)これ所説の法の上に、權實の別を立つるなり。然るに法華にては、然らず、一實に誘導せんがために、權を説き、(爲實施權)之によりて遂に權情を破して一實を顯はす、(開權顯實)が、權實の名の出る所故、法の上に權實の別を立つるにあらず、佛の化意について權實を判するなり。畢竟法華にては、法に權實の差別はなく、前三教も等しく一圓實の法なれども、衆生の根性各別なるが爲めに、化導に權實の差別が立つなり。故に衆生の根性各別にて、實益に差別のあるを權といひ、根性融じて一佛乘に會入するを實といふと知るべし。又意赴の上よりいふときは、昔教にあ

りては權教は何時までも實教にして、實教は何時までも實教なれども、今教にありては、權實一體にして、權教も悉く一實に融通するなり。斯くの如く、其の赴くところを異にするは權にして、權實其の赴くところを等しくするはこれ實なり。此の事を『集註』には、在昔權實各趣、在今權皆趣實^{キツク}といへり、以て其の理を知るべし。○謂、法華已前、云々より以下は、義理不同のことを釋す、約部の上にて、通じて開すれば、前の如く頓漸は權、非頓非漸は實となれども、教に約していふときは、頓の中にも權あり實あり、漸の中にも權あり實あり、既に開頓漸云々にて、通じて開したれば、今よりは昔部の中に權實の別あるを明かにし、以て開した時の權實と、昔部中の權實との意義の不同を示すなり。○權實不同、大小相隔とは、爾前には偏圓權實、自他權實の如く、法の上に權實の別あることとなす故、權實固より等しからざるなり。大小相隔とは、大は菩薩、小は二乘なり、菩薩二乘相去る甚だ遠きの意なり。今法華已前の教にありては、權實の不同あり、菩薩二乘の區別ありといへども、法華に至りては、此等は悉く一佛乘に歸入することとなるなり。されば爾前の上にて就てのみいへば、權實不同といひて、頓漸各部、皆權實を別にするこ

とをいへる故、法華の權實同體に等しからざることは明なれども、重ねて大小相隔といふ所以のものは、爾前の中にて殊に小乘三藏二乘の小機、即ち藏通別圓四教の間、永不成佛の人として見られたるものが、獨り法華に至りて同じく一佛乘に開會するところの妙味を示さんとて、特に大小相隔と加へしものなり。即ち爾前にては法に權實の差別ありとするのみならず、之を聞くところの機も、大機小機は永く和融することなしとの意なり。○一權一實各不相即とは、前に述べらる如く、華嚴は界外の教とて、菩薩を相手の說法なるが、其の菩薩にも、利根のものあり、鈍根のものあれば、同じ華嚴の中にも、鈍根のものに對しては別教を説き、利根のものに對しては圓教を説けるなり。勿論圓實の部主、化儀の部意、何れより見るも、圓教を説くことを目的としたるものなれども、如何せん機根未だ熟せざるところありて、等しく圓教を受くるに堪へず、故に已むなく機の利鈍によりて、教に別圓二教を兼説することとなれり、^{四二頁}故に一權(別教)一實(圓教)相即せずといふなり、これは權實不同のことを述べしなり。○大不納小とは、大小相隔の意を述ぶるなり。前に已に述べたる如く、^{一〇頁}華嚴は部の上よりは純

然たる不共にて、全く小機を相手にせざるものなり。故に華嚴の座にある二乗の徒は、譬の如く啞の如くなりしなり。○廣大圓滿は、其の主とする目的、圓教なるが故に、讚して斯くいふ、所謂圓滿修多羅の名あり、所以なり。四一頁○不暢如來出世本懷とは、佛の此の世に出で給ひし、おもひを、いまだ通したとはいはれぬとなり。暢は通暢と熟字して、思ふ存分を通すことなり。此の出世の本懷は、實に『法華經』に至りて始めて通暢するなり、故に方便品には、諸佛世尊、唯以一大事因緣故出現於世と示されたる所以なり。六三頁を一大事とは、一切衆生等しく一佛乘に歸入することなり、衆生此の一大事を證する因あるが故に、佛の出世を感じ、佛は其の因、即ち佛乘を證する機を緣として出世し給ふなり。之を一大事因緣によりて出世し給ふとはいふなり。此の出世の本懷、即ち一切衆生等しく一佛乘に歸入するの一大事は、別機を隔て、小機を隔つる華嚴にては、未だ決して通暢せられざるなり。○一、麤一妙とは、一權一實といふと同じ、唯一權一實は教に權實の別ある邊よりいひ、一麤一妙は、權を貶し、實を褒する邊より呼びしのみ。○須待法華開會廢了方始稱妙とは、圓教の教體よりいへば、華嚴に説ける圓教も、

法華に説ける圓教も、圓教に二ある筈なく、固より同一圓教なり、所謂今圓昔圓圓體無殊なれども、衆生の根性隔歴ある故、華嚴にては、法に自ら隔歴を生じたり、されば、衆生の根性融通すれば、等しく一圓教なり、華嚴の一麤も此に至りて一妙圓教に融入すべし。○來、至、法、華、會、上とは、前の法華已前權實不同といへる句に對し、それが法華の會座の時になれば、權實の區別を泯亡すると説き起すなり。○會成一乘妙とは、前四教を開會して、四味の麤を廢捨し、悉くこれ一乘の妙なりと顯はすことなり。此の一段は、今圓昔圓圓體無殊の上より、前四味の中に説きたる圓教も、法華會上所説の圓教も、等しく一圓教なるが故に、圓教に別はなし、されば同一一乘の妙を出でずと示すものにて、所謂教に約して、圓教といふ上より見れば、圓體は同一なりと體につきていふものなりと知るべし、故に之を『集注』には、約教別與といふ。然し部に約して、頓漸の上より見れば、頓中圓教なきにあらず、漸中圓教なきにあらずといへども、皆權教を隔て、一も純粹の圓教にあらずれば、悉く斥けて、爾前の教には妙の名を與へず、之を約部通奪といふなり。この時は畢竟圓の體につきてにはあらず、用につきて、爾前と今經との區別を示すな

り。而して其の用の異なる所以は、衆生の機根に隔歴ありて、融合せざるによる。法華會上に至れば、此の機根融合して隔歴なきに至る故、前四教を振りかへりて見れば、等しく一圓教に歸するわけとなるなり。一三頁○諸味圓教、更不須開とは、前四味の中に存する圓教は、法華に説くところの圓教と、其の體同一なれば、法華に至りて之を開會せんとするも、固より開會を要せぬものなりといふなり。これ即ち教に約して別して與ふるところなり。頁を見よ○但是部内云々は約部通奪の文なり。兼但對帶は、兼は圓教に別教を兼説すること、但は全く圓教なき小乗の空理を説くを指す、對は大小二乗を對説して、小乗を破斥すること、帶は圓教に通別二教を帶して説くことにて、此の四教中、但の小乗を除けば、其の他の三には、共に圓教を説けり、但し法華の如く、純一無雜の圓教にはあらざるなり。○頁を見よ純一無雜とは、權教其のマ、が一實の妙教となりて、マジリなく、キレいなることをいふ、即ち一圓教の外に、藏通別の麤を見ざるの謂なり。(此に純一の二につきて、一とは一二と相待的にいふ一にあらずして、一二の相待を絶したるころに、一の名を命じたるものとするが、佛教の説なり、之を絶待の一といふ例へ

ば麤に對して妙といふは、相待の妙にて、麤妙を絶したるころを絶待妙とすると同じ理なり。) ○故文云云々は純一なる故、法華のみ獨り妙の名を得るといふにつきて、經の四一を引きて證となすなり。四一とは、教一行一人一理一なり、本文中の細註を見て知るべし。○十方佛土中、唯一乘法とは、十方諸佛の説法區々機に應じて悉く一樣ならざれども、其の結局釋迦佛と同じく、皆第五時の法華の妙を説かざるはなく、これは諸佛既に法華の妙を説きしこと、釋迦佛に同じといふ邊よりいふことなり、勿論十方佛中には、未だ法華まで説き及ばぬ佛もあるべき理なり、故に『集註』には、之を據、其同者言といへり、又前四時の未開顯の時の上よりいへば、衆生が受くるころの教は、區々なりとも、佛意よりいへば、皆悉く一佛乘なり、一の妙法華にてあるなり。『集註』には之を約佛意といへり。○無二亦無三とは、方便品の偈文のまゝなれども、『文句』には、之を釋して、約教則無通教、半滿相對之二、無三藏之三、乘無有餘乘、即無別教及圓入別也といへり、無二無三の外に無餘乘と加へたるなり、これは法華の偈文にあらず、長行の方に、無有餘乘若二若三といふより取りて加へしなり。こゝにて二といふは、通教の上に、半字(小乘

但空と滿字(大乘の圓教不佞空)との相對の二なり、三とは藏教の四諦(聲聞乘)十二因緣(緣覺乘)六度(菩薩乘)を指す、此等の區別なきを無二無三といふ、餘乘は即ち別教を指す也。(「文句」の釋に、圓入別とあるは、別教の人が被接して圓教に入ることなり、此の被接のことは、前の四七頁の圖を見て知るべし)以上は教に約したるものなれども、部の上よりいへば、無二とは般若所帶の二なしといふことにて、即ち通別二教無三とは、方等所對の三なしといふことなり、即ち藏通別の三教なきことなり無二無三にして、唯一佛乘なれば教一といふなり。(此の部の上よりいふところにては、般若と方等とのみをいひて、華嚴と鹿苑なきは如何といふに、方等の下の藏は鹿苑なれば、特別に鹿苑を擧げず、般若の下の別は華嚴と同じき故、これも亦特に擧げぬなり、即ち部と教とを相對すれば、方等般若二部の下に、藏通別圓の四教皆存するわけとなるなり) ○正直捨方便云々は、行一なり。正直はマツスグといふことにて、曲らぬ意なり、「集註」には「文句」の文を引いて、五乘是曲而非直、通別偏傍而非正とあり、五乘とは三乘に、人天乘を加へて五乘といふ、即ち藏教なり、これ等は皆衆生の機根の深淺に應じて、一實道に導くための方便として設けられたる教

なれば、皆正直にあらず、廻り道をタドリ、直ちに大道路を行きしにはあらず、故に曲といひ、又通別二教は、全く中道圓教を説かざるにはあらずと雖、前に述ぶるが如く、共に對帶の中道にて、純一の圓教にはあらず、即ち通教は因緣即空を説く中に、中道を含めて説く、之を含中といふ、別教は佛の理性を中道と名けて、其の他の九界を斥ける故、之を但中といふ、未だ共に權實一體、純圓獨妙の圓教にはあらず、一方に偏したるところある故、偏傍といふ。○正直一道とは、即ち法華一乘の妙教なり。前の曲と偏傍とに反する故、正直の一道といふ、之を行一とする所以は、其の一道といふ道の字に着目していふことなり。○但爲菩薩云々とは、人一人なり。爾前の教にありては、即ち當分の上よりいはず、受くること、この教種々にして、證るところも各別なれば、衆生の方にては、佛が三乘を教化し給ふものと思ふべし、然れども跨節の上より見れば、即ち佛意に約して考ふれば、悉くこれ同一に菩薩人なり、故に之を一といふ。當分跨節のこと○世間相常住とは、世は類別の義とて、部類の差別あることなり、間とは隔歴とて、其の區別が混亂せぬことなり、人間、天上、畜生、餓鬼、皆ツレハ、判然たる區別がありて、混亂せぬところより、此の

現象界のことを世間といふなり。此の世間の依(外物)正(動物)斯く隔歴せる有様を世間相とし、而して此の世間相は、情(迷見)を以て見れば、時々刻々變化生滅して止まるところなきものなり、然れども、此の變化生滅なるものは、其の理より之を見れば、常住の眞如の上に起る現象なれば、此の現象に即して、其のまゝといふが如きなり、直ちに常住の相なりと見るとを得べしとなり。但し常住なりとて、差別の生滅を捨つるにはあらず、此の生滅其のまゝが常住、常住其の儘が生滅と見るなり。故に『集註』には、常既即性非常無常言偏意圓斯之謂矣とあるは是なり。性は不改の義とて、其の物其の物の持ち前の性情なり、此の持ち前の性情を改めず、其のまゝにして、これ常住なりといふものなれば、言葉の上より見れば、常住とは生滅變化に反對する如くなれども、其の眞意は、決して然らず、これ言の偏にして、意の圓なるところなれば、誤るべからずといふなり。○時、人とは諦觀同時の人を指すものにて、直接に誰人のことなるかは今知るべからず、兎にも角にも、當時天台の教に對し、『法華』には三車、窮子、化城等の譬ありて、三乗の教と共に之を説きてあり、即ち三乗共の教なり、果して然らば不共二乗にて、唯高遠の大乗極致

の教を説き、二乗の徒は之を聞き聾の如く啞の如くなりしといふ『華嚴經』に比すれば、其の説の淺薄なるは知るべきなりと論じたる學者ありしかば、諦觀は今之を相手として、未得法華妙旨といひしなり、三車にては、大白牛車の外に、羊鹿牛の三を説き、窮子の譬も、窮子が除糞より次第に登りて家業を付せらるゝに至るものなれば、『法華』は三乗共説にて、相待的故、決して絶待の妙を明したるものにはあらずといふが、敵論の意なり。三車窮子の譬は五六頁以下を見よ 化城の譬は、大要を下に出す。

(通解) 扱て既に化儀の四教を説き終りたれば、之より四教に超絶せる法華の妙法を示さん(相待判)。それ法華とは、此の妙法を蓮華に喩へたるの名にて、蓮は華實同時なること、權實一體の如く、而かも花開花落、終に實を立するに至るまで、能く相符合す。抑も法華以前の教にありては、頓漸各其の部を異にすれども、通じて開會すれば、爾前にも全く圓教なきにあらざるも、部に約して爾前の圓教を悉く盡教に屬して論ず、故に通じてといふ、等しくこれ法華の非頓非漸に歸入せずといふことなし(絶待開)。何となれば、爾前に頓漸の差別あるは、法もとより然るに

あらず、唯衆生の機根差別して等しからざるが故、佛の教を説くる亦自ら其の間に深淺高下の差を生じたるものにして、若し衆生の機根にして融和し、一樣に歸着すれば、佛所説の法も、亦深淺高下の別あるにあらず、唯一妙教なり。故に開權顯實、或は廢權立實といひ、又會三歸一といふも、皆此旨を示すものに外ならず。されば法華に至りて、之を開會するといふも、實は衆生が情に於て執して今昔異なりとするの迷を開會するものにて、所會の法體は、今昔無殊なり、之を無殊にあらずと思ふは、衆生の情にて、隨ひて佛の説法を聞き、佛は三乘を化し給ふと信するなり。然れども佛の意中より見れば、敢て三乘を化するにあらず、其の所説の權教、直ちに菩薩人に對する實教にてあるなり、これ權實一體の妙なり。但しこれは通じて前四教を開會する邊よりいふことにて、若し教に約して見るときは、頓の中にも權教あり、實教あり、漸の中にも權教あり、實教ありて、爾前にも既に權實の名を用ふ。然れども法華に至りて用ふるところの權實の名と、爾前の教に用ふるところの權實の名と、其の名等しくして其義甚だ同じからず。思ふに爾前の諸教に、權實の別を立つるは、法の上に偏圓等の區別を設けて、圓教を實とし、

偏教を權とするものにて、權實は權教の證りを開き、實教の證りを開くとす。然るに法華は然らず、獨り圓教の法體の上について、實を立つることは勿論にて、これ大乘佛教一般の通性なれば、敢て法華の特色とするに足らず、例へば華嚴の事々無碍、平等差別相即圓融の理を説くが如き、法華と敢て高下するところなしといふべし。されば法華にて權實の別を立つるは、決して其の所説の教體の上につきて、權實の別を設くるにはあらず、法に深淺高下の別を生ずるは、衆生の機融合せざるにより、通別の二教圓教を説くといへども、兼對帶を免れざるは、畢竟之によるものなるに、法華に至りては、其の機根融合して、佛所説の法と、之を聞く衆生の機根と、何の隔てもなく、一致するに至りしところを實とし、權實相對望して、隔歴あるところを權とするもの故、權實の別を法の上に立てず、之を佛の化意の上に立つるといふなり。是の故に權も實も、衆生の隔歴の差別融合して一體となれば、權を説くも實に歸するの方便にて、所謂「權皆趣實」ものなれば、爾前の如く、權實各趣にて、權と實とが、其の歸着を異にする如きものと同日の談にあらず、これ法華の特色にして、爾前と權實の名を等うし、大に其の義意を異にする所以

なり。蓋し法華以前にありては、權實の別ありて相隔て、大小同じからず、二乗の如きは永不成佛として見らるゝにも關らず、法華に至りては、二乗も亦等しく一佛乘に歸入するを許すは、豈に稀有の妙法にあらずや、今爾前の如く諸時諸教の上に、權實麤妙の關係するところを示せば左の如くならん。(麤妙といひ、權實と)



之によりて見れば、華嚴頓部には、一權一實(即ち一麤一妙)ありて、其の一實の方よりいへば、圓教は等しく法華同様の圓教なれども、機未だ熟せざるが故、なほ別教の麤を兼説し、加之、大小相隔て、小乗の徒は其の座にあるも、全く聾啞の如く毫も其の益を受けず、されば所説の法門は、廣大圓滿なれども、佛出世の本懷は、五乘等しく一佛乘に歸せしむるにあるが故、斯くの如く單に大機を益して、小機を隔つるものは、未だ如來出世の本懷を達したるものといふべからず、これ頓大の名

を得て、なほ未だ一乘獨妙の稱を受けざる所以にして、唯法華の開會を俟ちて、其の一麤亦始めて一妙に歸する所以なり。鹿苑に妙なく、方等の三麤一妙、般若の二麤一妙は、説明を俟たずして知るべし。斯くの如く爾前には皆權實大小相隔て、未だ一乗の妙に達せず、然るに法華に至りて、前の四味の麤を開會して、此の四味に離れて、別に一乗の妙教あるにあらず、前四味直ちにこれ一乗の妙なりと許す。勿論今圓昔圓體無殊なれば、教に約すれば、今昔別なきが故、今に至り昔を開會すべきにあらず、昔圓にありても、圓は圓なれば、當然開會を俟たざるものなりと雖(約教別與)部に約して見るときは、爾前の圓は皆權と並立す、所謂兼但對帶の外に出でず、これ法華の權實一體にして、實の外に權なく、權實の偏名を超絶したる、純一無雜の教に如かざる所以、法華の獨り妙の名を得る所以なり。『法華經』方便品により、四一の證を出さんに、十方佛土中唯一乗の教のみありて、二もなく三もなしといふは、教一なり、爾前の方便を捨て、法華の正直道を説くといふは、行一なり、佛より見れば、等しく同一菩薩人なりと説くは、これ人一なり、一切差別生滅の諸法は、地獄の底より天上の頂に至るまで、迷妄の衆生より大覺の佛に

至るまで其當體直ちにこれ常住なりといふは理一なり、教行人理、其の方面を異にすれども、歸するところは皆純圓獨妙の純一無雜を明すものにあらずといふことなし。然るに人之を知らずして「法華」には三車、窮子、化城の喩ありて、大小共説する故、未だ不共二乗の華嚴に及ばずといふものあるに至る、誤れりといふべし。其の三車、窮子、化城等に、三乗共説するものは、前四時の權説を擧げ、之に比較して法華の位置を明にせんとしたるものにて、三車にありては、大白牛車を顯はさんがため、窮子にありては家業を付せんがため、化城にありては寶所に至らしめんがためなり、即ち比較の必要より説きしものにて、權教を説くが法華の當意にてはあらぬなり。若し夫れ、約部則尙破華嚴般若、約教則尙破別教、後心、何ぞ三乗共説せんや、彼の徒此の理を知らず、徒に此の誹謗を致す所以なり。

約時則日輪當午、罄無側影。

時に約すれば、則ち日輪午に當り、罄く側影なし。

第五 約味則從熟酥出醍醐。

第五 味に約すれば、則ち熟酥より醍醐を出す。これは摩訶般若より法華を出すなり。

此從摩訶般若出法華。

醍醐味

醍醐味

無側影とは、印度にていふことなり。赤道の直下にては、太陽が天の中心より照す故、正午になれば萬物に影がなきなり。(これは熱帯の無影地にてのことにて、夏至線冬至線の間は、一年に一度は無影となる、但し日本や支那は、決して無影となることはなきなり。) ○從熟酥出醍醐とは、「涅槃經」の五味の譬のところにては、涅槃を以て醍醐とし、法華を醍醐とすることはなきなり、後の涅槃の所を見よ。然るに天台にて、法華を醍醐とするは如何といふに、これは法華涅槃同味の教とするより、同じく之を醍醐とし、義によりて摩訶般若より法華を出すといひしなり。(加之、實は法華の方、涅槃より勝れり、何となれば、法華涅槃共に一切皆成佛をいふことは一なれ共、法華は前に先づ悉く成佛せしめ、涅槃は其の機熟せずして残りしものを成佛せしむるといふ理窟に當れば、法華は敵の大軍を破り、涅槃は其の殘黨を破りしといふが如きものなり、しかも其の殘黨を破りしは、已に大軍を破りしによるもの故、涅槃の効も、法華の力によるものとなるなり、故に法華を大收とし、涅槃を招拾とす、大收は秋の收穫をいひ、招拾はアトの落穂を拾ふに當るといふ意なり。)

(通解)を要せず。

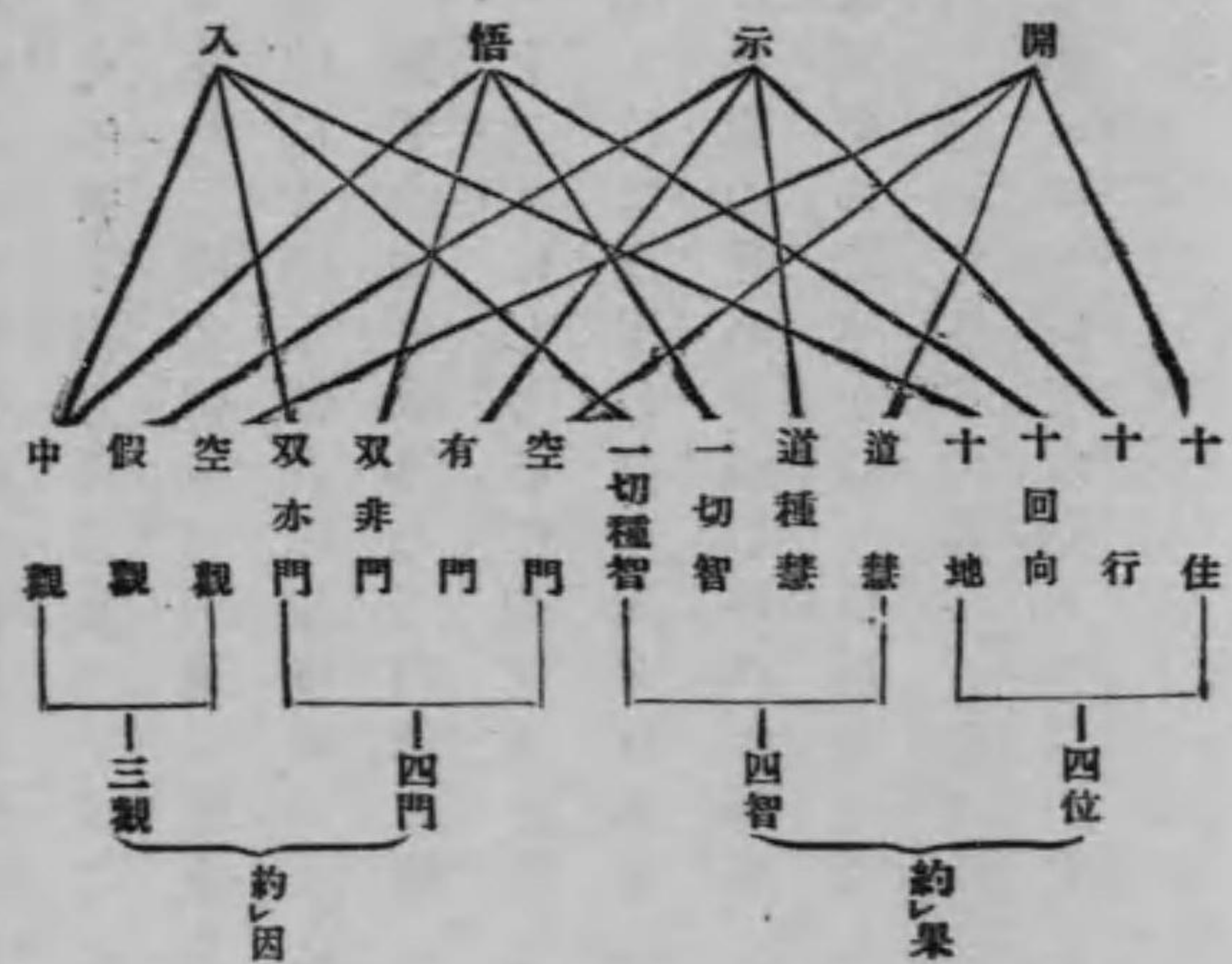
信解品云。聚會親族。即自宣言。此實我子。我實其父。吾今所有。皆是子有。付與家業。窮子歡喜得未曾有。此領何義。答。即般若之後。次說法華。先已領知庫藏諸物。臨命終時。直付家業而已。譬前轉教皆知法門。說法華時。開示悟入佛之知見。授記作佛而已。

聚會親族とは、長者が親族を枕邊に呼んで、遺言するときのことをいふ。五八頁法華の會座に集まれる、法身の居士を、此にては親族に喩へしなり、何となれば此等の居士は、過去世に於て、皆二萬億佛の燈明佛の下にて修行せし兄弟にて、舍利弗

信解品に云く、親族を聚會し、即ち自ら宣言すらく、此れは實に我が子、我は實に其の父なり、今の吾が所有は皆是れ子の有なりと、家業を付與す、窮子歡喜して未曾有なるを得たり。此れは何の義をか領する。答ふ。即ち般若の後に次ぎに法華を説く。先きに已に庫藏の諸物を領知すれば、命終の時に臨みて、直ちに家業を付するのみ。前に轉教して皆法門を知れば、法華を説くときは、佛の知見に開示し、悟入して、授記作佛するのみなるを譬ふ。

等は、釋迦佛の子とすれば、互に親族の關係あることゝなる故なり。(此の燈明佛のことは『法華經』の序品に出で、又釋迦佛が、此等の法身の居士と共に、燈明佛の下にて、舍利弗を教化せしことは、譬喻品に出でたり、故に父とす。) ○付家業とは、『集註』には、吾今所有皆是子有、正附家業といひて、正の一字を加へたり。前の般若の時も、家業を付屬はしたれども、子の方にては、未だ單に依頼せられたるものと思ひ、舍利弗等は、佛に代りて轉教することゝのみ思ひ、眞に自己のものたることを悟らざりしに、今こそは正しく家業を付屬して、自己のものたるを知らしめしなり、即ち佛所有の因位の萬行果時の萬德、皆一とまるめにして、汝のものなりと示せしなり。 ○已領知庫藏とは、已に子に家政上のこと、一切を依頼したるほど故、子は此の時、總べて庫藏内のこと、財產寶物まで、悉く知りぬき居る筈なり。即ち般者時にて、付屬轉教せしめし時、智慧禪定の法門は、皆能く之を知りぬきしなり、唯當時は、此等の法門、實は皆我が物なりと知らざりしなり、故に今は、この無量の財產寶物(一切の法門)は、一として汝自身のものにあらざるなしと、家業を付し終れば足るなり、こゝを直付家業而已といひしなり。 ○佛知見とは、中道を照

らすの智をいふ、亦一切種智といふ。凡そ智には、道種智、一切種智、一切種智の三の區別あり、道種智は假を照らす智、一切種智は空を照らす智、一切種智は空有の一方に偏らず、空にあらず、有にあらず(双非門)しかも空なり有なり(双亦門)と觀する智之を一切種智といひ、即ち之を佛智見とするなり。◎開、示、悟、入とは、一言にいへば、前の中道の理をサトルことなれども、細かにいへば、開はカクレたるものを開くことにて、無明煩惱の取れたるがため、佛知見の開けたるところなり、これは空に當る。空は迷見のトレ、平平等無差別の理體の現はれたるところ故、之を空とす、此の空の中に、本來萬徳を具へて整然たるが故、衆生に對して利益無盡のところが示なり、示は顯示にて、無差別の空の上に、差別の萬徳を顯はし示す、これ即ち假に當る。故に法の本然は空に偏すべからず、假に偏すべからず、非有非空が本然の理なりと悟るが悟なり。既に非有非空と悟るが故に、有に對し、空に對して疑りなく、共に之を照らすが入なり、入とは如來の智惠海に流入するといふことなり。此の開示悟入の四字を、『集註』には、四位、四智、四門、三觀に配して説き、『半字談』には、其の圖出でたれば此に掲げて示すべし。



右の内にて、四智は前に述べし三智を開きしまでのことにて、空を照すが道慧、假を照すが道種慧、中道を照すが一切智、一切種智なれども、其の中道を照すが非

有非空(双非)と見るが一切智亦有亦空(双亦)と見るが一切種智なり、此の四智を得る菩薩の順序が、前の四位なり、故に四位と四智は果に約していふなり。四門三觀の方は、未だ菩薩の位に至らぬものも、觀することを得る、理窟理論に屬し、實際上其の智を得たる上よりいふことにあらねば、因に約すといふなり。之によりて見れば、開示悟入は、因果に通ずる言葉にて、唯サトリしことにはあらず、悟らぬ因位にも開示悟入の意味あることを知るべし。○授記とは、授は佛が、汝は今より幾年の後に成佛して何佛と號し、何世界に現はれんと證明し給ふことにて、ソレをアテにして心に期するを記と云ふ。此のことは法華の譬喩品と、法師功德品とに二度出したり、又五百弟子品には、千二百人の弟子に記を授け給へり、授記に通別の差あり、煩しければ略す。

(通解)此の法華を以て、信解品の文にあつれば、長者の臨終に、其の親戚等を枕邊に招ぎ、始めて父子の名のりあひをなし、我が家業は、今日唯今此の子に傳ふべしといへるとき、窮子は始めて眞の父子たることを知り、長者の財産、皆我が所有なりと知りて、大に喜びたりといふの一段に相當すべし。何となれば、其の親戚とい

ふは、所謂釋迦佛と共に、燈明佛の許にて、舍利弗を教化したる佛の兄弟分たる法華會上に聚まれる法身の居士にして、之を證人とし、佛所有の因位の萬行果時の萬徳は、我獨り有するにあらず、此等の珍寶、皆汝自身の中にあり、即ち汝の所有するところなりといひ、般若の時に於て、付財轉教せしめしものを、直ちに窮子に付與したるに相當すればなり。蓋し佛所有の法門(財産)の詳細は、前の轉教の時に於て、已に明知せし筈なれば、法華に至りては、再び此の法門の説明をなさず、單にこれ即ち汝の所有なりと、家業を付し、以て佛知見の中道に入らしめ、一切種智を完うせしめ、授記作佛せしめ給ふのみなり。(二乗には、先づ應身の記を授け、譬喩品)後に法身の記を授け給ふ(法師功德品)之を通別の二とす、但し菩薩は淺近の、八相成道の應身の記を要せず。

次説大涅槃者有二義、一爲未熟者更説四教、具談佛性、令具眞常入大涅槃、故名拈拾教、二爲末代鈍根、於佛法

次ぎに大涅槃を説かば二義あり、一には未熟の者の爲めに更に四教を説き、具さに佛性を談じ、眞常を具して大涅槃に入らしむ、故に拈拾教と名づく。二には末代の鈍根の佛法の

中起斷滅見。天傷慧命。亡失法身。設三種權。扶一圓實。故名扶律談常教。然若論時味。與法華同。論其部內。純雜小異。故文云。從摩訶般若。出大涅槃。前法華合此經。爲第五時也。

中に於て斷滅の見を起し、慧命を天傷し、法身を亡失するが爲めに、三種の權を設けて一圓實を扶く、故に扶律談常の教と名づく。然るに若し時味を論ずれば法華と同じ、其の部内を論ずれば純雜小しく異なり。故に文に云く、摩訶般若より大涅槃を出すと。前の法華に此の經を合せて第五時となすなり。

説大涅槃とは、之に淨土と穢土の區別あり、淨土は好世の淨土といひて、世界の太初、人壽八萬歳の時より、二萬歳に至るまでの間は、果報勝れて壽命も長く、煩惱も薄く、まことに宜しき世なれば、此の間を好世の淨土といひ、之より後、果報漸く衰へて、世も悪しくなり行きし故、之を穢土とす。而して其の淨土の時に出現せし佛と、穢土に出現せる佛と、佛性常住の大涅槃を説くに區別あり、何となれば此の兩佛、佛性常住の理を説くことは一なれども、穢土のときの衆生は、佛の滅度を見て、世界は一切無常なれば、佛も終に滅し給ふと斷滅の妄見に陥る故、佛此の妄見

を退治せんために説き給ふが、穢土末代の「涅槃經」なり。然るに好世の淨土に大涅槃の理を説くは、法華に洩れし殘機のため、にのみ説かるゝものにて、之によりて佛性常住の一實に導くものなり。故に其の説き方も大に異なりて、淨土の時は、常住の涅槃を法華の中に説き、法華を説き終ると共に、其の夜の中に入滅を取るも、穢土の佛は法華説法の後、別に常住涅槃の理を説く、これ「法華經」の外に「涅槃經」ある所以なり。其の淨土穢土共通の理は、之を佛性常住涅槃とし、穢土に限りてある斷滅の惡見退治の涅槃を、退治無常涅槃といふなり。故に淨土にては、法華を以て後教後味とし、穢土にては涅槃を以て後教後味とするなり。尤も「涅槃經」には、五味悉く之を説けるが故、機に應じて五味各其の益を得せしむる邊よりいへば、之を通の五味といひ、五味を以て機を調へて、一實の佛性常住に歸せしむる邊よりいへば、之を眞の後教後味といふなり。○爲未熟者とは、「涅槃經」を法華已後に説く理由を述ぶるなり、之に二あることは前に言へるが如し。即ち一は法華の殘機を、一實に入らしむるために、佛性常住涅槃を説く、二は末代鈍根のため、に退治無常涅槃を説く。此の退治無常涅槃は、末世の衆生の惡見により、如

來常住の命を失ふものあるを贖ふために説くことより、末代贖命の涅槃ともいふなり。凡そ先づ此の涅槃聽聞の機類には、三種の區別あることを知るべし、これは源信僧都の『五味儀』といへる書に出でたることなり、左の如し。

一、方等般若を経て涅槃に來るもの——涅槃にて入實するのみ

二、方等般若を経ず直ちに涅槃に來るもの——涅槃にて之がため四教を説く

三、末代鈍根のもの——末代贖命涅槃を要するもの

今此にいふ未熟者とは、第二の機にて、法華に洩れしもの、中方等般若の調熟を経ざるものなり。故に之がために、特に四教を説き、之を調熟して後入實せしむるなり。例へば法華の方便品に、五千人増上慢の聲聞、佛の小乘を斥けて大乘を揚ぐるを聞き、大に之を怪しみ、其の説法を聞くに足らずとして立ち去れりといふが如き類のものは、法華に洩れたる殘機なり。○更説四教とは、此の四教に追説追泯の別あり、己に法華に於て、四教の別を去り、融通して一中道に歸す、然るに涅槃に、再び四教を説く故、更に追説すといふ、此追説は『涅槃經』聖行品なり。『集註』には、涅槃聖行品、追分別衆經、故具説四種四諦とあり、此の中衆經といふは、華嚴

より以下五味の諸經にて、部の方なり、四種の四諦は、藏通別圓の教の方なり、此の四教にて、各四諦の理を説くに意同じからず、故に四種の四諦といふ。畢竟五味と四教との部教を『涅槃經』に追説せしといふことなり、然るに同じく徳王品に至りて、前四時の部と四教とを開權して、一味一實に歸してあり、これ即ち追泯なり、故に『涅槃經』をば追説追泯の經といふなり、泯は會なりといひて、會合し融和することなり。○佛性とは、已に悟りを開きし佛のみならず、一切衆生皆佛となるべき本性本理を具有するをいふ、此の理體を眞如とも、眞常ともいふ。即ち凡夫にありて、惑業苦といふものは、一轉すれば、法身般若解脱の三徳にて同一物なり、唯其の用の別なるのみにて、體に異なるにあらず、これ即ち常住の佛性なりとす。而して此の法身般若解脱とまた此の理なり、之を祕密藏とす、『集註』に、令一切衆生皆知常住佛性、入祕密藏といふものは是なり。○拈捨教とは、前に述べし如く、落ち穂を拾ふといふことにて、法華を大收とし、涅槃は法華の殘機を拾ふより、拈捨教といふなり。○末代鈍根とは、前に述ぶる如く、惠信僧都の三種の機の中の第三

の機なり。然るに此の第三の機を細かに分てば、又二類あり、一は如來常住の理に味きものにて、一は法の圓實を知らぬものなり、今の本文に「於佛法中起斷滅見」とあるは、此の第一の常住の理に味きものにて、如來の入滅を見て、世態は無常變化極りなきものなり、佛も終に此の理によりて涅槃に入り、滅無に歸し給へり、之によりて見れば、持戒清淨にして修行艱難するも、將た何の効かあらんといひて、戒を破り、行を廢するに至るものあらば、これ第一の斷滅の見に陥れるものなり。次に本文に「天傷惠命亡失法身」とある者は、一實の理に迷ふものにして、煩惱即菩提、生死即涅槃、一切萬有皆中道の現はれにして、實相の上には善惡の差別なしと、所謂惡平等に墮するがために、またこれ戒を持たず、行を廢す、此くの如きの類を一圓實の理に迷ふものといふなり、之を名けて惠命を天傷し、法身を亡失するものといふなり。(尤も此の惠命法身のこととは、通途は性理相對して、理の法體よりいへば、惠命法身は常住にして亡失するものにも、天傷するものにもあらねども、迷の情の方より見れば、凡夫は凡夫にして、佛とは思はれず、三界に流轉して居る故、衆生の方よりいへば、惠命法身を失ひ居るといふなり、然るに今は、情智相對に

て、乘戒二門を具し、三學を修して、智見の開けし人が、法身惠命を現するものにて、之に反するものが、法身惠命を亡失すと見るなり、故に今は情智相對にて言ふと知るべし、即ち一圓實の理を知らずして、前三教の方便を無みし、乘戒二圓をアダにするもの、之を惠命法身を亡失するものといふなり。) ○設三種權扶一圓實とは、三種の權は前三教藏通別に教へし戒定惠を指す、前に説く四教は機を調へて一實に導くためなり、圓實に至りて説く四教は、前三教の方便(即ち戒定惠)によりて、一圓實を扶助するためなり、故に前三教の方便を決して無みすべからざるなり。○故名扶律談常教とは、「涅槃經」は、戒定惠の中にも、特に戒律を重んずるものなり、何となれば世の末代に下るに及び、煩惱益盛にして、破戒無慚の徒増加し、終に惠命法身を亡失するの根源となるべきを以てなり。されば律を重んじ、而かも小乘淺近の理に陥らず、佛性常住の圓實の理を談するが故、扶律談常の教といふ。勿論斯くの如き次第故、「涅槃經」は決して律のみを説きしものにはあらず、之に單複の兩義ありて、複義よりいへば、「涅槃經」は戒乘兩門を説きしものなり、(乘門とは定と惠となり、單義によれば、全經を律説と見るともあるなり。何

となれば、圓實常住の理は、法華已に之を説く、涅槃は、戒律によりて、法華の圓常の理を守らんとするものなりと見ることを得ればなり。されど今此にいふところは、複義にて、律乘二門を説けることをいふなり。○論、其部内、純雜、小異とは、法華と涅槃と斯く同じといへども、其の内容を論ずれば、法華は純圓なれども、涅槃は四教を説く、故に追泯の所に至りて法華と同じといへども、追説の處、法華に同じからず、故に小異といふ。○從、摩訶般若、出、大涅槃、とは、『涅槃經』の聖行品の語なり。實際は般若より法華を出し、其の次に涅槃となれども、今は法華の後の四教(即ち涅槃中に説ける)によりていふ故、般若の次は圓教の涅槃となる、故に斯くいふ。

(通解)次に大涅槃を説くべし、大涅槃に二義あり、一は佛性常住涅槃にして、一は退治無常涅槃又末代贖命涅槃なり。佛性常住涅槃は、淨土穢土に通ずれども、退治無常涅槃は末代穢土に限る。故に淨土にては法華を後教後味とし、涅槃を法華中に合説する故、穢土にては涅槃を後教後味とす。凡そ佛性常住涅槃は、法華會上の説法に洩れたるものに對し、更に佛性常住の理を説きて、之を一圓實に誘導

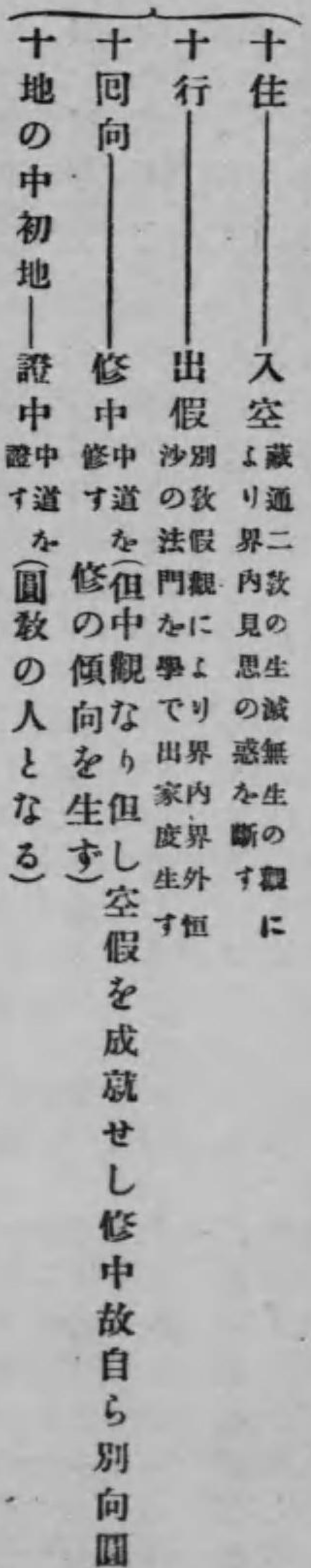
するものにして、これ其の措捨教の名ある所以なり。然るに其の法華會上に洩れたるものには、已に方等般若に於て、機の調熟せられたるものあり、斯くの如きものは、固より涅槃に至りて入實するのみなるが故に、更に五時四教を説くを要せずといへども、方等般若の調熟を経ずして、涅槃に來る横來の機のためには、再び此に五味四教を説かざるべからざるに至る、之を追説といふ。既に五味四教を説きて、更に之を泯し、融和して一圓實に入らしむ、之を追泯といふ。以上は未熟者のために佛性常住涅槃を説く所以なり。然るにまた佛滅後の末代の鈍根に於て、或は斷滅の見に陥りて、破戒廢修の徒となり、或は圓實の理を誤りて、惡平等に陥り、同じく破戒廢修の徒となりて、惠命を傷害し、法身を亡失するに至るものあらん、佛此に於て前三教の方便を無みせず、戒乘二門を蔑にせず、以て一圓實を扶助し給ふことを教ふ、これ退治無常涅槃なり、就中末代撓季、破戒無慚の徒輩出するに及びては、持戒を以て最も重しとするが故、特に戒を重んじ、戒を重んずといへども、また徒らに小乘淺近の理に偏せず、持戒にして且つ圓常の深理を談ず、故に『涅槃經』の教は、また扶律談常教と名づくるなり。『涅槃經』に説けると

この意義の概要は以上の如し、故に其の説法の順序歸着、一に法華に同じといへども、全く等しとすべきところは、其の追混融同の處にありて、四教追説の邊に至りては、少しく兩者の間に異點の存するところなり、故に聖行品の文には、從摩訶般若出大涅槃といへり、これ法華後時の四教につきていへるなり。されば法華涅槃多少の相違なきにあらずといへども、等しく般若の後に、出で、其の大體の同じき點につき、之を同一味として第五時の醍醐味に攝むるなり。

問。此經具四教與前方等部具說四教爲同爲異。答。名同義異。方等中四圓則初後俱知常。別則初不知後方知。藏通則初後俱不知。涅槃中四。初後俱知。

初後俱知とは、初は初住以前なり、後とは初住以後なり。凡そ圓教にては、初住より無明を斷する故、初住以上を聖位とし、初住以下を凡夫とす、故に初は凡夫の位

にて後は聖位を指すなり、凡夫より已に佛性常住の理を知る故、初後俱知といふ。○則別初不知後方知とは、別教にては、



二地以上有教無人 四七頁 參照

以上を別教橫學の四教といひ、別教の人は十地に至りて始めて佛性常住を知る、故に初めは知らず、十廻向まで、後十地に至りて知るなり。○藏通初後俱不知とは、藏通二教は、見惑を斷せる以上を聖位とし、見斷以前を凡夫とす、しかも見道以上の聖位といへども、此の二教にては、單に空理を見て、未だ無明を斷じ、中道を見ざれば、圓理の佛性を見ること能はず、故に初後共に知らずといふなり。○涅槃中、四初後俱知とは、『涅槃經』に説けるところにては、四教共に皆圓理の佛性常住

を知るとなり。故に通教に帶説せる四教の如く、圓別と藏通と、佛性常住を知るもあり、知らぬもあり、或は初後共に知るもあり、初め知らず後に至りて知るもありといふが如く、種々の差別なきなり。然らば四教初めより皆知れりとならば、四教は何の區別もなく、皆圓教ならん、何ぞ四教の區別あるや。曰く、涅槃の四教にては、法華開顯の後なれば、初めより一切衆生悉有佛性、如來常住無有變易と説きたる故、皆佛性常住の理を知るといへども、解即行不即といふとありて、智解は一なり、即ち理窟はワカッタれども、觀行に至りては、四教の人皆各異なり、藏教の人は藏教の觀を用ひ乃至圓教の人は圓教の觀法を修するなり。尤も斯く解一にして行を異にする所以は、しばらく龜心を息めんがためにて、即ち暫時イキヤハメのためなり、此の暫時のイキヤハメの終りし上は、忽ち圓觀に還りて觀行一致するといふ。

〔通解〕今『涅槃經』に四教を説くといふ、これ恰も通教に四教を對説するが如し、其の異同如何といふに、四教の名相は同じと雖、其の義大に異なり、何となれば通教に用ふるところの四教は、四教の間に差別ありと雖、涅槃の四教は、四教各皆圓理

を知り、佛性常住を解す、通教の四教にありては、藏通は空理に偏して中道を知らず、見思を斷じて無明を斷せざるが故、凡聖共に未だ佛性常住を知らず、別教は初地に至りて中道を知るといへども、初住以上十廻向までは、佛性常住を知らず、然るに圓教は、已に凡夫位の名字即、如來の教によりて佛性常住を知る、觀行即、觀行の智恵にて佛性常住を知る、相似即、略ぼ法體にカナッテ知るといひ、ボンヤリと佛性常住を見る、等より、佛性常住を知り、初住以上に至れば、一分無明を斷じて、一分中道を證するが故、初後共に佛性常住を知るなり。通教の四教は、斯くの如く四教の間に中道を智解するに區別あるにも係らず、涅槃の四教にありては、法華開顯の後故、最初より佛性常住と打ち出して説くを以て、四教の人、皆其の當分にて佛性常住を知る、唯區別あるところは、イキヤハメとする觀行の上に、四教の區別あるに過ぎず、これ通教の四教と涅槃の四教の異なる所なり。

問、將五味對五時教、其意如何。答、有二。一者、但取相生次第。所謂牛譬於佛、五味譬教。

問ふ。五味を將て五時の教に對する、其の意如何。答ふ。二あり、一には但相生の次第を取。所謂牛は佛に譬へ、五味は教に譬ふ。

乳從牛出。酪從乳生。二酥醍醐次第不亂。故譬五時相生。一番下劣根性。所謂二乘根性。在華嚴座。不信不解不變。凡情。故譬其乳。次至鹿苑。聞三藏教。二乘根性。依教修行。轉凡成聖。故譬轉乳成酪。次至方等。聞彈斥聲聞。慕大恥。小得通教益。如轉酪成生酥。次至般若。奉勅轉教。心漸通泰。得別教益。如轉生酥成熟酥。次至法華。聞三周說法。得記作佛。如轉熟酥成醍醐。此約最鈍根具經五味。其次者。

或經一二三四。其上達根性。味味得入法界實相。何必須待法華開會。上來已錄五味五時化儀四教。大綱如此。

乳は牛より出て、酪は乳より生ず、二酥醍醐次第亂れず、故に五時相生の次第に譬ふ。二には其の濃淡を取る、此れ則ち一番下劣の根性を取る。所謂二乗の根性、華嚴の座にあれども信せず、解せず、凡情を變せず、故に其の乳に譬ふ。次ぎに鹿苑に至りて三藏教を聞く、二乗の根性、教に依て修行し、凡を轉じて聖となる、故に乳を轉じて酪と成すに譬ふ。次ぎに方等に至りて聲聞を彈斥するを聞き、大を慕ひ小を耻ぢ、通教の益を得、酪を轉じて生酥と成すが如し。次ぎに般若に至りて、勅を奉けて轉教し、心漸く通泰して別教の益を得、生酥を轉じて熟酥となすが如し。次ぎに法華に至りて、三周の說法を聞き、記を得て作佛す、熟

相生とは、乳を煮て酪とし、酪を生酥とするといふ如く、漸々次第して生ずることいふなり、此の事は『涅槃經』聖行品南本に出づ。

譬如從牛出乳、從乳出酪、從酪出生酥、從生酥出熟酥、從熟酥出醍醐、醍醐最上、佛亦如是、從佛出十二部經、從十二部經出修多羅、從修多羅出方等、從方等出般若波羅密、從般若波羅密出大涅槃、猶如醍醐。

斯くの如く、五味次第して相生すること、なほ五時の順序の如く、而して其の五時の教が機に對するに當りても、第一華嚴の時は、聽衆如聾如啞にて、薄きこと乳の如く、鹿苑に至りて、小機は始めて凡夫より轉じて聖者となること、乳の轉じて酪と

酥を轉じて醍醐となすが如し。此れは最鈍根の具さに五味を経るに約す。其の次ぎは或は一二三四を経、其の上達の根性は、味味に法界の實相に入ることを得、何ぞ必ずしも法華の開會を待つを須ひん。上來已に五味、五時、化儀の四教を録すること、大綱此くの如し。

なるが如く、漸次次第相生する故、之を相生といふなり。故に之を約教相生といひ、教の次第に相生じ、或は機の上にては、其の教が機に對し、機の轉じ行くところにて相生をいふなり、決して乳の漸々濃厚となり行く上にて、其の優劣の次第を見るにはあらず。若し優劣の次第と見れば、華嚴が鹿苑方等よりも劣等の教となるべし。故に今は單に相次第して生じ、相次第して變じ行く上の喻とのみ知るべし。濃淡とは、約機濃淡といひて、専ら機根の熟する上にて、濃淡をいふなり、教の上にて濃淡をいふにはあらず、教の上にては單に相生をいふに過ぎず、約教相生、約機濃淡といふは、天台一家の熟語なり。即ち機が華嚴の時は如響如啞なりしに、鹿苑に至りて凡を轉じて聖となす、これ機の漸く熟したるにて、華嚴の時よりは濃厚となりしなり、方等、般若、法華涅槃と次第して、皆此の濃淡の次第あり、されば濃淡は機の上にてのみいふことと知るべし。『集註』に、約教相生、約機濃淡を説き、其實、約機約教皆具二義、二義は相生と濃淡とを指すといひしは、一家になき名目を主張するものなり、學者迷ふなかれ。○慕大耻小得通教益とは、こは勿論、法華以前不論改觀にて、通教の益は密益に過ぎず、此等は總べて法華に至りて、始めて開會し

て一佛乘に歸するわけにて、決して法華以前に回心向大するものにはあらず。次の心漸通、泰得別教益といふも、同じく別教の密益なり、故に『集註』にも、密成通益、密成別益といへる『輔行』の文を引きて之を證せり。九三頁、一〇六頁等を見よ。但し此等は總べて見道見惑を断せ以後のものにつきていふことにて、見道以前の聲聞、即ち未入位の聲聞は、法華の開會を俟たずして、改觀入實することあるを許すなり。○三周說法とは、法説、譬説、因縁説の三周を指すなり。『法華』にて直ちに三乘一乘の法門、畢竟別なきことを説き、唯衆生の根性未だ融せざるがため、三一差別ありと雖、物を隔つる迷情一たび去れば、三一差別なく、所謂無二亦無三なりと説くは法説周なり、これは上根のもの、ために説く所なり。次に譬説周とは、三車一車の譬により、羊鹿牛の三車を以て之を誘ふといへども、長者の意は始めより大白牛車にありて三車なしと説き、三一不二を示すは、これ中根のために説くところなり。六五頁次に久遠の昔し、大通智勝佛といふ佛ありて、此の佛の下にて大乘の縁を結び、成佛の種をオロシ、それより今日まで、漸々熟し來りて、終に今日解脱の境に入るに至りし次第因縁を説くが因縁同なり。種熟脱のこと、三九頁を見よ。これは下根のた

めに説く。以上を三周説法といひ之によりて初住に入り、無明を断じ、中道を證するを三周證入といふ。此の時より八相成道のことあり、これにて自利利他の二面を成就するなり。三八頁、四四頁を見よ。之を『集註』には、皆授初住八相之記一といふ。即ち『法華』に、法説には、身子得悟二といひ、譬説には、四大弟子得悟三といひ、因縁説には、千二百聲聞得悟四といふもの是なり。○最鈍根とは、前に一番下劣根性といへるものと同一なり、即ち五味の順序を経て、最後に法華の開會を経て得悟するものを指す。○其次、或經一、二、三、四とは、五味の順序を次第正しく經過するもの、次の中根のものは、或は一より二(鹿苑)に至りて得悟するもあり、或は三(方等)に至り、或は四(般若)に至りて得悟するもあるなり。○上達根性とは、即ち上根のもの、之にて、此の上根のものは、華嚴を始めて聞きて、忽ち入實するもあるべく、鹿苑にて入實するもあるべく、通教別教何れを聞かぬも、一つにて入實し、二つを通過するを要せぬものなり。但し此の中にて、鹿苑藏教のみは、未だ顯露に圓教を説かず、其餘は皆顯露に圓教を説く。一〇頁の圖を見よ。故に上根のものは、同じく入實すといふも、藏教にて入實するものは密入といふ、即ち密説般若を聞きて、密説法華涅槃の

理に證入するの道理故、之を密入といひ、一三頁を見よ。其の他は皆顯に入るものなり。故に『集註』には、前四時中、鹿苑密入、餘皆顯入、故云、味々得入一といへり。然るに若し果して上根のものは、一味にて入實せば、前に中根のものは、一二三四に入實すといふ、一丈は無用なり、一は上根に限るものにあらずやとの疑あり、されば或は之を誤字なりといふものあれども、前の如く中根のものは、一を経て二に至り、三に至り、四に至りて得悟すといふ意味にて、一二三四といひしにて、一にて得悟するもの中根にありとのことにはあらずと見る説もあり、いづれにてもよきなり。○何必須待法華開會とは、已に上根のものは、法華開會以前に無明を断じ、中道を見る、然らば法華の開會を待ちて始めて中道に入るべきにあらず、唯増道といひて、圓實の道を益増進して、初住のものは二住に進み、二住のものは三住に進み、漸次益無明を断じて、中道を多分に證得するにあるのみとするなり。○法界實相は、『輔行』に、實相是別理、法界是圓理とあれども、法界といふも、實相といふも、畢竟同一なり、唯前に味々といひしゆゑ、今法界實相と重ねて、別教の實相圓教の法界を出せしまでのことなり。別教にては實相といひ、圓教にては法界といふ、即ち

一分無明を斷じ、一分中道を證したると、(即ち別教の初地初住なり)二分無明を斷じ、二分中道を證したると、(即ち圓教の二住)の區別四七頁の上にて、名を異にすれども、所證の理は唯一なるのみといひて可なり。

(通解)扱て此の五味を以て、五時に配當するには、二種の理由あり、一は相生の次第、二は濃淡の次第なり、相生の次第とは、教が華嚴、鹿苑、方等、般若、法華、涅槃と順序を立て、其の次々の教を相生すること、乳より酪、酪より生酥、生酥より熟酥、熟酥より醍醐を生ずるが如くなればなり。而して其の乳は何より生じたるぞといふに、牛より生じたり、これなほ華嚴の佛より生じたるが如く相似たり。然らば其の相生の次第につき、華嚴の教を乳といひ、鹿苑を酪といふ等に、特別の意味ありやといふに、そは機によせて考ふれば、華嚴の座にて、機は如聾如啞にて、薄きこと乳の如く、第二時にはそれが轉じて聖者となり、三時、四時と漸く轉じ去る相生の次第につきて、乳酪等の名義に相當することゝなるなり。(之を以て約機相生となす勿れ、こは單に機に従へて相生を談するのみ)斯くの如く、約教相生の次第によりて、五味を五時に譬へたるもの、これ第一なり。次に第二の理由は約機濃淡

にて機の上に熟することの濃淡の次第あるなり。(前の機の上の相生と意味同じからず、相生は唯轉する次第につきての譬なり、今は機の熟する上の譬なり)勿論教を聞くところの機には上根のものあり、中根のものあり、下根のものありて、上根の者は華嚴の席にて直ちに入實するか、或は始めて鹿苑の會座に列なり、こゝにて直ちに入實密なりするか、或は方等、般若、何れにて聞くも、タ、ハ、一度にて入實鹿苑の外はすべく、毫も法華の開會を俟ちて始めて中道を見、法界に入るの迂路皆顯入なりに辿るを要せず、唯法華に入りては、増道するだけのものに過ぎず。中根のものは、タ、ハ、の一度にて入實することこそ難けれ、或は二度(鹿苑)か、三度(方等)か、四度(般若)目には、屹度入實するものなれば、これ亦法華の開會を要せずして實相に入り、増道するだけのものなり。されば五時の上にて濃淡の順序を經、法華の開會に至りて、始めて中道を見るものは、下劣の根性、即ち最も鈍根のものなれば、五味の濃淡を、五時の機の濃淡に譬ふるは、鈍根のものゝ上にていふことなり。即ち此の鈍根のものは、先づ華嚴の座にては、如聾如啞にて、凡情を變せざれば、出たまゝの乳の如く、それが第二時に至れば、三藏教の修行となり、見思を斷じ、生滅の四諦

を觀じて、凡夫轉じて聲聞緣觀の聖者となる、これ機の漸く熟したるところにて、乳の酪となれるが如し。次に方等にて、此等小乗の徒、彈呵を受けて耻小慕大の念を起し、通教の密益を受け、次に般若に至り、窮子が長者の命により領知するが如く、加被力を受けて轉教し、別教の密益を得、以上は酪の生酥となり、熟酥となれるが如し、此に至りて漸く法華の開會始まり、上中下三根の種類に隨ひ、法譬、因緣三周の説法により、各初住に入り、八相の記を受け、無明を斷じ、中道を證する、なほ熟酥の變じて醍醐となるが如きなり、之を濃淡の次第とす。以上相生濃淡の二義は、これ五味を五時に比説する所以のものなり。

上來述べ來れるところにて、五時五味の化儀、四教の大綱を説き終はれり。

(参考一)化儀の四教につき、五時の順序年代を、歴史上の事實として之を證明せんとしたるは、また本宗の説なり、此の説によれば、

一、華嚴—『華嚴經』に、於菩提道場、始成正覺とあれば、此の經が佛成道の初め、第一着の説法なること疑なし、即ち成道の後一七日間之を説く。

二、鹿苑—諸部の小乘經には、初轉法輪といふことあり、然し『法華』には、脱妙

(衣)着龜(衣)とあれば、第二時なり。

三、方等—『大集經』に、如來成道始十六年とあり、以て方等部の之より始まるを知る。

四、般若—『仁王般若經』に、如來成道二十九年、已爲我說、摩訶般若とあり、『摩訶般若』は、『大品般若』のことなり、『大品般若』は般若説法の第一着故、般若部の説法之より始まるを知る。

五、法華涅槃—『無量義經』に、四十餘年未顯眞實と説く、『法華』の眞實説法は、四十餘年に始まることを知る、『涅槃經』には、臨滅度時といふ、然らば此の二經の最後なること知るべし。

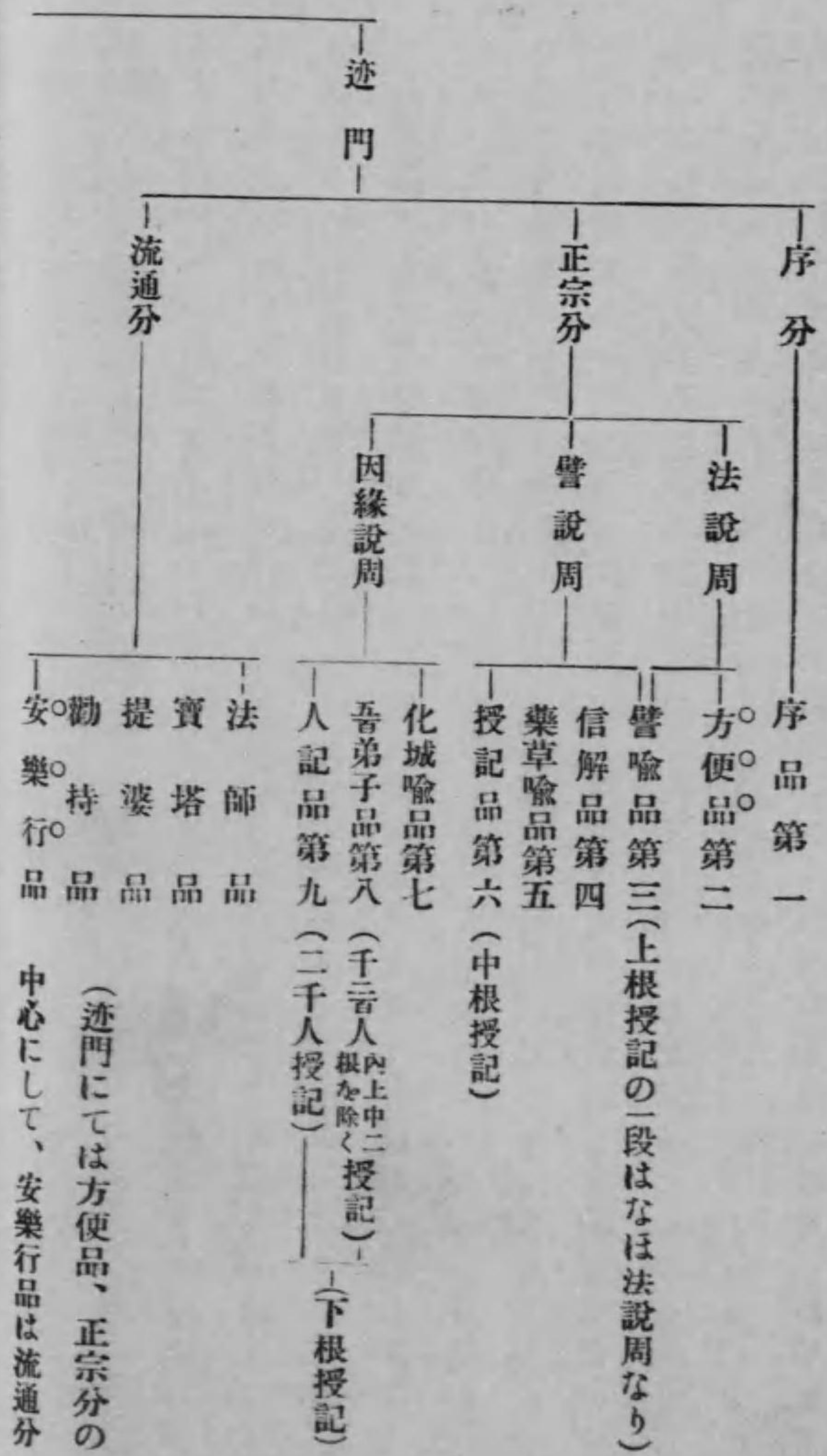
以上は別して五時の次第を證明したるものなれども、詳に考ふれば、或は小乘にして、却て法華の後にあることあり、華嚴は初時より通じて法華涅槃の後に至るなり、一概して論すべからざるものゝ如し。これ佛が時に應じ、機に應じては、必ずしも五時の次第に拘泥し給はざりしによるものならん、之を通の五時といふ。故に『集註』には、非別五時無以見如來說法、次第非通五時無以見教

法、融通」と。但し以上は古來學者の説のみ、今日の史的研究の結果如何に至りては、今言ふべき限りにあらず。

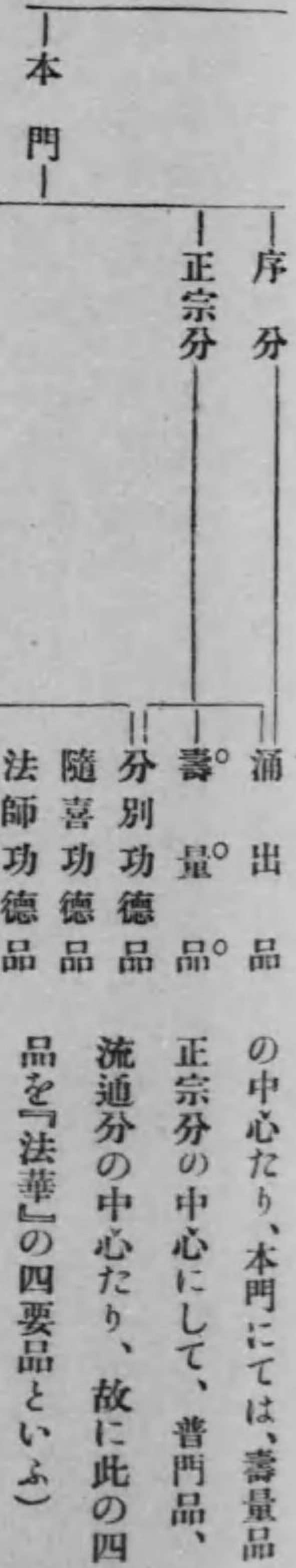
(参考二)『法華經』は總べて八卷ありて、其の内容は二十八品に分る。二十八品の中、前十四品を迹門とし、之に序分、正宗分、流通分あり、後十四品を本門とし、これにまた序、正、流通の三分あるなり。迹門は諸法實相の理を詮顯するを目的とし、理論説述の一段なり、本門は佛身久遠實成の事を開顯するを目的とし、事實證の一段なり。迹門の正宗分に、法説周、譬説周、因縁説周の三周説法の區別あり、これ天台大師の説によりて言ふなり。法説周は方便品に於て、正しく諸法實相の理を説き、小乗の機を轉じて大乘に入らしむ、此の説法により先づ機熟し、成佛の記を受くるものは舍利弗にして、次ぎの譬喩品の初めに於て、佛は舍利弗に對し、汝未來に成佛して華光如來と號すべしとの認可を與へ給へり、これ即ち授記なり、以上を上根に對する法説周と名づくるなり。譬喩品の三車四車の譬喩は、中根に對する説法にして、之を法説周とし、信解品にて、須菩提、迦旃延、迦葉、目連等佛の譬説により、大に感悟する所あり、喜悅の餘り、自己の

領解を述べ、これ即ち長者窮子の譬喩なり。佛また之れを聞き、藥草喩品に於て、佛説は唯一なるも、之を聽くところの機根隔歴して差別あるがため、二乘三乗の別を生ずる所以を示し、やがて授記品に於て、迦葉に光明如來、須菩提に名相如來、迦旃延に閻浮那提金光如來、目連に多摩羅跋旃檀香如來の記を授け給ふとある、これ中根に對する授記なり。化城喩品は、釋尊と、法華會座の諸弟子との關係の、大通智勝佛以來の久遠の因縁なることを説き、種熟脫三益の事實を示し、二乘淺近の説法は、皆此の法華脫益に入らしむる手段に外ならずといひ、化城の譬喩を擧げて之を明し給へり、化城喩品の名之に基く。此の説法によりて、此に集まりし千二百の羅漢の中、上舉の上根中根の五人を除ける餘の下根のもの、富樓那、阿若憍陳如以下五百の阿羅漢先づ記を受く、これが五百弟子授記品なり。但し五百以外の七百人(千二百人なれば、五百以外、大體七百人)も、引き續き記を授かりしことは勿論なれども、經には顯説せず。次ぎの人記品には、阿難、羅睺羅以下また授記を得たることを説く、これ千二百以外、別に會座にありし二千人の阿羅漢の授記を示す、以上、千二百と二千の授記は、化城喩品の、下根に對する

説法により、其の結果として授けられたる、即ち下根の授記なり。なほ参照のため、二十八品の名稱を左に示し置くべし。



(迹門にては方便品、正宗分の中心にして、安樂行品は流通分



の中心たり、本門にては、壽量品、正宗分の中心にして、普門品、流通分の中心たり、故に此の四品を『法華』の四要品といふ)

自下明_三化法四教_{第一三藏}。第一三藏教者。一修多羅藏_{四阿含二毘尼藏}。五部_律。三阿毘曇藏_{俱舍婆沙等論}。

天台四教儀講話

自下は化法の四教を明す。第一に三藏教とは、一に修多羅藏_{四阿含}二に毘尼藏_{五部律}三に阿毘曇藏_{俱舍、婆沙}なり。此の三藏の名は大